

成程、料金をより高價に支拂つてゐるだけに、納税者と見做してくれるのかも知れぬ。兎に角この汽車なれば、税關吏も紳士の取扱をしてくれることは疑ひない。ところで、大寺君だけは一人別に英國人と同室になり、濫い顔をしてゐるが、先に寢衣に着替へる間、室外へ出てゐてくれと言はれたのには、すつかり機嫌を悪くしてしまふ。

### 國境の深夜

果して獨佛國境ケルンへは夜中の二時につく。そのピタリ止つたなり動かなくなつたときの靜かさは、實に物凄いはどだつた。

その靜寂な夜氣をふるはして、獨逸の税關吏が調べにまはつて來たのが、すぐ車室の外のやうに聞えて來る。先に車掌に、

「睡つてしまふからよろしくたのむ。」と、いつてバツスホール(旅券)・切符・靴の鍵等一切渡して置いたせるか、僕と鈴木君とは上下の寢臺の同室だつたが、その僕等の一室だけは前を通るとき「ジャポネー! ダウー(日本人二人)」とか何とか言つただけで、氣味の悪い靴音を響かせながら素通りして行つてしまつた。大寺君は不幸にして、英國人と同室だつたがたゞ言譯的義務的態度で、起された



ことは起されたが、英國人には二言三言言つたきり、大寺君には一言の質問もせず、たゞ顔をのぞきこんだだけで済んでしまつたとのこと。

これでほつと胸撫で下ろしたが、實際税關吏の來るまでは、寢たふりをしながら耳をすまし、息を殺して待つたものだ。そしていざといふときの用意にすぐ起きて、若しこゝへ下ろされてもまごつかぬだけの用意はしてゐた。雪が降つてゐるのか、實に外は凄いほど靜かな晩。二三室も隔たつた室だらうか、税關吏と女の乗客とが言ひ争つてゐる聲が、魔人の呪ひのやうに響いて來る。何とも言へず薄氣味がわるい。

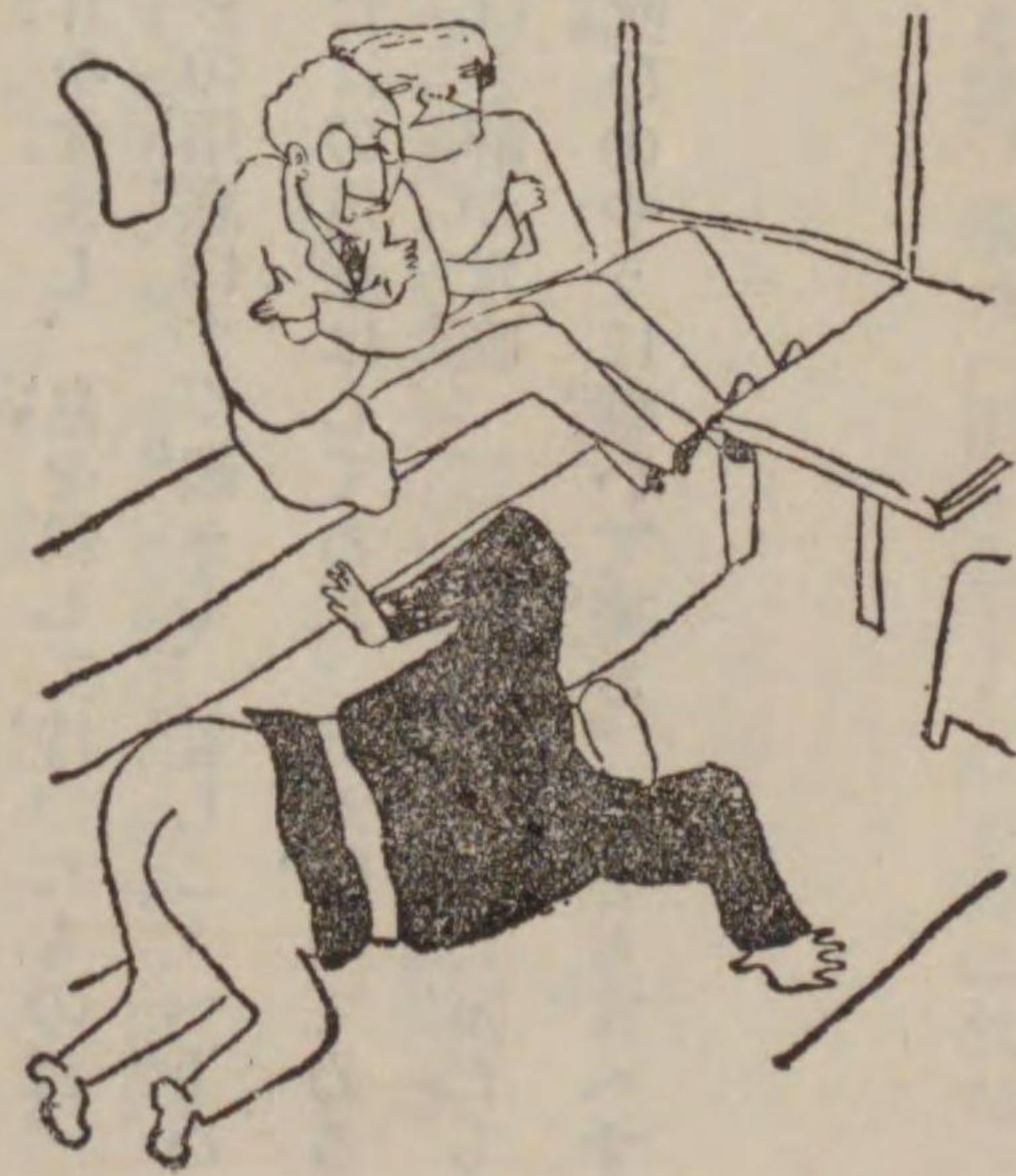
### 荷物 の 虐 殺

停車はこの税關調へのために、一時間と十分を費してしまつた。急に安心したせるか、その後はグツスリ寢込んでしまひ、眼をさましたときにはもう佛國內に入つてゐた。



顔を洗はうとしてゐると、ちやうどジヨウモンといふ停車場につく。こゝがまた佛蘭西の方のお關所だ。時を移さず、税關吏が乗込んで来る。それは軍人のやうな嚴めしい服装をした二人の偉丈夫、ドヤ／＼と僕等の車室へも入つて来て、僕の大きい方の靴を開かせ、減多矢鱈に引つくり返して調べる。搔き廻す方は面白からうが、折角工風に工風をこらしてつめ込んだのを、無残な眞似をするものだ。まるで荷物の虐殺だ。

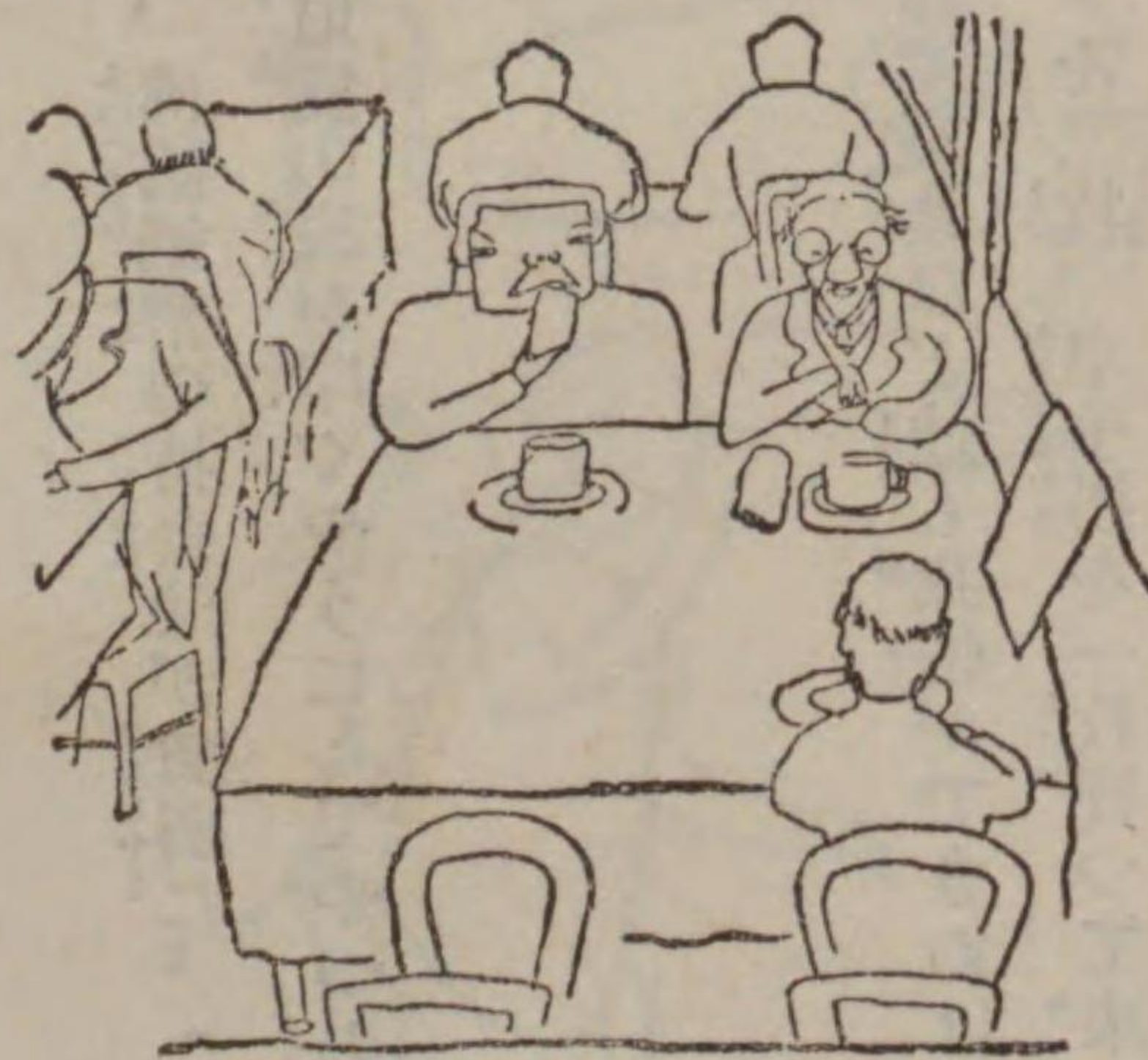
結局何も有税品がなかつたと見え引上げて行つたが、一人の下役らしいのは忠勤振りを見せようとてか、洗面器の戸棚を開けて見たり、寢臺の縁の下まで腹這ひになつてのぞき込んだり、随分御苦勞な眞似をやる。なか／＼嚴重だ。疑り深い。



再び麵麩の國へ

ふと吾にかへると、汽車はいつの間にか反對に走つてゐる、食堂車へ行かうとすると、その食堂車

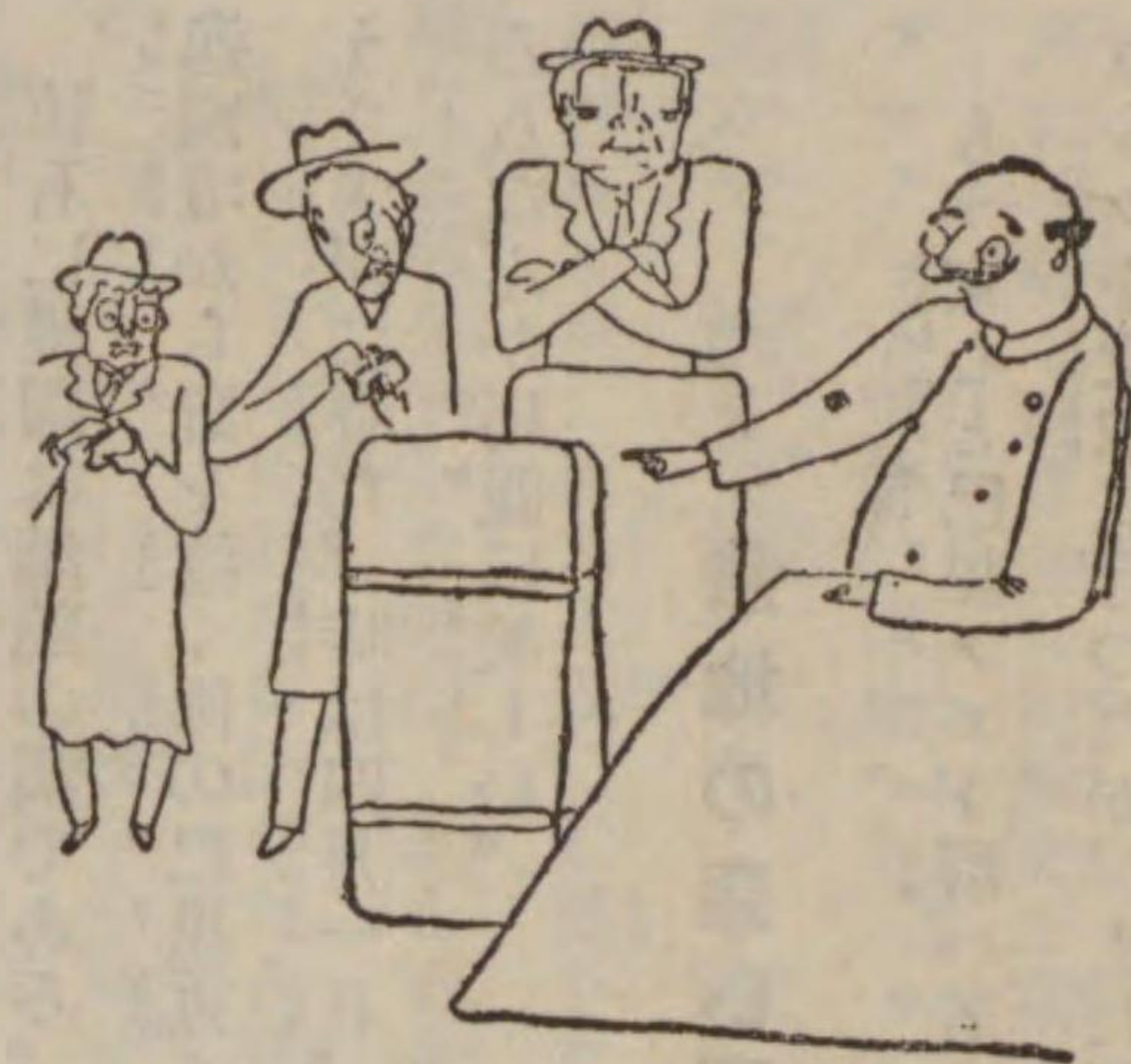
がまた反對の側に連結されてゐる。しかも内部の様子が全然變つてしまつた。つまり獨逸國內だけは獨逸の食堂車がついてゐて、ケルンを出るとき既にそれ等は取り除かれ、佛國の食堂車がそれに代つてゐたのだ、急に汽車そのものからして佛國氣分になつてゐる。ゴツゴツしたヘレン・オバー(獨逸のボーイ)が姿を消して、お世辭のよい絶えず莞爾してゐるガルソン(佛蘭西のボーイ)に變つた。流石に佛國は麵麩の國である。俄に麵麩が美味くなつた。雪が獨逸國境から野を遠く佛の巴里近くまで降つてゐるが、近郊の野はもうさすがに春だ。時は四月一日、林の中に黄水仙が一杯咲き亂れてゐるなんか馬鹿に美しい。



意地の悪い天日様

もう安心と巴里ノルド驛へ着くなり、タクシーに手荷物をつかり乗せて大寺君だけ預けた二大トランクを受取に行つたが、また何ぞ故障でも起つたのか、いくら待つても歸つて來ない。





果して又候、税関問題にひつかつてしまつたのである。心配した獨逸では事もなく済んで、巴里へ来てこの始末とは、少々お天日様意地が悪い。それも書籍は一切お構ひなしたつたが、玩具、レース類、その他新調と認められたもの一切を重量で加税された。それがちやうど二百法ばかり。

ところが獨逸歸りの連中だから、佛國紙幣の持合せが貧弱だ。これでもまた大分まごついたが、三人財囊の底を叩くやうにしてやつと間に合つた。

### 酸ッばい室

そこで今度は鈴木大寺兩君の宿シチーホテルに同居することにした。寢具など迎も我慢ができぬほど垢じみて古びてゐるので、早速近所のマカザンへ駆けつけ、シーツを二枚、卓子掛を一枚買つて来て夜着の上下を覆ひかぶしてしまひ、煤けた壁には獨逸で買つたカーテンを張りつけたりしたところ、すつかりこれで襪襪隠しが出来上り、これなら當分落着けさうだ。

それで僕のは日割だから一日二圓くらの室代、何といつても安宿には相違ない。獨逸で驕奢を極めた天罰として觀念することにする。

獨逸へ行く前はそんなこともなかつたが、四階の大寺君の室は、どうしたのか入るとブーンと酸っぱい奇臭の刺戟に襲はれる。留守中に南京蟲退治をやつたに相違ないのだ。大寺君は案外平氣で、このすつばい室に、すつばくなつてうづくまつてゐる。以來大寺君の室を何番々とはいはず、すつばい室と命名した。

### 三十文の食事

ノルド驛ですつかり大寺君の税金のために、財囊の底をはたいてしまつたので、佛國紙幣は三人ながら全く一文なしになつてゐる。ところで今日は土曜日、銀行も十二時までには相違ないと氣づいたときには、もう十二時に三十分前だつた。鈴木君は一向平氣で、しかも今起きたばかり。だらしない寢衣姿で楊枝をくはへてゐる。とても行動を共にしてゐる日には、今日は勿論明日一日(日曜だから)





干乾の憂目を見なくて好ならぬ。

たうとう鈴木君も出かけると言つて、洋服に着換へようとしてゐたのを、構はず打棄つておいて、大寺君と二人で外へ飛び出し、タクシーを拾つて大急ぎ、日佛銀行へと駆けつけたところ、十二時に二分前といふ際どいところで間に合ふ。まるで活動寫眞のやうだ。

それにしても鈴木君のやつあまりに落着拂つてゐる。それが癪に障り、彼奴一人打棄つておいたら、一文なしで朝食兼晝食をどう處置するか、一番この際、虐待を敢てしてやらうと、そのまゝ出たつきり、暮方まで歸らなかつたところ、さすがの先生も餘程參つたらしく、机の抽斗やら、上衣・ズボン・外套のポケットなど、底を叩いて見て大騒ぎをして、やつと拾ひ集めたのが僅かに銅貨で三十文、これぢやあビフテキどころか、珈琲も飲めない。

仕方なく、麵麩屋へ駆け込み、麵麩だけで済ましたと、眼玉をギロくさせてうらめしさうな顔。



### おさんどんの貴婦人

ちやうどその晩だつた。うか／＼してゐるうちに、もう夜の九時が鳴つてしまつた。さあ大變だ。うか／＼してゐると夕食にありつけぬぞ、あわてゝ駆け出したが、最早時間外になつてしまひ、どの店の店も皆商賣を仕舞つたあと。

それでもやうやくのことで、一軒さがしあてたはよいが、そこでも料理は凡て出拂つて麵麩しかない。

鈴木君にとつてはよつほど麵麩に縁の深い日と見える。しかしこの際贅澤なことを言つたところで始まらぬが、ドシ／＼構はず椅子を片づけ、見る／＼食事中の僕等は、その積み重ねられた残骸の椅子のために包圍されてしまふ。

電燈も吾等のところ一燈だけを餘して、遠慮會釋もなく消してしまつた。こんな心細い夕食に出會つたことは、まあこれまでなかつたやうだ。





日本人の習慣として、ついこんなことにもなる。ところでふと傍を見ると、今まで掃除に憂身を費してゐたおさんどん連が、すっかり化粧ができて、立派な貴婦人になりすましてゐる。

### 巴里の靴

巴里の街路は土の感じは毫も起らない。町全體が一個の宏大な殿堂で、ちやうどその廻廊を絶えず行くやうな心地、靴の裏なぞちつとも汚れない。

却つて始終磨かれて、一種の光澤をさへ呈してくるくらゐだ。しかも毎朝磨きをかけるので、僕たちのものでさへ勿體ないほど輝いてゐる。婦人なぞ、寢具の上に乗るまゝ、寝ころがるばかりか、その毛布で磨くさうだが、却つて毛布の方が光輝を益すかもしれぬと思はれるくらゐである。

現在かうした美しい道路を見て日本のことを思ふと、情け

なくなる。外人が東京を評して曰く、

「住宅拂底を叫んでゐる癖に、町の中央に田甫が澤山あるぢ



やあないか。」と、これはあまりに皮肉に過ぎてゐるが、實際それくらゐに感ずるかも知れぬ。可成頑冥で、あまりものに感心せぬ方だが、道路の問題となると、流石に兜をぬがずにはをられぬ。

### 巴里の流行

巴里の女は蝙蝠のやうだ。皺澤山の黒い毛皮の外套を引かけ引ずつて濶歩し、日が暮れると踊りまはる。流行は男では、チヨツキの一番下部のボタンを一つ外しておくこと。



とかで、馬の尻尾を染めて代用してゐる向が多いとか。

女は腕深の手袋を裏返して、指の先までまくしあけてゐること。これは尤も、裏側の刺繍模様を見せなくては不利益だと考へたのだらう。服装の形状、その色彩の取合せ等は、千人千態だが、かうした些細な流行だけは、千人が千人皆同型らしい。で變つた婦人の服装のうちには、支那の辨髮禁止から、その廢殘の辨髮を輸入して、外套の兩脇・裾・首の周圍等に長く垂下させたのがある。しかしそれはあまりに高價に過ぎるため

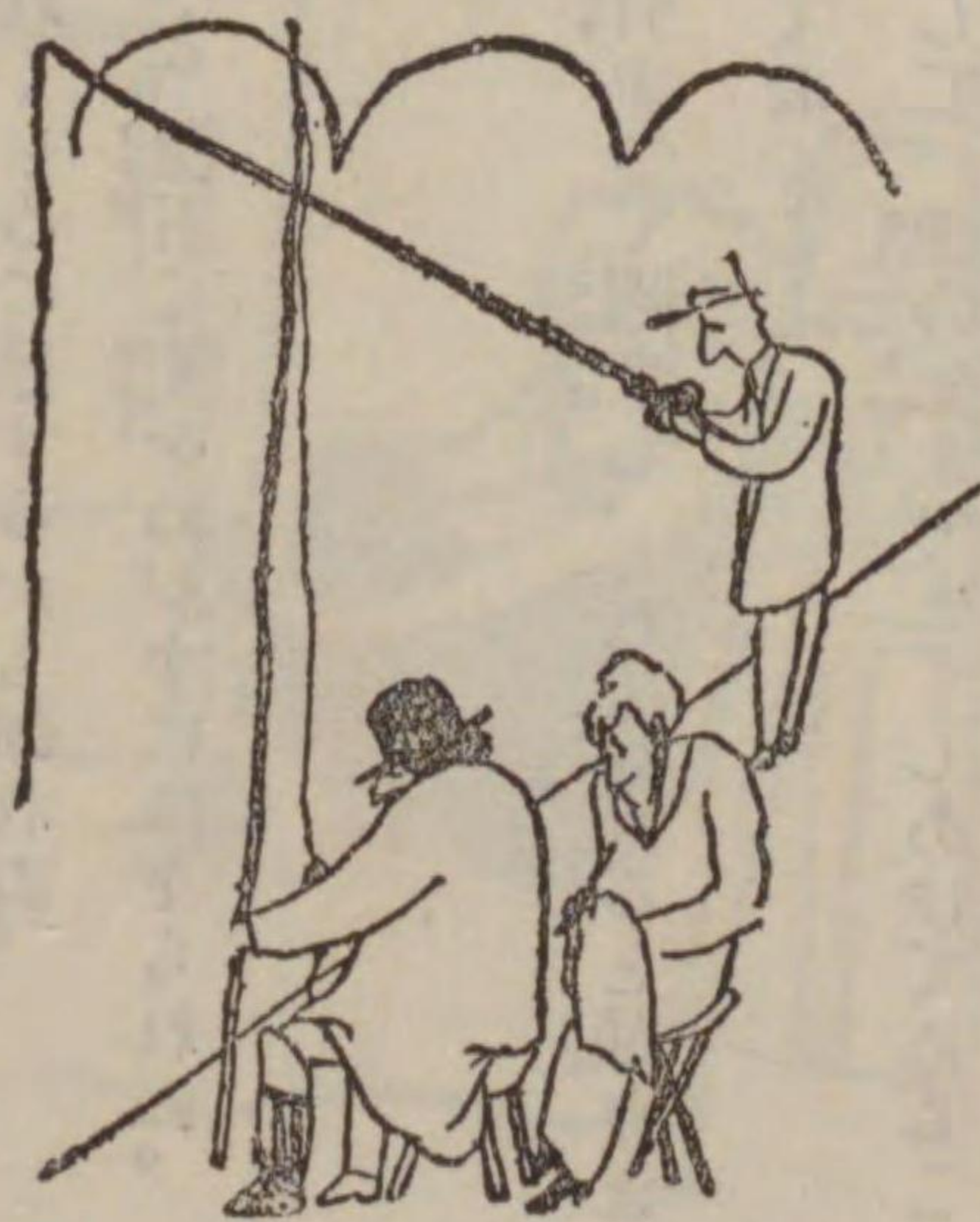


何はともあれ、大體巴里の女は、顔や體に繪を畫いてゐるやうなものだ。まづ御覽、あの顔を……  
 睫毛を染め眼縁を眞青に限取り、唇の臙脂はまた實に強烈を極めてゐる。  
 日本の職人衆のやうにグツと下けて腰よりすべり落ちさうな細帯を締めるのが、また無闇に流行してゐる。従つてお尻を振り振り歩くのが新型といふわけになる。

### 巴里の大公望

巴里にもなか／＼大公望が多い。どんなに寒い日だらうが、セーヌの上流・中流・下流・到るところにその影を見ることが出来る。

多くは釣竿が機械仕かけだ。手元のねちをきり／＼まはすと竿の先端から繰り出される糸が、素早く出たり引つこんだりする。その糸の先には銀色の浮子が光る。支度は豪勢だが、釣つたのをまるで見たことがないといふ評判だけはたしかだ。  
 廢兵らしい跛足の紳士が婦人を携へて、頻りに釣れたためしのない魚を釣つてゐた。巴里得意の舞踊もできず、他に所在が



ないのか、ふと涙が出たつけ。

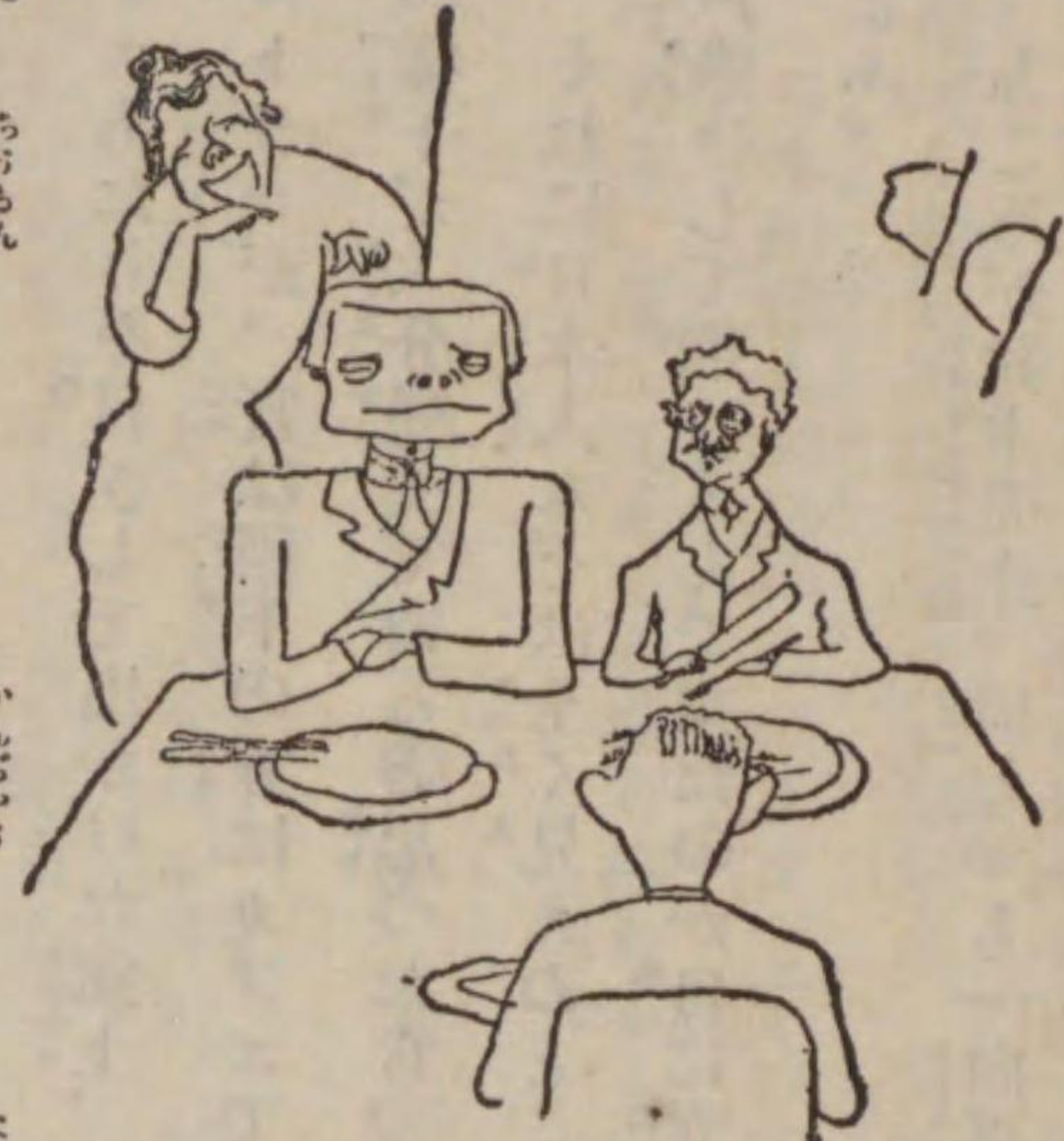
### 高價なアスバラガス

大體物價の安い獨逸から歸つて來た當座は、巴里のもの凡て高價に感じられて、人間が兎角しみつたれになりたがる。

あれほど書籍道樂になつた大寺君も、巴里へ歸つてからはてんで本屋の門にも立たない。毎日の食事も先づ／＼シヤルチエ程度の安料理で大いに満足してゐたのはよかつたが、一日矢張りそのシヤルチエあたりを目ざして出かけた途上、急雨に出あひ、すぐ傍らの安値料理と思ひ込んで飛び込んだレストランが、實は階下の方はカフェで、食堂は二階の方、室は狭く、但し立派だが客も稀で、あたりの様子が大分變つてゐると思つたら、巴里でも相當の名物料理らしく、價格表を見ると滅法高い。それに日本人などは全く見えぬところと見え、異國人と見てとつてか、また貧弱な服装をした連中、戸惑ひして飛び込んで來たのが目に立つたのか、女中共クス／＼ツと笑ひ崩れる。いやになつてしまふ。

ところが鈴木先生、何もかも一向平氣で、アスバラガスを濟して註文する。大寺君傍でその價格を





作に註文したところ、勘定となると梨一個五十圓、ミカン三十圓だったと。まさか大風呂敷でもあるまい。それも季節による。

### 馬子にも衣裳

日本を出てから船中は勿論、最初の巴里滞在中も獨逸の宿屋でも、殆ど毎日浴湯を缺かさず済んで来たのだが、不幸にして今度のシチーホテルは、どうしたわけか絶體に風呂の設備がない。少々上等のホテルや間貸は無論のこと、普通の下宿屋でも、大抵風呂場一つくらの持ち合せてるのに、こ

見ると、十五法とあるので目を丸くする。と聞くと鈴木君もオヤオヤと言ったが追つかない。アスバラガスも走りは高いにきまつてるる。  
兎に角散々な目に遭ふ。あまりしみつたれた罰だ。少々生活改善の必要がある。

しかし知らぬ國へ来てうっかり驕奢振を發揮したら大變だ。

新渡のさる金持の失敗話にこんなものがある。ある料理屋で無雜

れはまた餘程劣等と見える。何といつても日本人だ。佛人のやうに、酒精で毎朝身體を拭ふだけで、一ヶ月どころか一年でも入浴せずに済ますやうな真似は出来ない。否一週間だつて我慢は出来ないのだ。

堀君の下宿ソムムラルには、入浴毎に三法宛支拂ふ風呂があるを知つて、大寺鈴木兩君はそれへ時折押しかけて行くことにしてゐる。

僕も一度そのお蔭を蒙つたが、試みに町の錢湯に入つて見たくなり、女中マデレーン嬢に案内を乞ふと、早速承知してくれる。

このマデレーン嬢と來ては、田舎ツペー丸出しで強力なことに驚ろくばかり、書籍を一杯につめた大トランクを一方の肩に擔ぎ、他の一方の手にはまた靴を提げて、四階五階へ狭い暗い螺旋狀の階段を上つて行つて平氣である。

それ五法もやらうものなら、飛びつくやうな表情をやる。いつも顔から煤まみれになつて、ほろくの勞働服一枚で無闇と働く一方だ。それでも外へ出るときは鏡に向ひ、ちよい





と鴉の巢のやうな頭髮をかきまはす眞似をしたゞけでも、ボロ隠しのオバーを引つけると、見違へるほどの女振りにはなる。

しかし帽子もかむらず、往來を潤歩する姿は、決して平凡とは言へぬ。一緒に歩いてゐると氣まりが悪いくらゐるだ。

### 船上風呂

マデレーン嬢も一年間風呂知らずの組と見え、すぐ近所のやうに言つてゐる癖に、いざとなると一向その所在が分らぬらしい。辻々で巡查を見ると聞きく行く。

亂暴な案内者だ。たうとう可成り長い間町から町を引っぱり廻され、結局また後戻りしてセーヌ河畔へ出ると、これはまた案に相違した船上風呂、成程世界は広い。

船の錢湯なんてまだ日本ぢや見たことがない。船も船二階建の室數三四十も收容した、門司や香港あたりの渡船のやうなもの。それがセーヌ河上に岸に沿ふて浮んでゐると言へば、馬鹿に風雅に聞えるが、大阪・廣島の鰻船に相當するほど洒落れたものでもなく、第一美しいと思つたセーヌ河そのものからして、隅田川以上に混濁してゐる(但し塵埃は少しも流れて來ぬ)のだから、迎も麗かな眺めな



ど味はへやう筈はないのだ。

兎も角入つて見る。小橋を渡つて船へ移ると、玄關口正面の小窓から婆さんが首をのぞかせてゐる。こゝが日本の番臺に相當する。一回分二法(四十錢くらゐ)拂つて入る。

皆各室浴場で一つ窓、浴槽一臺、姿見といふ設備、扉には一錠がかゝる。

その浴槽はといふと陶器様のものと思つたら大間違、鐵製で外壁は錆に錆た不潔なものだったので全く意外の感があった。

それに洗場といふやつはなく、しかもその板敷も周圍の板ばかりも、ペンキが斑に剝落して、見るもあはれなばかりか、湯加減を三助に任しておいたら温いこと温いこと、但しこれは勝手に調節ができるだけの装置はある。

おまけにその湯は土色半透明なのにすつかり氣を腐らしてしまふ。この混濁したセーヌの水を使用してゐるものと見える。大に憤慨して、服をつけるなりドシク飛び出して來ると、後から大聲で嗚鳴る奴がある。何者かを見ると、風呂番三助子である。手を出してゐるのは正しくチップの請求だ。



## 第十一回

## 闘牛の眞似

西班牙への旅は、かの國技ともいはるべき闘牛を唯一の景物として、畫傑ゴヤ及び畫聖グレコの遺品に數多く接したのが目的であつた。しかしそれ等遺品の方は大抵何時行つても見られやうが、その闘牛となると、必ず或る一定の期間が存するに相違ない。若しもこの期間を外してしまつたならば、折角の旅も相當意義を失してしまふ譯である。然らば何月から何月までが一體闘牛期に屬するか、先づこれから調べてかゝらぬと、とんだ後悔の臍を噛まねばなるまい。ところが既にこの闘牛を見て来たといふ人にも、この期間の問題になると確答を與へてくれぬ。短時日の旅で闘牛まで見て来ようとするのは、餘りに慾深すぎるかもしれぬが、西班牙へ行つたら何としても闘牛を見ることがだと、日本を出るときから眞先に心掛け、そのためには如何に豫定に異變を生じやうとも、是が非でもこれだけは見逃すまいと決心してゐたのだから、闘牛の話となるともう何は棄ておいても一生懸命だ。マルセ



ユーから巴里への汽車中でも、乗り合した男が西班牙人と聞くや否や、このところ談忽ち闘牛に及ぶとでも言ひたいのだが、悲しいことに、闘牛のことを西班牙語で何と申すのやら……さて何と言つて聞いたものか、窮餘の一策、スケッチブックに鉛筆で二頭の牛が角つき合して闘つてゐる圖を畫いて見せたら、どうやら先方に通じたらしかつたが、折角彼方から説明して呉れても、西班牙語ときては一向解らず、何月何日頃から始まるかなんていふ質問になると、最早大問題で、たうとう要領を得ずにしまつたが、その後、同行を約した北島君と巴里の繪具屋へ行つたとき、その主婦さんが丁度西班牙人だつたのを幸ひ、今度は二人で指を二本頭上に翳し牛の角形をして見せ、モーン／＼と唸りながら雙方から突きかゝる眞似をしたりして、やつと先方の諒解を遂げ、恰も闘牛期は最早切迫してゐると分明したので、急に伊太利行を後まはしにして、今度は鈴木君一人巴里に居残り、大寺君と北島君の同行三人で、西班牙國巡禮と出かけることになつたのである。序にこの主人からマドリッドの宿屋まで紹介して貰ふ。いよく出立となると、例によつて大寺君一番小兵な癖に、一番でつかい鞆を擔ぎ出す。無論中



は空だ。今度は西班牙名物、闘牛の罐詰でもしこたま買ひ込んで来るつもりだらう。女中のマデレーン嬢に自動車を頼んだら、一走り出て行つたかと思ふうちに、運轉手臺に運轉手と並んで乗つて来る。こんなところも巴里でないと見られぬ圖だ。それはよいが、西班牙行の汽車の起點はD'Orlean 驛なのに、その第三驛目に當る Austeritz 驛の方へ飛ばされてしまふ。運轉手に首尾よく計られた譯だ。

### 西班牙式の宿

マドリッドは西班牙の首都である。こゝへ着いたのは巴里を出て廿四時間の後、丁度午前十一時であつた。兎も角もタクシーで繪具屋の主人が紹介してくれた。Arreara de sau Jermino 29 の Grand Hotel Rhin へ駆けつけた。この宿屋は西班牙人が經營してゐるらしく、一切が純西班牙式であつた。既に外觀からして古色を帯び、古い西班牙國の宿屋らしい。エレベーターで昇つて行つた三階が帳場になつてゐて、食堂はすぐ隣接した廣間。客室はその三階から上全部を占めてゐた。紹介状を見せると大歓迎で、すぐ吾等の室を決めて呉れる。吾等はこの際室よりも何よりも第一に闘牛のことが氣にかゝるので、"Toros! Toros!" と叫ぶのだつた。闘牛のことを西班牙語ではトロ (Toros) といふことだけは、繪具屋の主婦さんから教はつて来たのである。すると待つてゐましたとばかりにホテルの支

配人は、どうにかかうにか佛蘭西語なら間に合ふ北島君を相手にして丁度明日から闘牛期に入ることに、なほトロは毎年四月十六日から始まつて、毎週間に一度時には二度舉行し、十月十五日に終るといふことまで話してくれる。吾等は僥倖にもその貴い初日の前日に來合したのである。若し不幸にしてそれが闘牛期間であつても、時機を失したなら、一週間からそのために空費することにもなるのだ。あり難い。いよいよ明日は世界的壯舉、トロを見ることのできるのだ。早速ながらトロ見物の入場切符を買つて貰ふことを依頼した。

### トロ氣分

忘れまいぞ四月十六日、一生見られまいと思つてゐた闘牛を、今日こそ眼前に見ることができるのである。殊にその晴の日の初日である。闘士も闘牛もみな勝れたのが出場するといふ。實に吾等は幸運兒である。午後四時から始まるといふことがたゞもどかしいくらゐだ。午後三時三人揃つて寫真

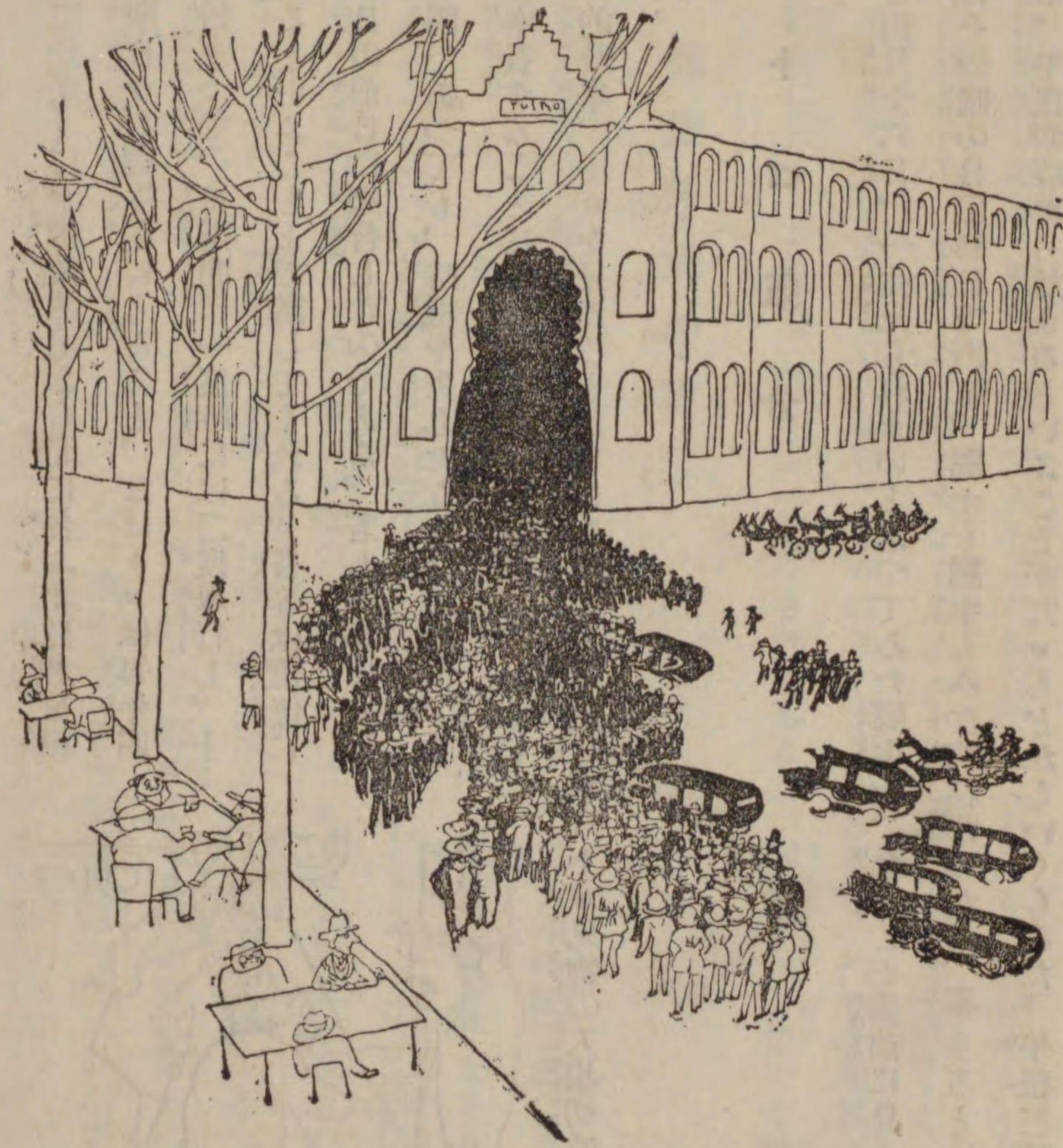




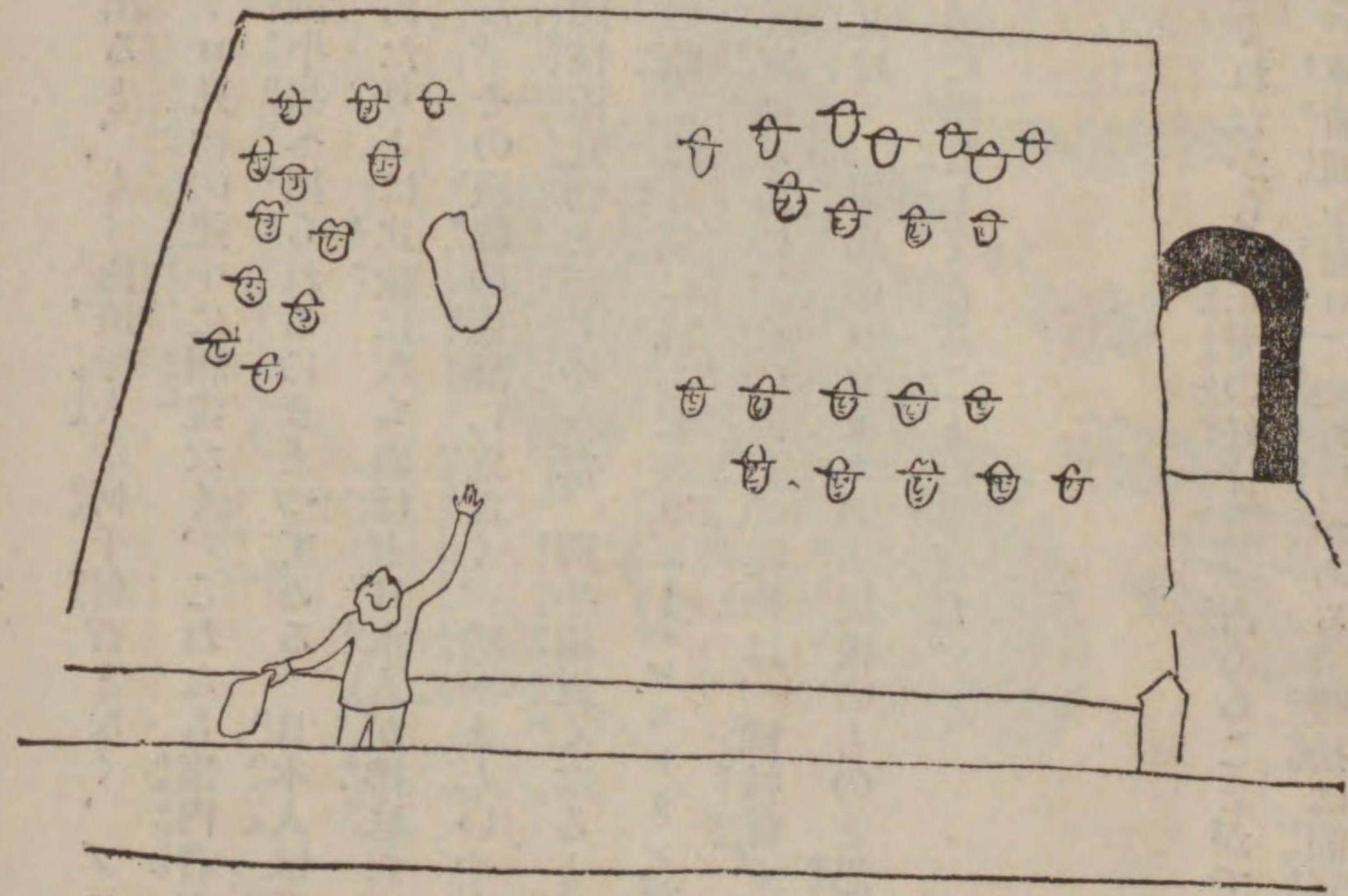
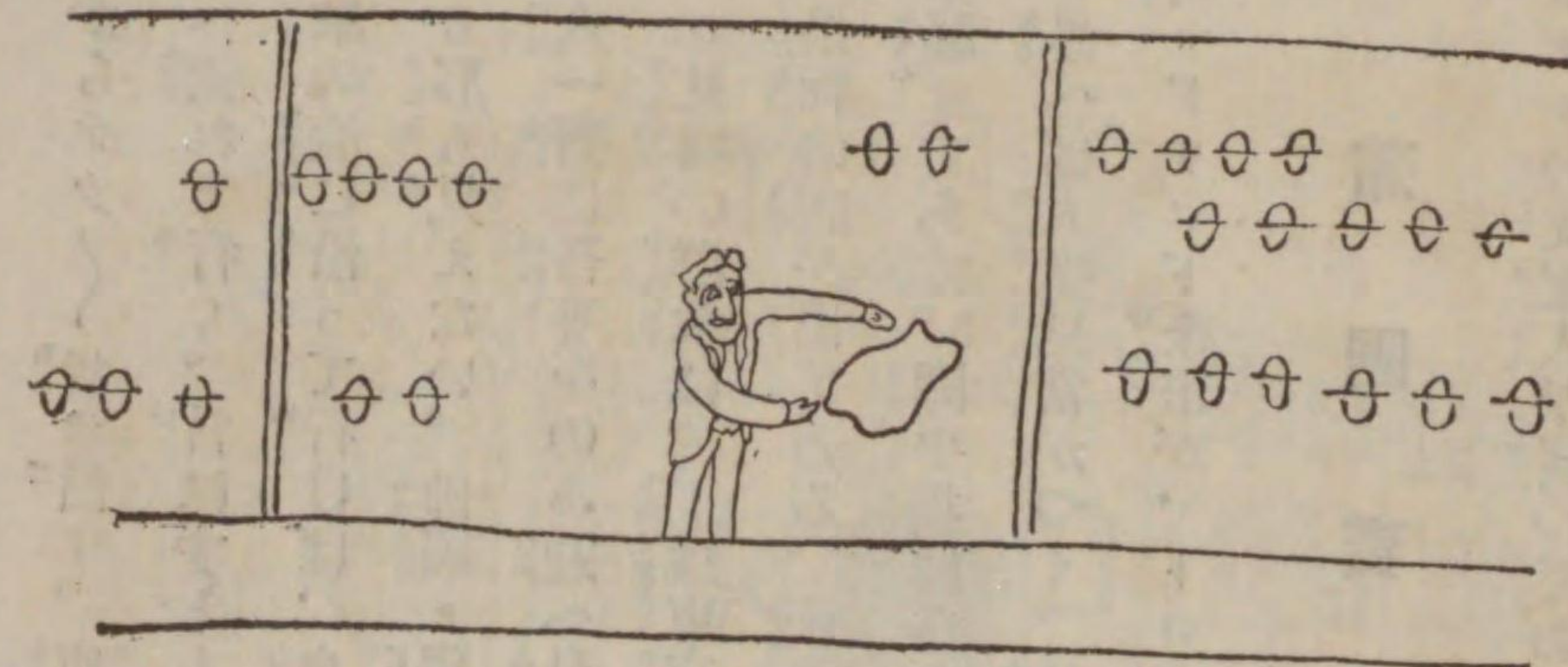
切符はホテルの支配人が買つておいてくれたから、正面の好位置を占めることができた。運のよいときは何から何まで都合よく運んでゆく。座蒲團を賣りに来る男がある。腰掛は簡単な板張にすぎぬ

蒲 團 賣 り

機肩に、宿からテク〜歩き出す。町へ出ると、もう西班牙人が何千何百となく、ゾロ〜つながつて同一方向へ流れて行く。言はずとも、トロ見物の連中に相違なく、これなら案内者などは全く無用である。群衆の流れに沿って行けば、自然闘牛場へ出られるにきまつてゐる。日本人は吾等三人より外には全く影も形も見えない。佛國・獨逸あたりとは比較にならぬほど日本人が拂底だ。餘程珍しいと見えて、行人一齊に吾等をのみ迎へ見送る。その視線の應酬に違なく、晴がましいやら癩にさはるやら、大體トロ見物の群衆は、丁度東京の國技館見物と同じやうだ。闘牛場近くなると番附を賣つてゐる。菓子、果物の店が出てゐる。街路樹の蔭には涼氣に満ちたカフェー・レストランがスラリと並ぶ。やはりお祭騒ぎである。闘牛場はなか〜立派なもの、その圓形の建物は、國技館から天井を取り去つたものと思へば大抵見當がつく。總煉瓦建で、羅馬のコロセオの小規模のものと思つても間違ひない。兎も角マドリッド全市が、トロのために熱狂してゐることは事實だ。





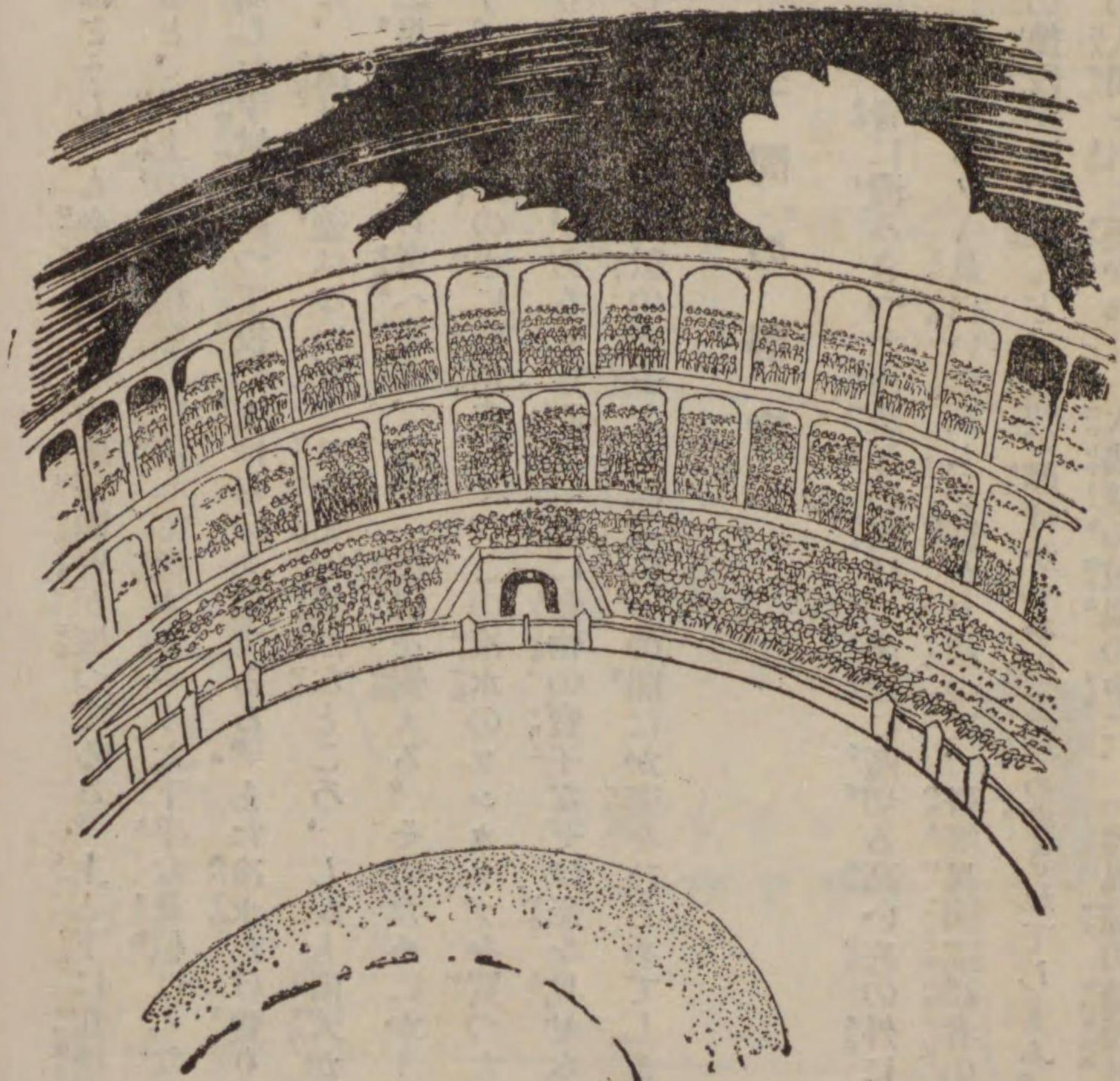


ので、蒲團はどうしても必要だ。その座蒲團賣が振つてゐる。上と下に相棒がゐる、遙な階下から巧に投げ上げると、階上の男が相應じて決して逸するやうな下手な真似はしない。馴れたものだ。支那人が劇場で蒸した手拭を絞つて投げ上げるのと似てゐる。また冷水だけ賣りに来る。尤もこの四月半ばといふのに、温度に大差はないが、日の光の強烈なところ、しかも雨天が少く、空気の乾燥が甚だしいので、巴里あたりから考へると、なほ一層渴を覚える。そのためにかうして冷水ばかりを賣りに来るのだらう。僕は矢立の水に使用すべく、この冷水のワンカップを買つた。その他には富籤のやうなものを買ひまはるものがあるくらゐで、別に食物の賣子などは影を見せない。時刻が時刻だからであらうか。しかしそれ等少数の賣子どもは、いつの間にか姿をひそめてしまつた。

空間の静寂

恐ろしいほど眞青に澄みきつた西班牙の空は、半圓に區切る高い庇の外に、高く、眩しいほど輝き渡つてゐるが、見る／＼眞白い雲たちが簇がり起つて、吾等異國巡禮者の眼に襲ひかゝる。また圓形の觀覽席の幾段かは、殆んど、人間の顔ばかりを以て埋め盡されてしまふ。その恐ろしい蒼穹の下、その幾萬かの人間を以て築かれた一大墻壁の包圍の中に、一種異様の悽慘味を潜めた一大空間、それ



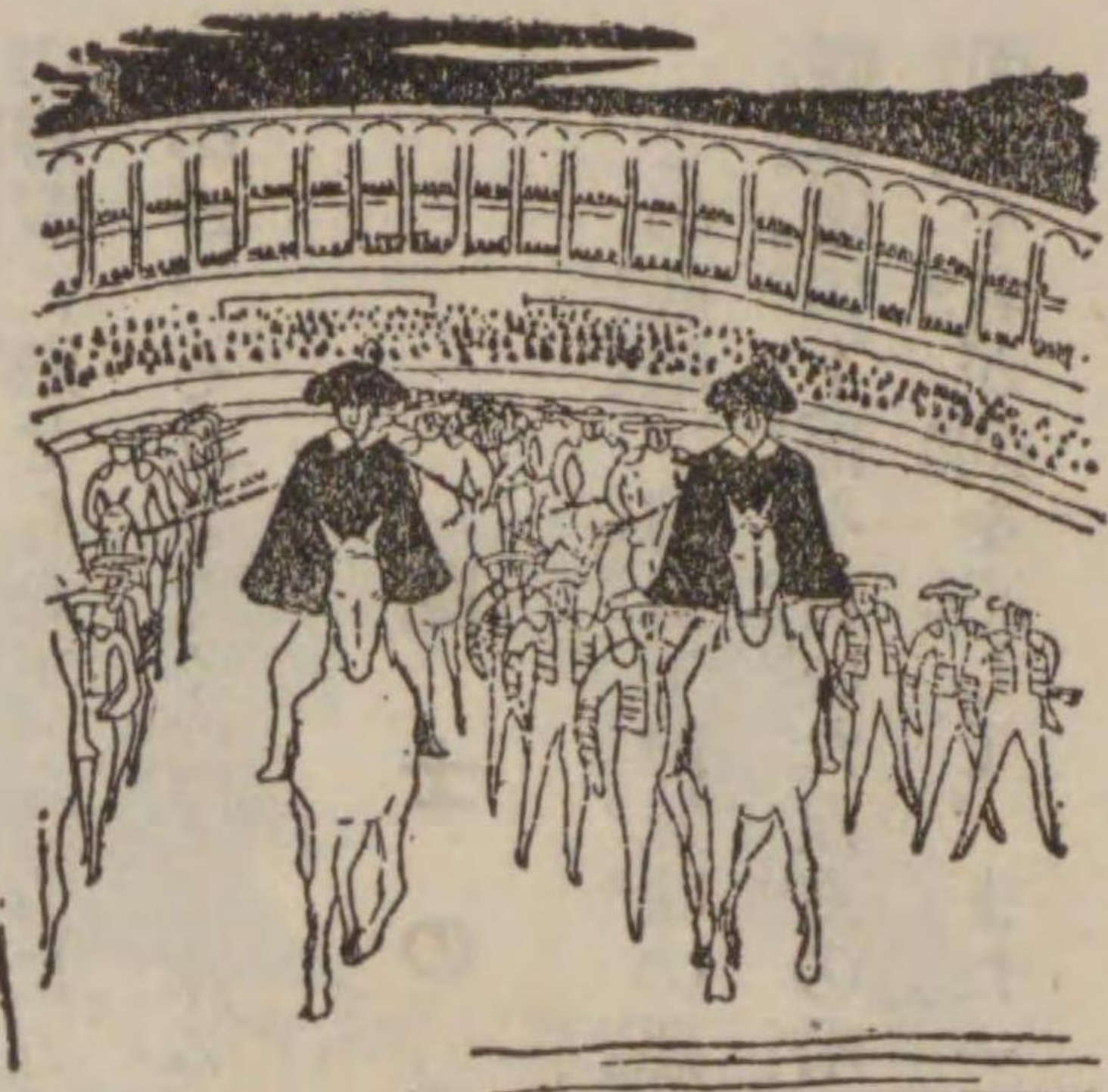


がとりもなほさず闘牛場中の活劇舞臺なのである。坦々として正に砥の如く、そこに何等一塵も認め  
 ることのできない清浄さ。冬夜の月を地上に敷きつめたかのやう。まだ半個の足跡だも印されてるな  
 いのだ。物の平な静けさ、しかもその中心よりコンパスを以て畫いたやうな、宛ら血痕そのまゝの色  
 彩をたゞへた一大圓線——それがまた土壤に滲み入るかの如くほかさながら、不思議にも鮮明に浮  
 び出てる。——その線條のその底には、何者か、潜むその静けさ。その静けさを壓して、南歐の強  
 烈な天上の光輝がガバとばかりに直射して来る。實にその光景、この活劇の起る前一分間の光景とい  
 ふものは、正に静寂の悽慘の極致であらう。観衆一齊に黙然として、身動きもせず、只管この嵐の前  
 の静寂に魅せられて、彼方に五感の一切を打ち注いでるのだ。懐中時計が胸のあたりにうごいてる  
 のが、それとなく聞えて来る。

### 闘士の出場

この莊嚴で鈍重で薄氣味の悪い静寂なシーンは、ほんの束の間であつた。丁度吾等の正面する彼方、  
 観覽席の下部を貫いた左右の暗い隧道の扉が開かれると、何れも暗の衣裳を着飾つた勇敢な闘士の面  
 面數十名が列を正して、まだ一點の痕跡もない、太古の如きその圓形の淨地を恐れ氣もなく踏み亂し





Salida de las cuadrillas

つゝ出場する。壯観である。満場の拍手が起る。いよゝ世界的活劇の幕が切つて落されたのである。拍手のぱたり止んだときのそのまた静けさ。その静けさのうちに闘士中の殊勳者、御大將ともいはるべき偉丈夫が、吾等の正面棧敷に近く歩を進め、帽を脱ぎ慇懃に一禮を捧げると共に、何事か慎重な態度で陳述する。それは恰も吾等座席の眞上、即ち正面棧敷の貴賓席に控へた司催者に向つて、「決して卑劣な眞似は



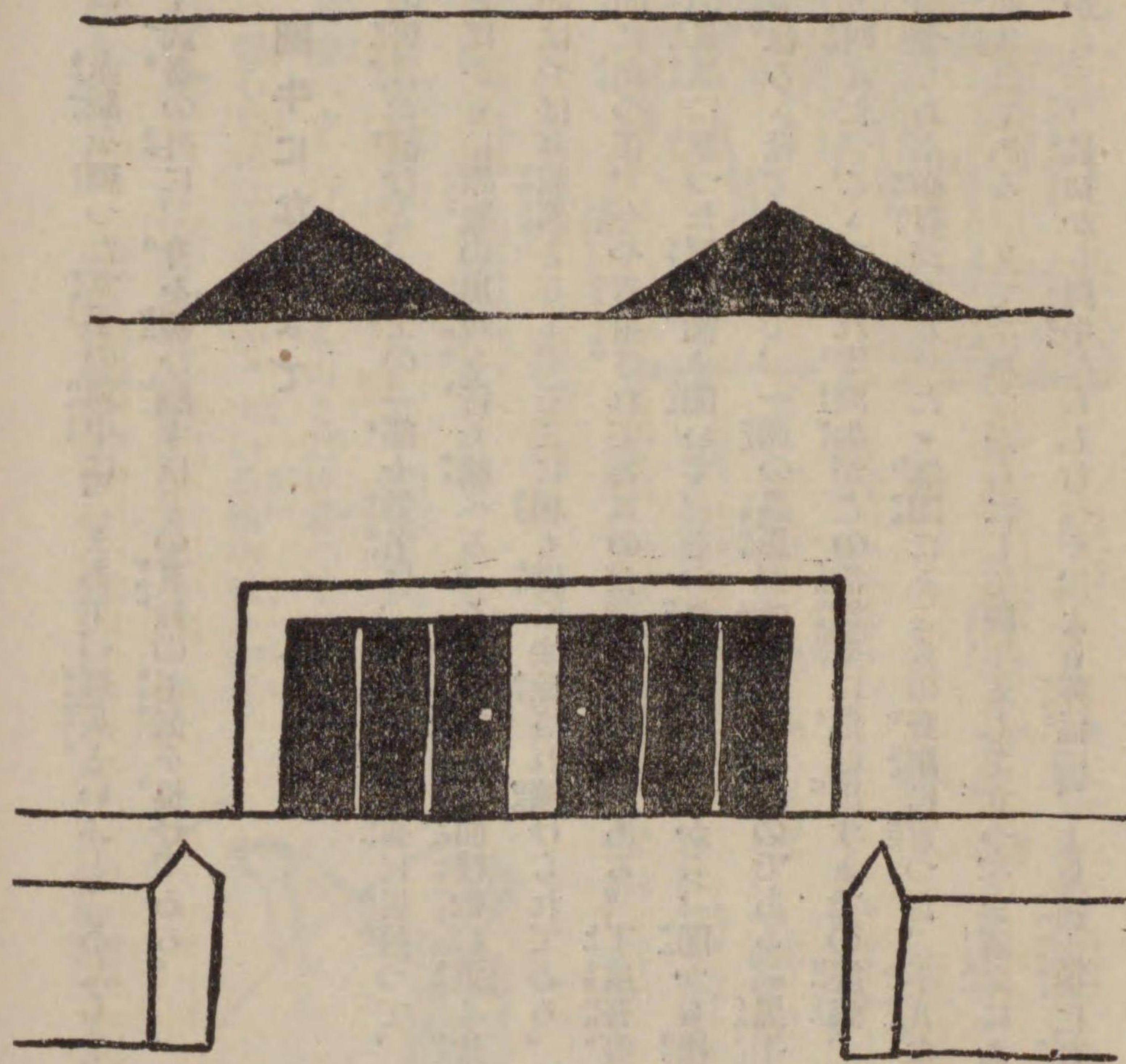
いたしません」といふやうなことを誓ふのださうだ。その司催者には、皇后様、宮様、侯爵様が成られることもあるといふ。また闘士にも種別階級があるらしく、服装は多く閃々とした銀色の、鎧様のきらびやかなものとだけ言つておかう。長剣を一本腰に帶したのは横綱格か。太い長柄の槍を把持した騎馬闘士、及び長さ三四尺の鉤状の鉾先を有する黒と白とをだんだらに巻きつけた、二本の特殊の武器を小脇にたばさんだ（鉦の闘士とでも勝手に命名してお

く) 闘士の外に、赤服を纏つた空手の連中は、まあ一づ雑兵といふところだらう。その雑兵を除いては、皆それ〴〵武器の外に、身を覆ひ隠すほどの眞紅の毛氈を提げてゐる。

闘牛になるまで

御大將のその誓言が濟むと、闘士の一部十数名は、その儘闘舞臺に居残つて、各自適所々々に陣取り、いざ来れとばかりに黒魔の出現を待ち構へる。それが大抵正面棧敷に近く片寄つて陣取るため、闘場の一大空間はやはり寂然として、そこに相も變らず餘され擴けられてゐる。觀衆の視線は闘士とともにその空間に向つて、今や直射されてゐるのだ。そのときである。丁度吾等の眞正面に相當する見物席の眞下の眞黒に塗つた扉を衝き開いて、その無限の闇の奥から、闇から棒に、俄然、それが何時の瞬間かと疑はるゝほどの鋭さで、一團の黑影が吐き出されたのである。「黒牛だ、闘牛だ」と自分等は思はずかう叫んだ。こゝでこれ等闘牛がこの活舞臺に飛び出すまでの經過、即ちその生活状態について一應知つておく必要がある。たゞ無闇にそこらの野原に育つた、平凡な奴を引張り出して來ると思つたら間違ひである。凡て生れながらにして闘牛として立つべき運命におかれてゐるものゝみといつてもよからう。最初から闘牛たらしむべく、より獍猛に、より頑強に育て上げることにつと



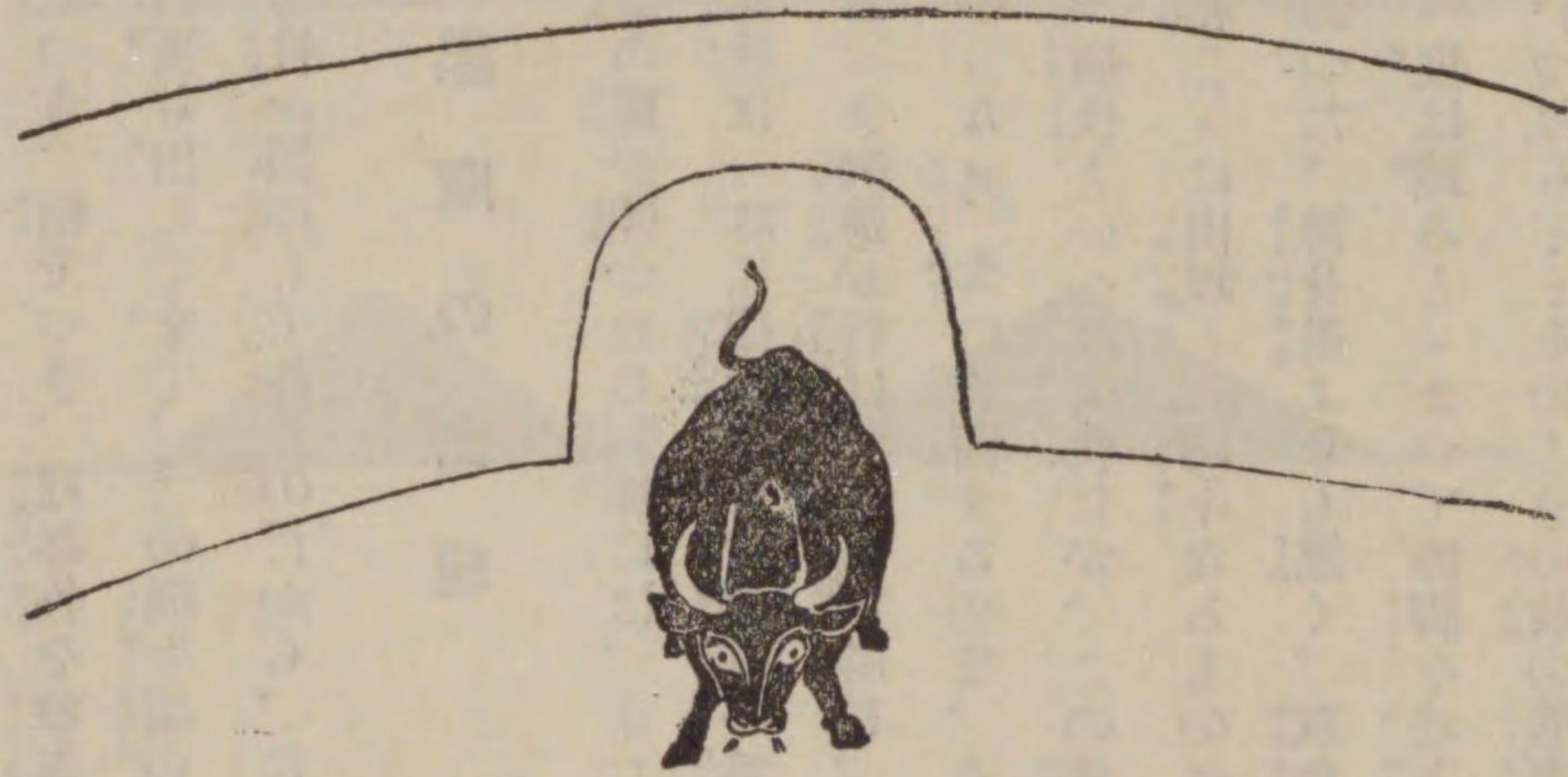


め、絶えず剣でつき、槍でつき、残忍性を極度に助長せしめる。かくてその機の最も熟した頃、その冷酷な野から引張り出して来て、この闘牛場の墨の扉の奥深く、闇の世界に閉ぢ籠めておくといふ。強烈な上に残忍性を體得してゐるのだから、たまつたものではない。

黒魔の出現

しかもその墨の扉が開かれる刹那には、また小剣五六本を脊に打ちこまれるといふのだから、満身に横溢した残忍性は一時に爆發して、怒號一番萬物を崩壊し去らんす勢を以て突進するに相違ないのだ。その恐るべき突進が行はれると同時に、黒暗々裡から、迎も日本なぞでは味はれぬ明皎々とした、眩惑するやうな外光に直面するので、その咄嗟に起る彼の驚愕は更に彼をして一層憤怒措く能はざらしめる。痛快といへば痛快だが、この場面だけでも既に悽絶なトロ見物の價値を斷定することができる。現在こゝに出現した闘牛なるものは、決して偉大なものではない。つまり大よりも強を誇る方のものであつた。總身墨よりも黒く、双角は反りをうつて太い。それが最初飛び出して来たかと思ふと、すぐ一度は踏みとゞまつて四脚を地上に根ざし、八方を睨めまはす。そのときのその唸り聲とその形相といつたら……そのときの彼の腹部は土壤を壓するかのやうに波うつてゐる。觀衆は最早





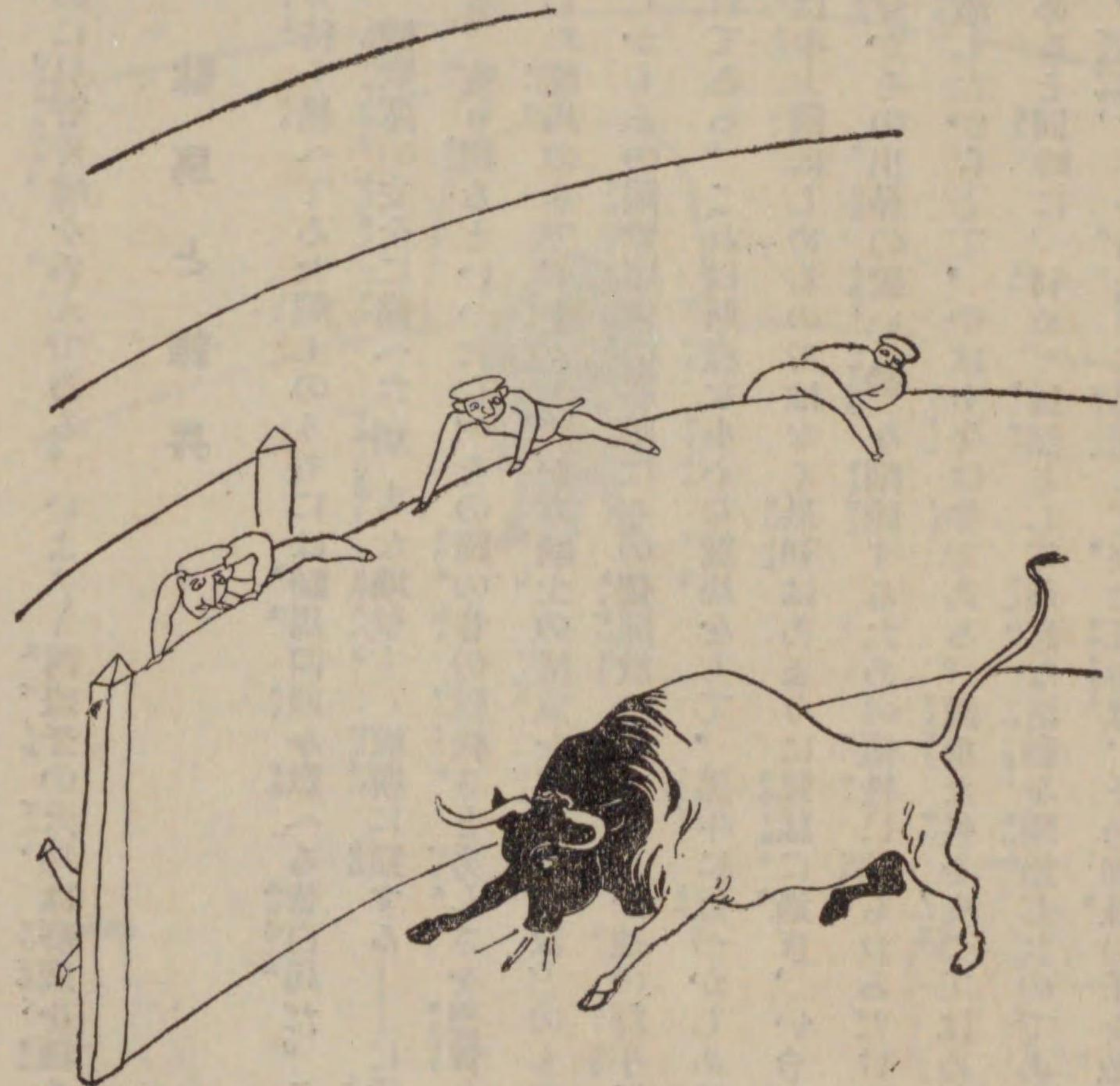
危機迫つたのに只管片唾を呑んでゐる。いよ／＼西班牙の天地は静寂を極めてゆくのだ。

駢馬と雑兵

異國膝栗毛

こゝに一方待ち構へてゐた闘士のうちには騎馬四頭を數へる皆白馬だ。これ等騎馬のものだけは活劇場の外縁、観覽席の安全に備へた頑丈な墻壁！板扉に類する——に近く、絶えず圓を畫いて乗り廻つてゐる。乗り廻るといつたら、その蹄の音の軽快さと勇しさを想像しようが、實は逆も見る影もなく憔悴した癡馬のみで、堂々と跨がる騎士の權威を寧ろ損ふほどのもの、たうてい黒牛の敵ではないのだ。しかもその観覽席側の一眼はその儘開放されてゐるが他の闘牛に對する方の一眼は、赤布で縛し掩はれてゐる。これは斯様な小心な驚馬をして、黒牛に近づかせる一つの慣手段と見るがよい。畢竟馬は牛と闘はしめるのではなく最初はあまりに強猛に過ぎ、いきなり人間が立向ふのは危険とあり、幾分かその出鼻の鋭い勢を削除するための犠牲に葬られるだけのものださうである。しかし如何に憤激したからとて、やはり牛は牛である。鈍重な性を失つてはゐない。甚だ注意深い。何者か目標を認めると同時に、初めて猛然として残忍な活動を開始したのである。それは丁度吾等のすぐ真下である。雑兵どもを目蒐けて慕進して來た狂牛は、その蜘蛛の子を散らすやうに逃げ飛ぶ連中





白馬と黒牛

を追ひかけまはる。そのあはやと思ふ間に、その雑兵はヒラリ墻壁に飛び込んだかを見ると、姿は消えてなくなる。そこには僅かに人間だけ通じ得る空隙が巧に仕組まれてるのであつた。

かく翻弄されつゝ鬪牛は一層たけり狂つてゆく。いよく騎馬の葬らるゝ時機が来た。馬自身は一眼を奪はれてゐるから、今はおのが身に危機の肉薄しつゝあることに氣づかない。しかも騎手は鞍下の憐れむべき畜生を叱して、強ひて危機に投じようとする。如何に鈍重でも眼前にこの一大目標をつきつけられて、いかでか黙してゐやうぞ。満身の強力を角上にふり絞ると見るまに、一ふり振つて白馬の胴腹へと突き入つた。さつと散る血煙、馬は地上高く突き上げられて、騎士諸共どうと倒れる。こゝへ来ると最早痛快どころか酸鼻の極である。吾等は既にその血煙立つたときに、既に眼を閉ぢ面をそむけたばかりか、全身の血は湧き狂つて興奮の極、心臓の鼓動は早鐘の如く亂れ響いて、手も足も額も氷のやうに冷却してしまつたのである。これが自分ばかりかと思つたらさうでない。大寺君も北島君も同様だといふ。三人見かはす顔と顔、蒼白でまるで死人のやうだ。ともすると視力朦朧としてきて卒倒せんかと思ふばかり、とても座にゐたゝまれなくなる。「僕はもう歸るよ」と弱い音を吐く





しかし「折角日本から来たんだ。しつかりしろ。少しの我慢だ」と勵まされ、やつと踏みとまることにしたが、たうていこの惨劇に直面する勇氣はない。強ひてをのゝく心をとりにつくるひ、兎も角も寫真機を持ち出して氣を紛らすことができた。

西班牙美人

日本の女などはまづ大抵卒倒してしまふだらう。いや日本ならばこの光景を見て卒倒しないものは女でないと相場を決めてしまふかもしれない。そこへゆくといかにお國柄とはいへ、またいかにそれが本場だからとはいへ、西班牙の女たちは豪いものである。この惨劇を眼前に、莞爾として寧ろこの懐愴な天地に媚びてゐるのだ。その血煙を見て、それこそ痛快とばかりに拍手喝采する。血を好む女血に酔へる女、なんと恐ろしい國ではないか。尤も西班牙の女たちは、トロ見物を日本の女の芝居見物、物見遊山ほどに心得てゐるのだらう。何れも頭髮、瞳共に黒く、體色飽くまで白いので、日本人の眼からは凡て絶世の美女ばかり。それらが西班牙獨特の笄と白衣と、黒色の頭上から地に引くほどの長さのヴェールとで扮装をこらし、美を競つて女王の如く花の如く鎮座します。それがまた島原の太夫に見るやうな、黒地に強烈な極彩色の刺繡様のやはり襦袢に相當する、一種特別の扁平な上



さて當面の活劇はまだほんの初はなに過ぎないのである。騎士諸共白馬の倒れた次の瞬間はどうなつたかといふと、牛は更に第二の突撃を見舞はうとする。その危い刹那、他の闘士は駆け寄つて例の緋毛氈を振り翳す。赤色と見ると牛は不思議にも極度に興奮するとか。他の一切を棄て、まづ第一にこの赤色に突きかゝつて来る。しかも感觸の鋭敏さは全く靈的で、闘士にとつてはこの緋毛氈こそ南蠻鐵よりも安全を期する、唯一の護身用楯としての役目を勤めてゐるのだ。果して闘牛は見る／＼白馬を棄て、緋毛氈へと突きかゝつた。その虚に乗じて馬と共に倒れた騎士は、雑兵に助け起されて安全に遁れ去る。尤も萬一の場合を慮り、騎士は凡て鐵製の脛當、靴等を穿つてゐるらしいから、大して危険はない筈。

今度は緋毛氈で誘きよせた短銃の闘士の活躍舞臺に移る。暫くの間はその一枚の赤布の操縦によつ

話の闘士

ツ張——それをば自分の座席の前の欄干へもつていつて、麗々と垂下する。その爛漫たる光景、實に見事なものである。これが西班牙婦人の見榮とでもいはうか。男子を悩殺すること、或ひは闘牛そのものよりも力強いものであるかもしれぬ。オヤ／＼失禮、うっかり西班牙美人に見惚れてしまった。

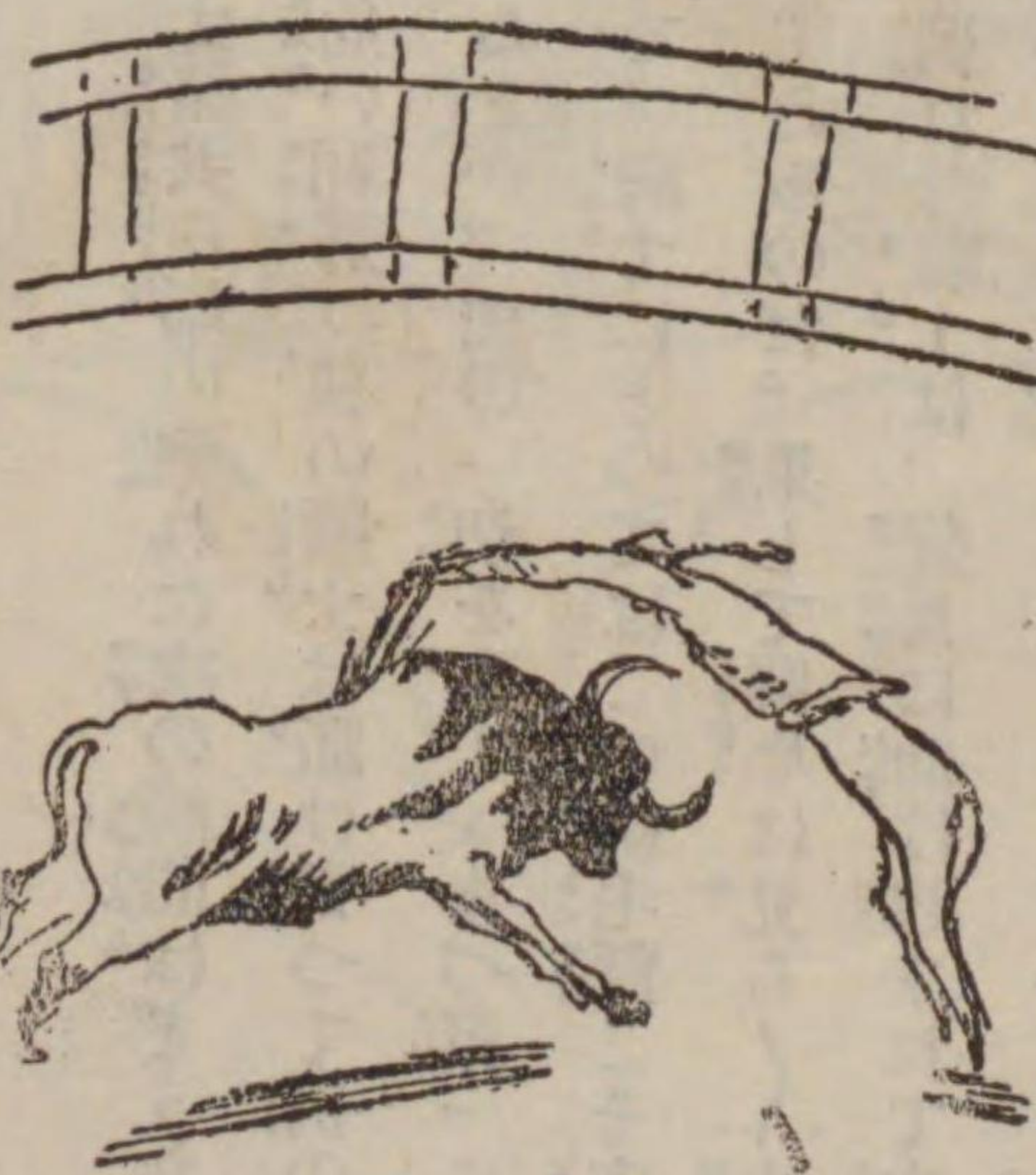






てかく大敵を醜弄する。恐るべき魔力を秘めたその双角はかの闘士の頸筋といはず腋下といはず、幾度か身邊を掠めて去來した。その場合闘士は平然として右に交し左に流しつ、時には膝を折つて半臥の體勢を示し、得意の手練のほどを見せながら、時機を伺ひ例の武器を兩手に捧げ、牛が怒つて突きかゝると、體を逆にくの字なりに反らし、その胸のあたりを掠めんばかりにかの双角を逸せしめて、猛然と延びたその兩手は、あはやといふ間に闘牛の背上、肩のあたりに打ちこまれるのだ。

酸鼻の極



更に第二第三第四の白馬は、交るゝ同様に、あたり無残な犠牲者として葬り去られるのだが、その一度倒れた白馬は、そこに絶息したのは別として、皆大抵無理遣に引き起されるのだ。するとその突かれ破られた胸腹から鮮血と共に所謂五臟六腑が、ドンブリとばかりかながり落ち、四肢の間に垂下する。いやどうも眼もあてられぬその氣味の悪さ、それでも畜生の悲しさ、鞭うたれて止むことを得ず、その一斗樽にも似た五臟六腑をうちふり、ヒヨロリくと曳かれ行く。騎士はまた何時の間にかその背上に跨がつ



てるるのだ。かうなると最早吾等とても度胸が据つてしまふ。いや、あまりの残忍さにあきれ返つてしまつたのだらう。しかもその深傷を喰つた憐れむべき敗残の白馬は、観覽席裏手の繋留場とでもいふべきところへ曳かれて行くのだが、そこにはまた獸醫殿が控へてゐて、その手術により、臟腑は見事腹中に逆戻り、腹部は彌縫されて再び出場を強ひられるといふ、いよく出でていよく酸鼻を極めてゆくのだ。

神に誓へる一刀

かくして闘牛一頭に對し、都合四頭の白馬は屠られ終つた。なほその間交るゝ立ち向ふ短鋸の闘士數名に依つて、その闘牛の背には蜂の巢のやうに突き苛まれていつた。それでいよく今度は最後の活劇である。この最後の一場面は即ち當日の花形、一騎當千の強者、名譽ある御大將の榮ある活動舞臺なのである。そこに閃く長劍が見事一撃の下に猛牛の息の音を絶たしめ得るや否や、これこそ一番に一番の晴の手練でなある。御大將もまた緋毛氈を振り翳して大敵を翻弄する。御大將の行動はさすがに莊重であり、敏活を極める。一刀にして仕とめなくては一大不名譽である。その一刀こそ神に誓つたものである。妄に打下ろすやうなことはしない。それには神より與へられた逸すべからざる



刹那がある。その刹那、その貴い刹那を直感すると、彼は大膽にも、大地を踏まへて直立不動、件の長劍を利腕諸共地に平行して大敵の眉間につきつけるのだ。斷つておろが、牛といふ奴は、いかに家畜性から脱却して猛獸屬に返つたといつてもやはり根本の鈍重性は消滅しないと見え、突いて出る猛烈さは當るべくもないが、一度退いて第二の突撃に移るまでは、可成りの餘裕を見せる。

でこの際、敵の態度はもどかしいほど落着き拂つてゐる。なか／＼突進して來ない。つまり闘士の策戦は、敵の突きかゝるのを利して打ち込まうといふのだ。そしてその突きかゝつて來る瞬間である。闘士の體と共に延びた手は、猛烈な双角のその間隙を貫通して、長劍は忽ち敵の脊上に突き入る。そのときである。驚くべし、その長劍は柄元まで見事にぶち込まれてゐた。その突き入る刹那、双角の尖頭は、一度闘士の頸首を掠め去つたのは必然の事實である。それを如何にして體





をかはしたか、全く入神の技術として驚嘆に價する。そこで、それが如何に首尾よく柄元まで通つたにしても、その場所によつてその効果によつて、巧拙を判することが出来る。この點がトロ見物の興味の絶頂らしい。トロ大通はこの逸すべからざる刹那を體得して、己自身いつか闘士そのものになりきつてしまひ、闘士のこの領域にまで踏み込み、日本人なら、そこで！ そらつけ！ ともいふやうな聲援、それが八方から浴せかゝる。つまり野次である。しかし相手が相手だけに野次も真劍だ。

### 闘牛の最後

しかしまだ吾等にはその巧拙を論ずる資格はない。たゞこゝには見たまゝの報告にとめておく。その第一回戦の場合、闘士の刺したのは打ち込まれると同時に、口中から瀧つ瀧のやうに鮮血を吐瀉して、その酸鼻の状は殆んど言語に絶するものがあり、しかもそれがやがて地響うつてドウと倒れた後も、なほ苦悶消滅するに至らず、最後のトゞメの一刀——これは小刀である——を特に腦天に見舞ふやうなことをしたが、第二回戦のときは、これをこそ理想的とも最上の手練とでも言はうか、一刀の下にコロリ倒れてそれなりけりの美しい最後を遂げる。他愛もない。満場の拍手は暫くは鳴りも止まず。彼方此方より、蜜柑や座蒲團なんてケチなものでもなく、萬年筆の雨が降りかゝるといふ騒ぎ

だつた。闘士の名譽これに比すべきものはないのださうだ。尤もである。それで第三回戦のはといふと、刺したが効果薄弱で、幾度か抜きとつては刺し、刺しては抜き、拙劣を極めるのだつた。そこでそこに登れた残骸だが、これらは毎回どこもなく、十数頭の栗毛の駿馬ばかりが飛び出して来て、

その残骸の双角に綱をひっかけ、雑兵が無闇にうちつける鞭に追はれて、雲を霞と運び去つてしまふのだ。その砂上を引きずられて行く様、今までの猛獸の影はこどへやら、小鼠ほどの價値した認められない。そのたわいのなさ。それがあまりに滑稽なためか、満場ドツと笑聲が湧き起る。これで暴戻な活劇は、一寸喜劇にかはる。わるくない仕組だ。

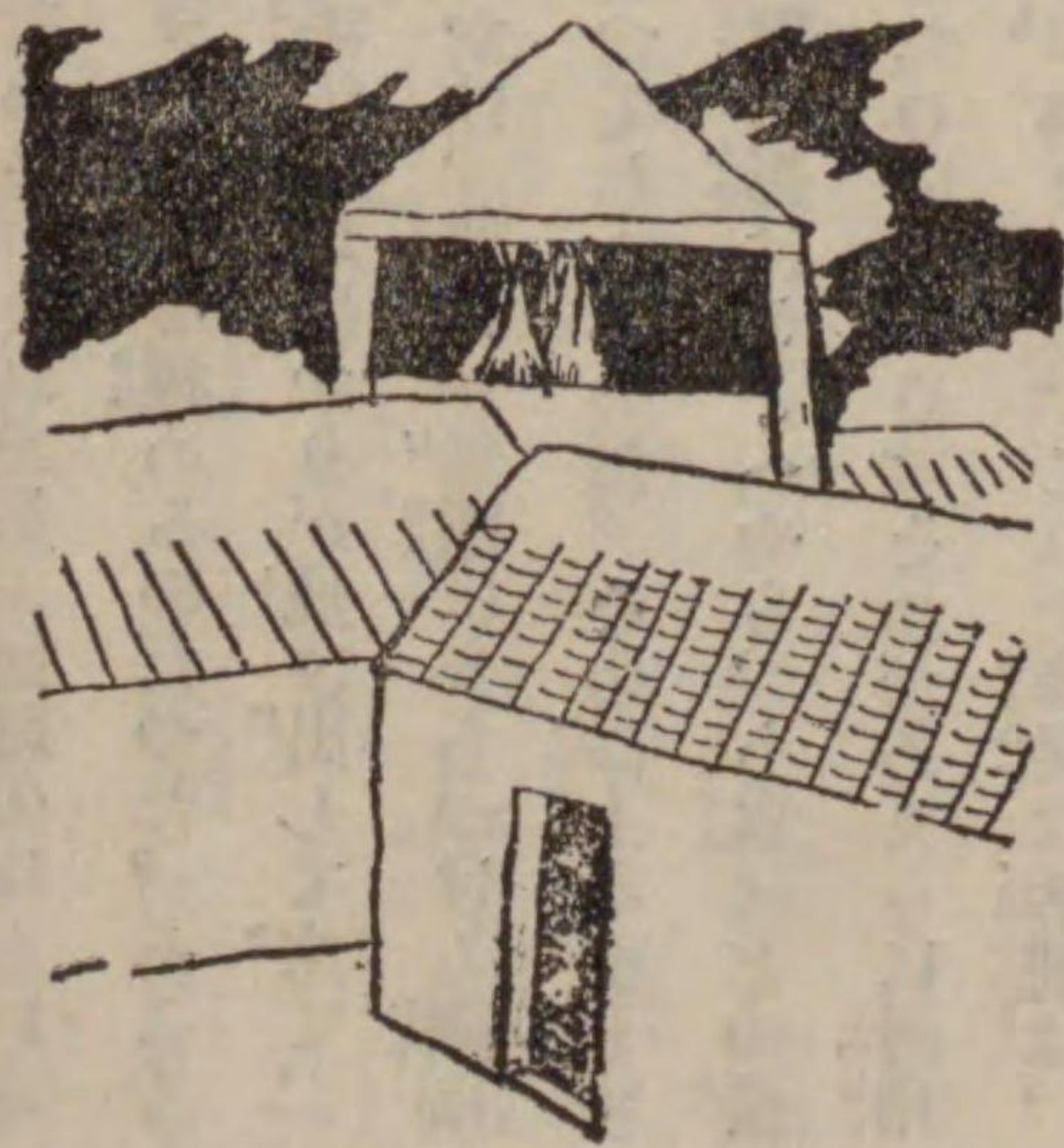
### 残虐の後



斯様にして兎も角も、毎回二頭の闘牛に對して、四頭の白馬が犠牲に葬られつゝ、日に六回まで繰返されるのだから、都合六頭の牛と廿四頭の馬とが、悉くマドリッドの冷酷な土と化してしまふのだ。吾等は最初のほどこそ、卒倒せんばかりに驚き恐れたが、回を重ねぬくにつれて、次第に見馴れてい



つたには違ひないが、たうていその最後まで踏みとまる勇氣はなかつた。丁度第四回目が終わつたときである。最早歸途につくつもりで、觀覽席と脊中合せになつた、國技館のやうな階上歩廊へ出ると、思ひがけなくも却つてそこに闘牛の知識を豊富ならしめる好材料が発見された。そこには館外の裏手に當つて、特殊の建物が幾棟か軒を連ねてゐたが、窓からすぐ下を見おろすと、その建物との空間に、先刻、突き上げられたばかりの生々しい白馬の屍骸が、血みどろになつた儘、何頭も投げ出されてゐる。恐ろしい國だ。今自分だちがこんな慘澹らしい國へ來てゐるかと思つたとき、思はず然と身の毛のよだつのを覺えた。もうよい加減で歸らうぢやあないかと言ひ出したとき、またしても今度は灰色一色に砂漠のやうに煤けた屋根瓦を傳つて、見渡す彼方、そこにはそれこそ戦慄に價する一棟が、一段高く鐘樓の如き構造をなして聳えてゐるのだ。その内部、そのうすくらがりから、これはまた氣味の悪い闘牛の遺骸、それが牛屋の店頭のやうに何時の間にかそこに釣り下げられてゐたのである。丁度そこへ、番人の一人が見えたので、「あれはマドリッドの人々が喰べるのだらう？」と



聞いたら、平氣で、「左様々々」と笑つてゐた。いよく以て恐ろしい國だ。とても今晚のピフテキは咽喉に通つことはない、しかし僕たちは何のことはない、たゞ單に見るに耐へなくつて一回だけ見残して歸ることにしたのであつたが、後で聞くと、もし興に乗じて最後まで残らうものなら、さなくとも癖の悪いので通つてゐる西班牙人、闘牛に熱狂してゐる矢先だ。閉館間際の混雑に紛れて難題を吹きかけることなどは珍らしくないとのこと。まづ最後の一回は見のがして歸るが上分別としてある。僕等は小心な代り、先見の明があるといふものだ。因に有名な闘士になると、日に九千ペセタ（日本の三千圓）の給料を附與されてゐるさうだ。彼等の生活状態の華美なこと、王侯貴族を凌ぐものがあるといふのも無理はない。しかし彼等の生命は、絶えず風前の一燈に酷似してゐる。丁度その後僕等が英國へ渡つて行つたときふと新聞にまだ一ヶ月も絶たぬうちに、既に有名な闘士が二人まで、闘牛のために突き殺されたと掲載されてゐた。あゝ、恐るべき國、南無阿彌陀佛、く。

### とんだ密行者

四月廿一日、大寺君をひとり西班牙トレドに残して三度目に巴里へ歸つて來る。日本では上野・向島の花が散つて、荒川・小金井が今を盛りと、春も爛熟の期に達してゐる頃なのに、相變らず陰鬱な



氣配に閉されてるて、明快で華美と聞いた巴里の春は、なか／＼訪れさうにもない。しかしこの巴里よりも餘程氣候の早い伊太利南部は、愚圖々々してると旅には不適當な夏が来てしまふかもしれぬ。この際一思ひに伊太利見物を果してしまふのが上分別と、早速出立の用意に着手した。かうして巴里を起點に獨逸、西班牙、伊太利等八方へ出向いて行くことは、非常に便利ではあるが、一々巴里出立に際し、警察署へ出頭して出國願を届け出でたり、その度毎に志す國々の領事館乃至大使館へ、日本の領事または大使の證明を持參して、旅券に入國許可の裏書をして貰はなくはならず、それが可成り手数を要し、暇潰しだ。それで一度大失敗を演じたといふのは、獨逸から歸つて来て西班牙へ志すことになつたとき、北島君を案内に警察署へ出頭し、出國許可を得ようとする、お役人からしこたまお目玉を頂戴する。どうしたのかと何も知らぬ當方はあきれ返つてしまつたが、實は迂闊も迂闊、獨逸を出るとき、同様出國願を済ますべきをすっかり忘れて、平氣で歸つて来てしまつたのであつた。これでは密行者として取扱はれやうが言分は立たぬ道理、大變な間違ひをして大寺君も僕も眞青になる。別の役人の方へ廻されいよく事面倒になつていつた。ところがかういふ場合言葉のわからぬのも一徳になる。何と詰問を受けても返事ができない。生半言葉ができて返事でもしよものなら、尻尾をつかまへられいよく問題は複雑してゆくの、僕たちはたゞお辭儀をして目ば



かりバチクリさせ、憐みを乞ふ情を表現するばかりだ。お役人も威張つても威張り甲斐なく、これには弱つたらしい。中には字引を出して一言々々悠々と研究に着手するといふ風にやつたら、お役人もあきれ返つて、ア、もういよくと早速放免してくれたといふ話も聞いている。この筆法で辛抱強くなるより外はないと思つてゐるところへ、この間神津君の下宿で會つた小港醫學博士が、獨逸へ行くとかで矢張り出國願を済ましに來たが、見兼ねて僕等のために大に辯護の勞を取つてくれる。つまり言葉もできず、事情にも通ぜず、獨逸を出て來てしまつた、ほんとの過失だといふやうに辯解してくれたので、この機を見て二法ばかりお役人に手渡すと、待つてゐましたとばかり、今までの鬼の顔が地藏顔と變り、ボン／＼ヨシ／＼と請合つてくれ、先刻のお役人の方へ行つて何か耳うちをしてゐるかと思ふと、その二法の銀貨をそのお役人に手中からチラと反射させて見せ、これは汝と半分わけだと言はぬばかりの思ひ入れだ。不思議にも大問題もそれで無事に済んでしまふ。しかし一時はどうなることかと心配したのである。これで僕たちは無事であるが、一緒に獨逸から歸つた鈴木のかつ、相變らずシチー・ホテルに滯渉とし



てるるが、この恐るべき關門を何時かは突破しなくてはならぬ時期に遭遇しなくてはならぬのだ。一番彼奴を驚かしてやらうと、歸るといきなり、一大事件だくと叫び、この密行者事件を誇張して、貴様も罰金少くとも三百法だと威しつければ、元來真正直の鈴木漂沙居士、すつかり悄氣ちまつて、「ぢや岡田君をたのみ、日本大使館にかけつけて充分證明して貰ふことにしよう」と、顔色まで變へてしまつた。

銀行で珈琲

僕たちの豫定は最初瑞西經由で伊太利に入り、大圓を畫いて歸には南佛の國境モダンを越えることにした。それで伊太利入國許可の裏書の外に、瑞西國經由の裏書が必要だ。しかしそれ等も殆ど半日で済ましてしまひ、午後はトーマス・クックへ行つて、通し切符や寢臺券等一切を調べ、もう一つ旅立つ前の用務として、伊太利へ入るために伊太利の紙幣を用意することにした。いつも日佛銀行ばかりで興味が薄いので、今度はバンク・リヨネーズといふ巴里でも有名な銀行へ行つて見た。日佛混



見物の方針

血見のやうな日本語の上手な社員がゐるなくとも、何等不便を感じない。案内者が頗る鄭重を極めたもので、日本の老舗のやうに珈琲まで持つて来てくれる。これで行く伊太利出立の用意はできる。そこへ先達申込んで置いた倫敦の郵船會社支店から、歸りの船の約束ができたといふ通知に接する。萬事都合に運んだわけだ。これで僕の異國巡禮も峠を越し、富士山から砂走といふ下り坂に向いたのである。戀しいなつかしい故國日本に爪先が向いた華やかな心が加つたのだから、今度の伊太利旅行は一倍輝きに充ち

僕らの伊太利旅行は豫定が随分短時日である。僅に一週間。そのうちに往復の汽車の旅が含まれてゐる。伊太利旅行に経験のあるものは、この短い時間だけを聞いて驚きあきれてゐた。またトーマス・クックの番頭まで目を丸くしてゐた。ベデカーの伊太利案内記にさへ、伊太利の旅は一ヶ月乃至一ヶ月



月は充分必要だと記載されてゐる。僅か一週間と豫定したのは、あまりに無謀な試みかもしれぬ。しかし僕の見物の方針は聊か多くの人たちより異つてゐるやうだ。折角来たのだから相手選ばず、何でもかでも無闇に詰込主義で見物するのが、洋行者の大體の傾向らしい。僕は自分自身既に好きと厭ひが澤山ある。厭ひなものまで瘦我慢して、意地汚く徒に詰込まうとは思はない。百のうち九十九は棄てゝも、甘いもの一つ味ひたいといふのが希望だ。玉石混淆、寄せ集めは厭ひだ。よいものは矢張り。安物を澤山買ふより、よいものを一個、いや好きなものを一個獲得するところに僕の自慢がある。その代りその一個に對しては、凡てを犠牲に供してもよいのだ。——甘いもの一つ食ふためには……僕の異國巡禮の見物方針も、いつの間にかこの主義に終始してゐる。今度の伊太利行にしたところで、北島君をそのかして、無理遺案内を頼んだのも、強ち伊太利の旅は決して一人でするものではないぞ、頗る人氣の強いところだによつて油斷も隙もならぬ、必ず二人以上の同行者を得る必要があるとの評判に恐れを抱いたばかりでなく、北島君は既に一度二ヶ月以上も費して伊太利巡遊を試みてゐるから、初めての旅と違ひ、決して無駄なことはしない。また殊には僕とは美術學校時代から共に自炊までして、同じ釜の飯に苦樂を共にして来た間柄ゆゑ、僕の缺點もよく承知してゐる。つまり可成り自分の我儘も通るといふもの、これに越したよい都合があるものではないのだ。巴里に北





ニセガネ

島君を得たことは、僕にとつてこれまた正しく天與と言ひつべしである。

四月廿四日午後二時、パリを發した汽車は瑞西國を通過、アルプスを突破してその翌日矢張り午後二時に伊太利ベニスに着く。丁度巴里から廿四時間を要した譯になる。廿四時間——何の他愛もないやうだが、この汽車の旅だけでも可成り興味が深い。僅か廿四時間のうちに佛蘭西、瑞西、伊太利の三つの特殊の國情に、旅人の眼は必ず異様に輝くに相違ない。國境二ヶ所に税關檢べが三度、特にアルプスの峻嶮を驀然に下るときの感慨といつたらない。それで伊太利の國土に入つたかと思ふと、驛に見る人間が俄に野暮臭く、不潔に見えて来て、外國人と見るとその風采の堂々たる上に、先覺者の如く自然敬意を拂つてゐたのが、ふと侮蔑の心持が首をもちあげ、何となく肩身の廣くなつたのを覺えて来る。これは即ち三等國と一等國の差が、明瞭に出て來たのだから致方がない。車中食堂で釣銭がオツタテチンケ來る。オツタテチンケは八十五のことだ。妙な言葉なので笑つちまふ。それはよいとしてキャメリーエ君(伊太利のボーイ)紙幣をすかして見てと見かう見する。質金でないかを調べるのだ。いやな氣持がする。日本ではこんな失禮なことはあまり見受けぬ。西班牙や支那では銀貨

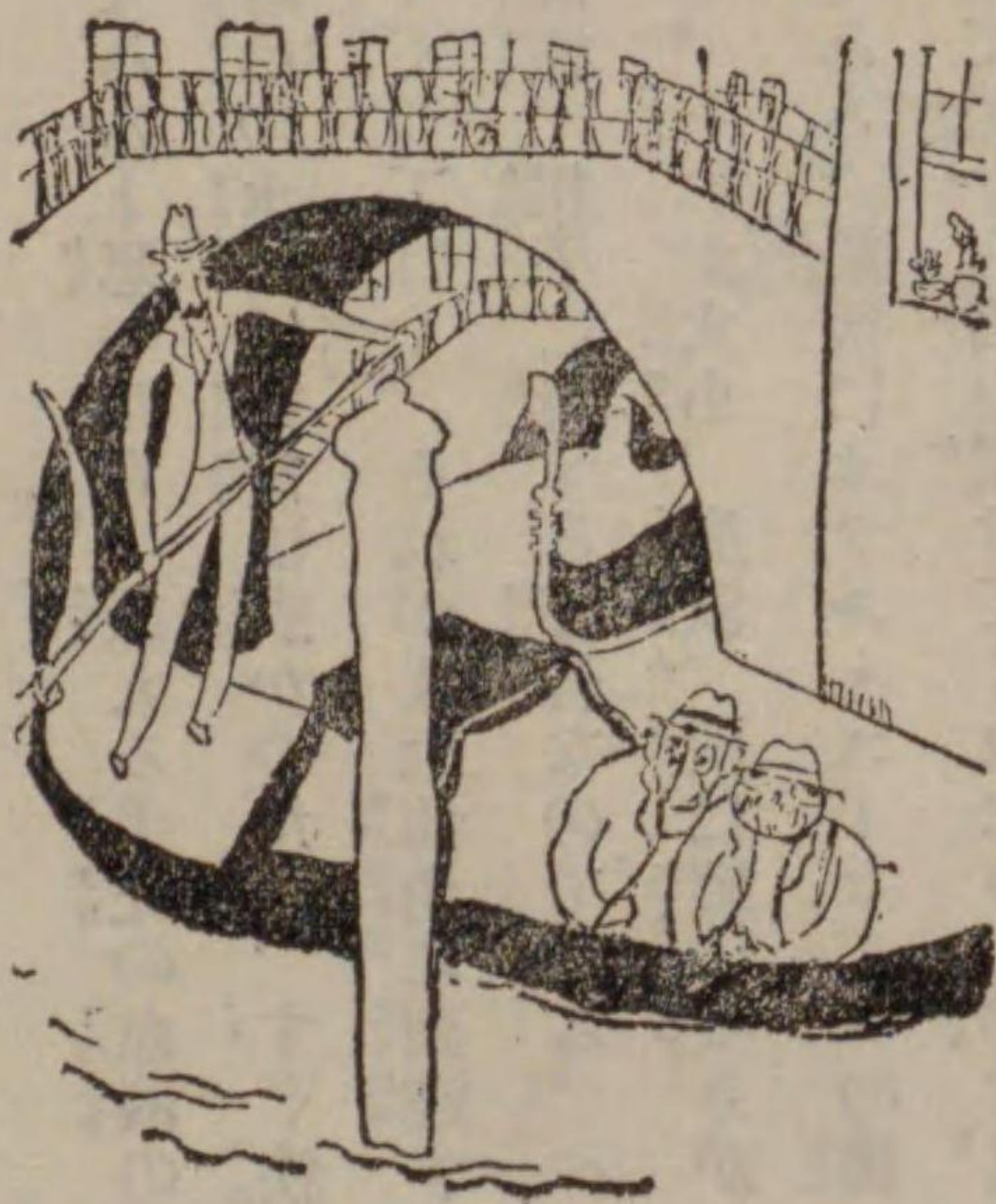


を客の前でも構はず、地上へ投げつけ叩きつけて見る。外國は質金大流行と見える。

ゴンドラ

ベニス驛にはホテル・ユーロップの客引が出迎へに來てる。荷物をもたせると、すぐ前の乗場へゴンドラを呼んで、れる。こゝにも立ん坊の乞食がゐる、ゴンドラにちよいと手を觸れたくらゐで一

リラくらゐをせしめる。成程世界的に有名な水の都である。自動車・馬車の代りにゴンドラ、決して悪い氣持ちやあない。船頭は二人、雨が丁度降つてゐる。春雨のベニスなんて洒落れてゐる。汽車を下りた他の客も凡てこのゴンドラに便乗して、それ／＼宿屋へと志すのである。あつちでもこつちでもワラ／＼と叫ぶ。船頭の掛聲だ。それ等船頭ども、兩手を

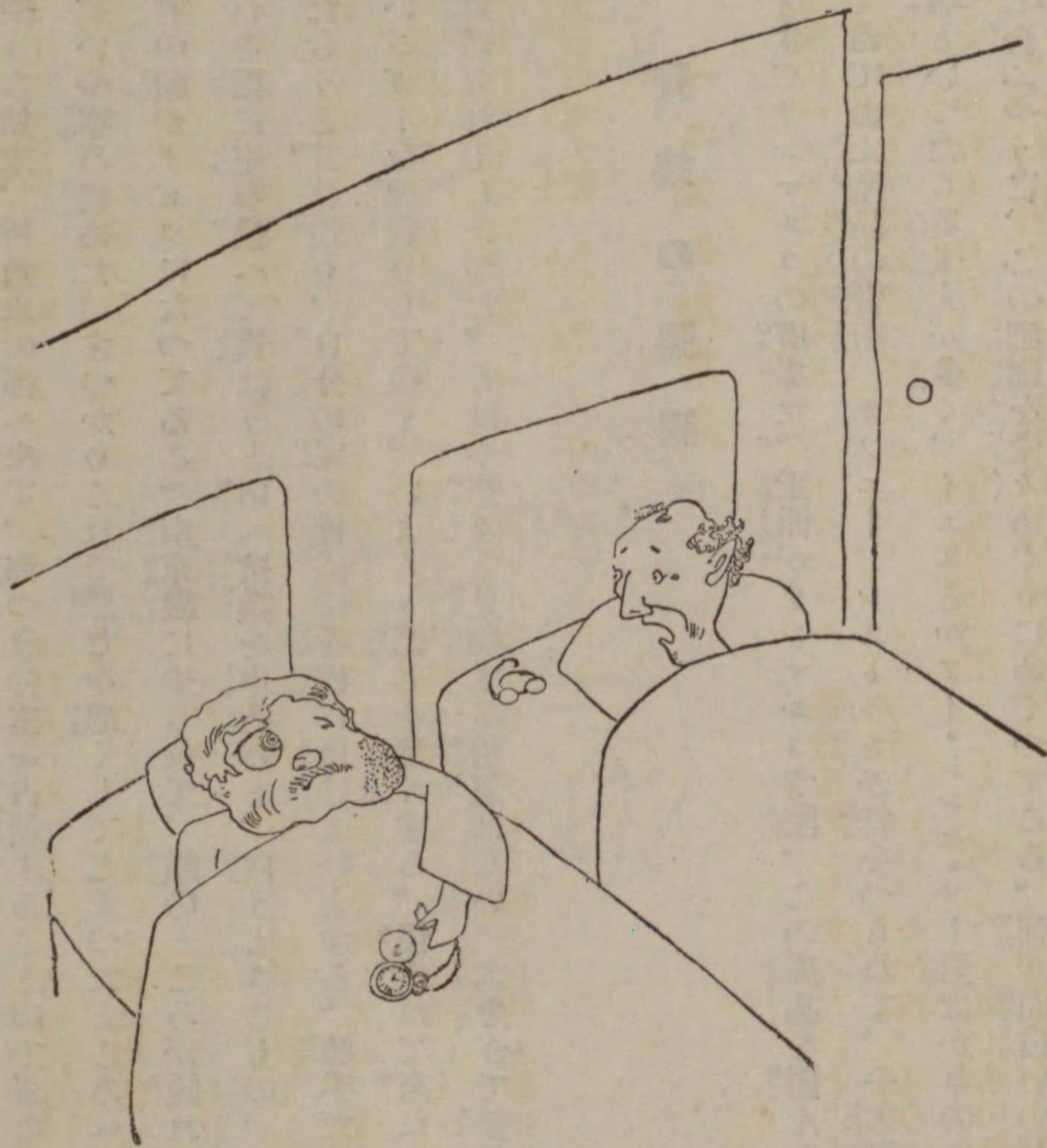




八の字に垂下して無闇に、振動かすのがある。少々狂人じみてゐると思つたら、凍える手先の血液の循環を活潑にする、一種の取暖法と知つてまた大笑ひだ。驛前の水路は相當に廣かつたが、すぐ狹隘な路地のやうな水路に入つて、何回もくゞ小橋のアワチをくゞつて行く。それがまた曲角に到達すると、船頭ワラ〜と銅魔聲を出す。これは日本の人力車と同様、相手に對する警告なのである。ベニスの橋の數は一切で三百三十、島の數九十九と註されてゐる。それが大小、廣狹、横に縦に限りがない。床屋の看板のやうなミオツクシが林立して風情を加へてゐる。最後にホテル・ユーロップの裏玄關横着は洒落れたものだ。またボーイが紅い小板をもつて來て船から橋を架けてくれたり、粹な眞似をする。流石に水の都、島の都、名所の名所である。

ベニスの南京蟲

ところが晝間のベニスに至極平凡、碧水をたゞへ、透徹鏡のやうな美しいところと想像したら大間違ひである。水は決して澄み渡つてはゐない。たゞ涙の橋といひ、死の海、悲みの淵など美しい傳説にとらはれると、夕日も、月も、雨も、夜も感銘が深くなる。何しろ不潔で水の色なぞ逆も畫のやうに碧色ではない。丁度生憎のことに遊覽客の出盛る最中として、ホテルも殆ど既に満員、奥の暗い一室

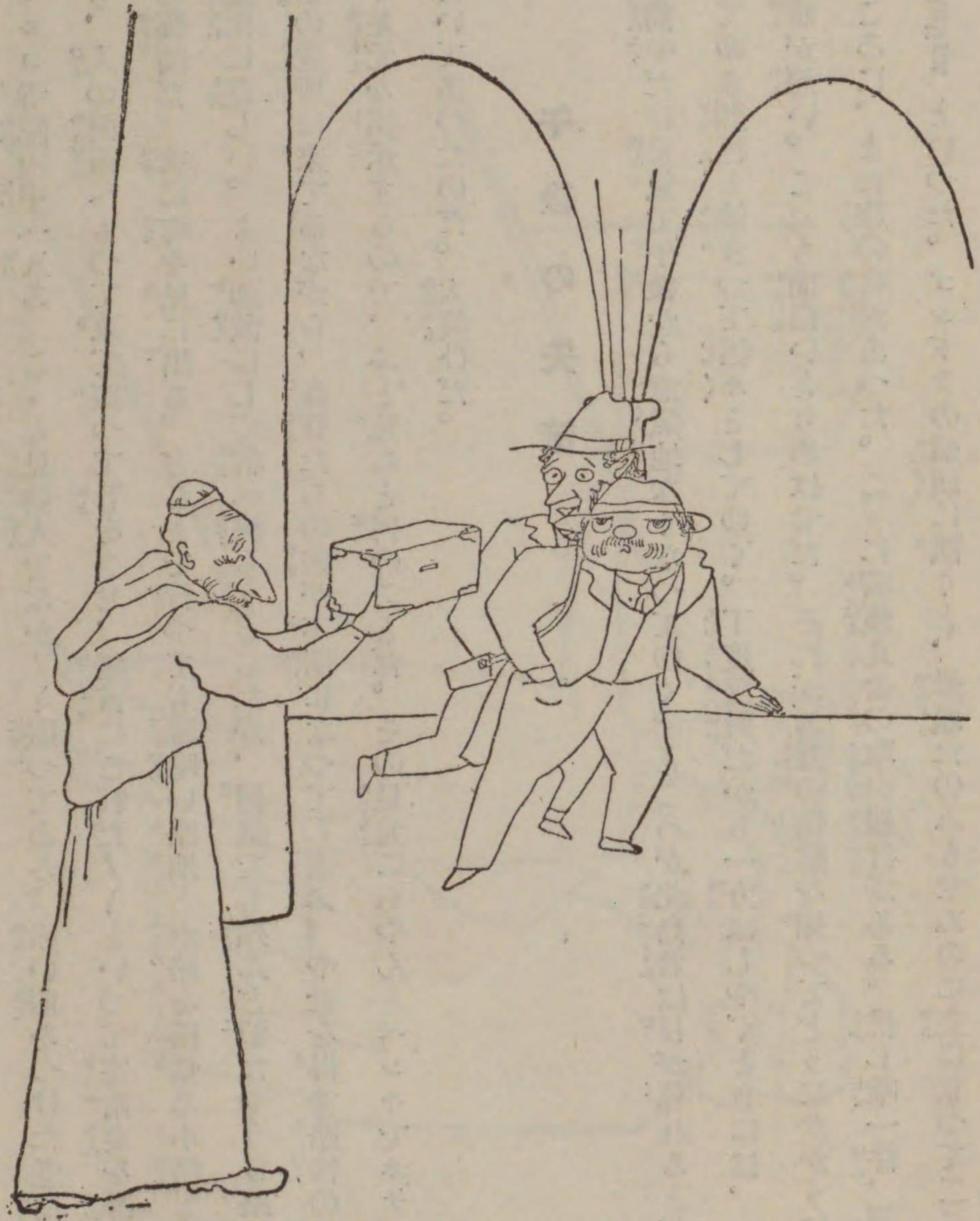




に通されたやうな始末、折角水の都へ来て、海つきの室を占領することのできなかつたのはいかにも残念である。いや寧ろ惨めだ。すつかりこれで感じを悪くしてしまつたところへ、その翌朝目をさますと、北島君の顔がイビツになつてゐる。南京蟲にやられて、顔のところが腫れ上つてゐたのだ。癩に障つてこれを楯に室を換へて貰はうと宿へ抗議を申込むと、向うもさるもの、汝が汽車からでも持つて来たのだらうと言ひ張り、自分の家の權威に看板に傷けまいとする。勝手だ。そこへまた煙草賣が来て、高いシガーを押賣りしてゆく。いよく感じを悪くする。憧憬れて来たベニスも、かうして期待は全く裏切られてしまつた。もはや悠々と見物する勇氣はない。大急ぎで要所だけ一巡することにする。

### 賽錢の強請

宿を出るとすぐサンマルコの廣場だ。正面がサンマルコ寺院。この廣場を圍んだ他の三方は、一大廻廊になつてゐてお土産品の賣店、カフェー、レストランが軒をつらねて、一大勸工場を形成してゐる。観光客といつたら英米人が多く、イエスとかアイ・シンク・ソー組ばかりのやうだ。それが殆ど押し合ひへし合ふやうに、この廻廊を堂々めぐりにめぐつてゐる。何が面白いのだから譯がわからぬ。

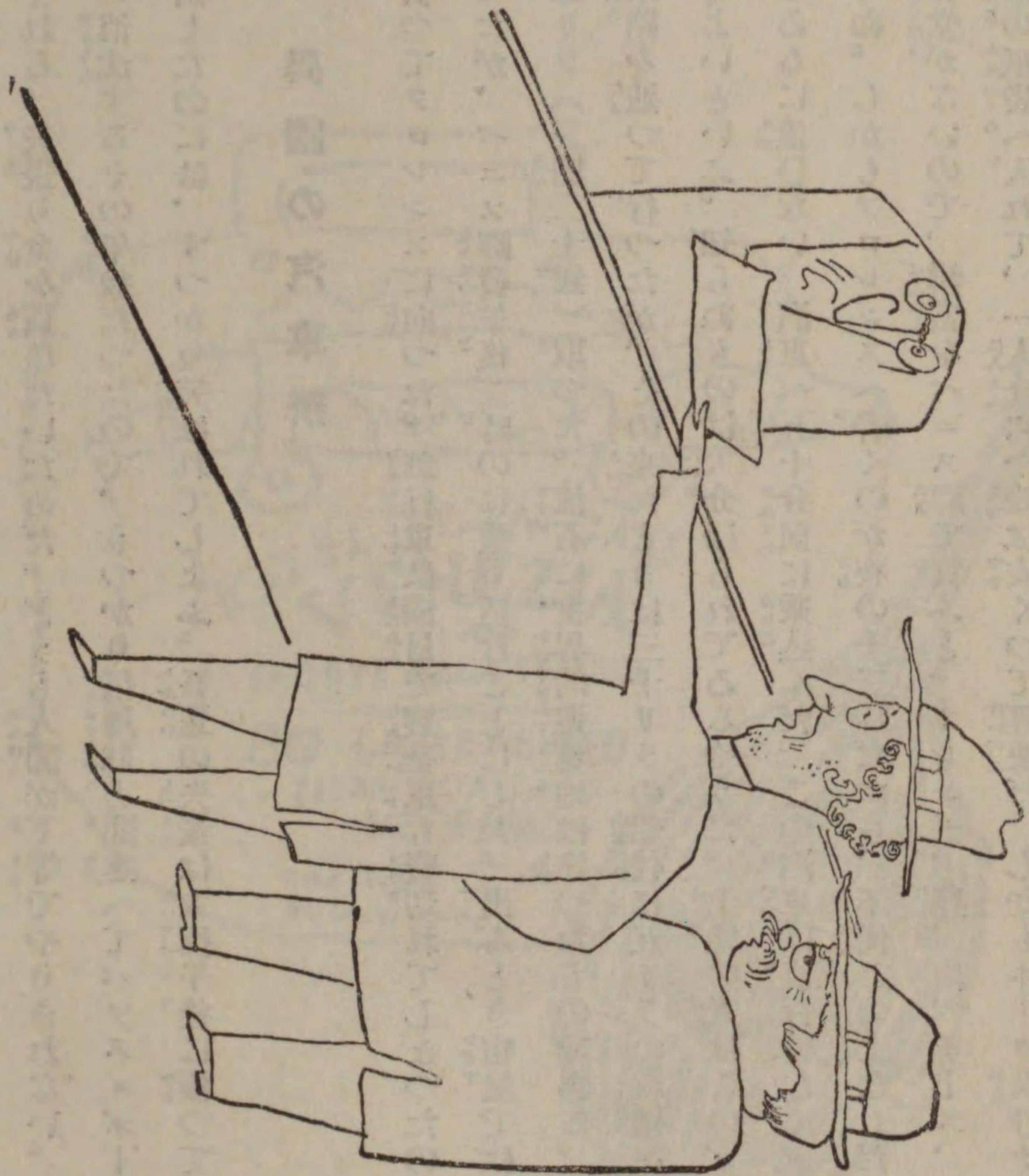




サンマルコ寺院の中へ入る。こゝも見物人でなか／＼賑つてゐる。赤い服をつけた老僧が金箱を捧げながら、人の面前へもつて来て振つて音をさせ、無言にこれだ／＼といつて寄附金を募つてゐる。お賽銭の強請だ。次に町を見に出る。どこまで行つても薄暗い路地と水路を横切る小橋とで、果しがないが變化に乏しい。よい加減にして宿へ戻らうとしたが、何處でも殆んど似たやうな路地ばかりなので、宿の近所に来てゐながら、自分たちの宿が不明になつてしまふ。やむを得ず路傍の人に訪ねたら、すぐ足元を指示するので、ふと見ると何のことだ。その足元にちやんとペンキでホテル・ユーロームと書いてあつたのだ。大笑ひだ。

### 午後の失策

僕は午前中だけ元氣で午後から意氣地なくなつてゆく。ところが北島君は日が暮れるとだん／＼目玉が冴えてゆき顔色も油ぎつて活々としてゆく。丁度反対だから一方はしやぐときには、一方むつたりして機嫌が悪い。これも面白いとりあはせだ。それがお互の缺點を知つてどうにかかうにか協調してゆくとところに、また旅の味があつた。こゝに横濱正金の取引銀行がある。併し唯一件、Banca Commerciale Italiana といつた。ゴンドラの船頭に訊くと、船頭たのみもせぬのに先に立つて二三町も案内

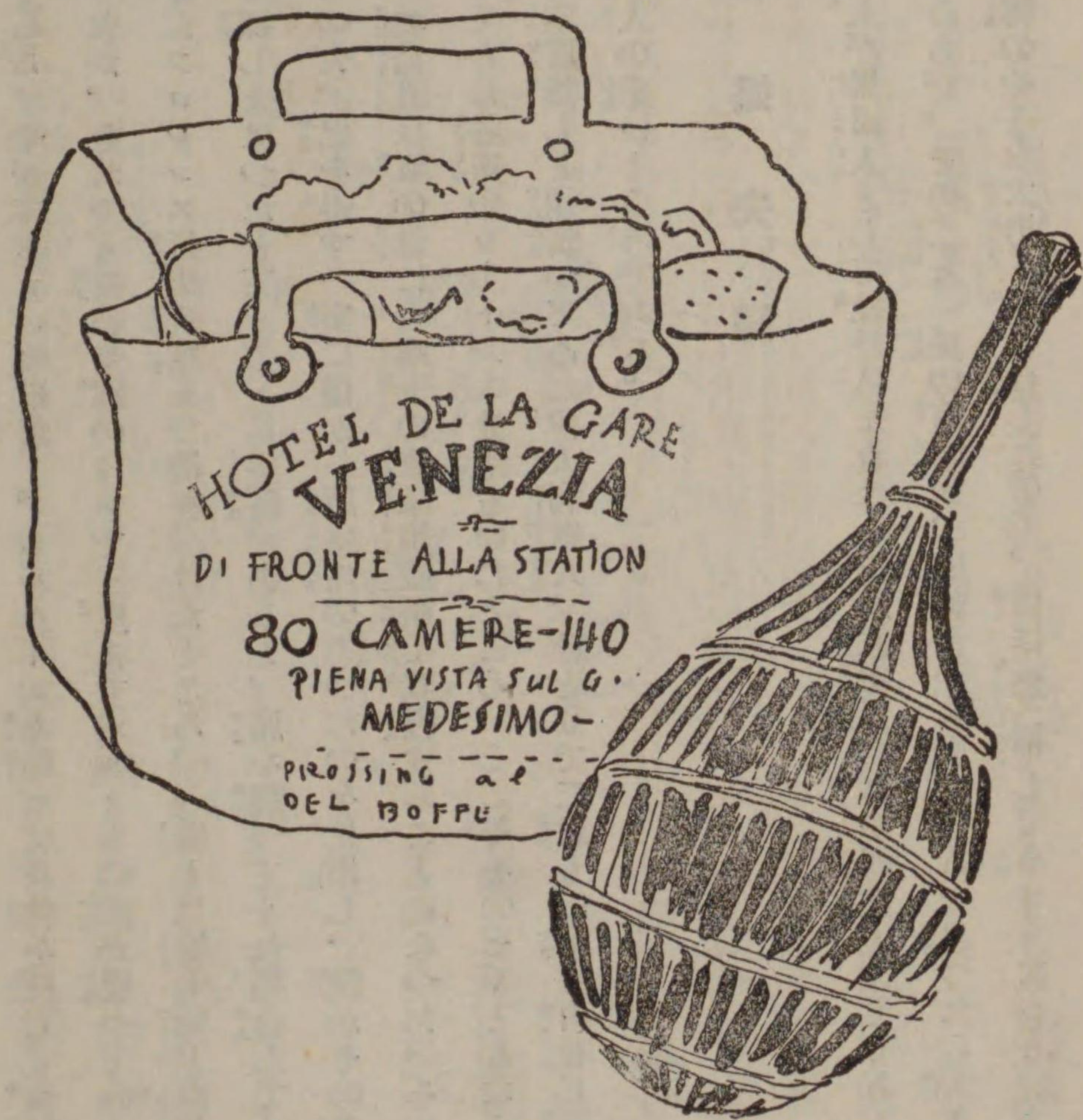




して行つてくれる。矢張り金を貰ひたいためだ。どうも人間が下等でやりきれない。それはよいが、矢張り意氣の消沈するその午後だったので、うっかり信用状と間違へてパス・ボール（旅券）を眞面目臭つて出したのには、すっかり笑はれてしまふ。吾輩の失策は大抵午後（極つてゐるやうだ）。

### 異國の汽車辨

ベニスを去つてフロレンスに向つた。急行車は満員で寢臺車も賣切れてしまつたので、甚だ都合の悪い汽車だつたが、ベニス驛發午後二時に乗り込むことにした。出るとき宿屋では贅澤税といふ特別税を三十二リラ（三圓二十錢）取つた。流石に世界的遊覽地は違つたものである。ゴンドラは來たときと同じ水路を辿つて行つたが、その來たときは三十リラの船代に五リラの祝儀をやつたが、今日は十三リラでよいといふ。知らぬものは大分ほられてゐるやうだ。土地の人はこのゴンドラへ可成り安價で乗つてゐるに違ひない。汽車へ五十分前に乗込んだ。この汽車は直行でなくボロニヤで乗換へなくてはならぬ。しかもフロレンスへ着くのが夜の十二時だから、不便の上なしたが、仕方がない。また車中に食堂がないので、辨當をベニス驛で買ふと、オレンヂ、卵、肉、チーズ、パン、葡萄酒一切、信玄袋形の紙袋へ入れて、一人分六十錢は安くつて輕便だ。しかもホーク及びナイフに紙製のコ





ツブまで附屬してゐる。やがてボロニヤに着く。ボルター（赤帽）に荷物を托して油断がならぬので、すぐ尾行して行つたが、それでも長い歩廊のうちで三度までボルターの顔が變つていつた。ところで向側に待合せてゐたフロレンス行の列車まで漕ぎつけたところ、一等も二等も殆ど満員で、いくら二人が血眼になつて探しまはつたとて、こゝに空席があると、席を譲つてくれ都合してくれるものもない。實に冷酷なものだ。已を得ず一室に僅か一席空席のあつたのを見出し、僕がその貴い一席を占領することゝなり、北島君は氣の毒にも廟下の車掌用腰掛で我慢することになつた。それでいよく發車となり、混雜してゐた各室のシートが大分落着いたところ、そこ等をのぞくともなくのぞいて見ると、先刻、一席も空席無しと頑張つてゐた伊太利軍人、ひとりで二席も三席も占有し長くなつて寢そべつてゐる。随分人の悪いところである。

新婚夫婦

さてそこで僕一人が異國人として投げ込まれた一室八人定員の吾が同室のことである。一等一席も二人一組になつてゐるが、その二人一組の座席が、廣軌だから廣すぎると思つたら大きな間違ひである。生憎と僕は酒樽のやうな大男と乗り合したので、僕は恐縮して小さくなるといふより、威張れ

ば威張るほどはみ出してしまふのだからやりきれない。但し女にしたところで、外人は日本人より餘程偉大であるから、日本の鐵道が廣軌にならぬのもその邊を考へてゐることかもしれない。それで席からはみ出されてゐる僕は、自然正面の客により接近せざるを得ない。その正面の客といふのは新婚の若夫婦ときてゐるから、いよいよ以て慘憺たる目に遭つてゐるわけだ。全體西洋の夫婦といふやつは仲のよいのを人前で自慢する傾向がある。日本人にこれを顧みると丁度反對に人前では仲の悪いやうに見せかけてゐる。どつちも同\*



じやうなものだが、習慣性からか日本人の目からは、實に嘔吐でも催すやうな濃厚さを感じる。その若夫婦はこの傾向が殊に顯著だつたから、お蔭で大分命を縮めてしまつたのである。その代り西洋婦

人のより露骨な性情を、求めずして知る得ることができた。その一例として擧げるならば、食堂へ出かけるとき、洒落れるくオペラバックのやうな袋の中は、凡て化粧道具が充實されてゐると見え、出るは出るは手品のやうに種々雑多なものが現れてくる。それが顔より先づ手を白く塗るのが先だ。その苦必經營が濟むと、寶石の腕輪や指輪を出して箝め換へ飾りつける。そして初めて食堂へ御出現



になる。凡て輕快を旨とする旅中でさへこんな風だから、自宅へ歸つたひには一大事件だらう。

## 振 假 名

最初斯くして僕一人異國人として特別扱ひにされてゐるが、時間を経過すると同時に、何時の間にか人種撤廢の雰圍氣が濃密になり、フロレンス近くになつた時分、退屈凌ぎに、丁度巴里へ届いてゐた『主婦之友』二月號を北島君が讀んでゐると、車掌君珍らしがり、見せて呉れと言つて受取り、どう讀むと聞くので、縦に讀むと言つて手眞似で教へてやつたら、それだけで既に事珍らしく大喜びの體であつたが、更にルビ（振假名の活字）を見て、これは何だと訊ねる。成程外國人には振假名とくと奇怪至極のものに見えるだらう。すると僕の隣の偉大な老夫婦が、矢張り是非その『主婦之友』を見せて呉れと言ひ出す。見せてやつたら、同じやうに讀方の方向を聞く。振假名を無性に面白がるこれをきつかけに佛語を話すかと老妻君が聞く。少しばかりと答へると、そこへ若い紳士が隣室から飛び出して來て、英語を話すかと聞くからこれも少しばかりと答へてやつたら、さあ事だ。無闇と英語で質問して來る。伊太利人で英語を話すのは餘程自慢と見える。まづ態度がさういつた風だ。何の本だと言ふから、日本の婦人雜誌だと答へる。出版部数はどれくらゐだと聞くから、月に三十萬で東





洋隨一だと正直に言つてやつたのだが、先生感心してゐた。英國へ行つたかと更に話題を換へて來たので、然り英國はまだ行かぬが、巴里へ一度歸つてから英國へ渡る考だと答へると、亞米利加へ廻るかと言ふから、亞米利加へは行かぬ、倫敦から直接日本へ歸りたいと思つてゐると返事した。この



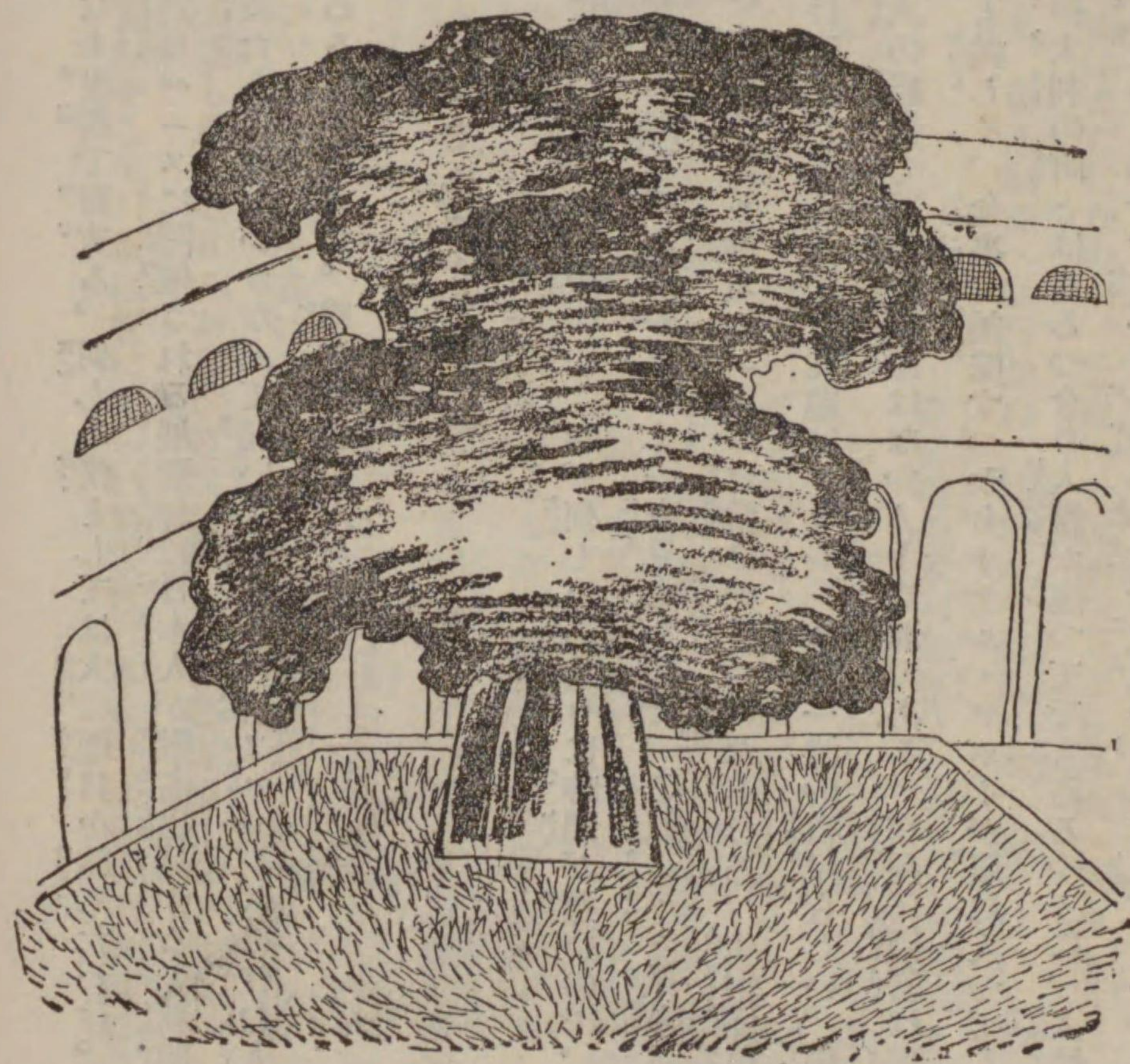
男餘程亞米利加嫌ひと見えて、雙手を舉げて賛成したりした。すると向う側の隅にゐた老好爺、さては支那人にあらずジャボネーだと知つて、何だかなつかしさうに佛語で話しかけて來る。この老人は不思議にも吾が日本人を盛に讚賞してゐた。お世辭かもしれない。「主婦之友」二月號を件の老夫婦に進上すると大喜び……くださるか、ほんとにくださるか……と念を押すほど喜んでゐたその中に掲載されてゐる「異國膝栗毛」を見せて、これが僕の名前で、この畫は僕の作だと教へてやつたら、畫をつくく見て汝は漫畫がうまい、おれの顔を書いてくれとんだ御所望だ。早速お手のものだからその老夫婦をはじめ、前の新婚夫妻も是非と言ふから、遠慮會釋もなく葉書用臺紙に交るく書いてやると、みな感にたへたやうな面持をして、汝は實にえらい畫家だ。日本では有名な畫家だらうなんて、隅の老人なぞ

は頻りと皮肉なお世辭で野次る。何しろ僕としては大に面目を施したわけ。なほいよく親しみを増していつて、近日ベニスに開催される展覽會に日本人が數名出品すると新聞に出てゐるが、その日本人といふのは汝たちではないかなんて聞いたりする。皆フロレンスに住む人々で、可成り藝術家には敬意を表してゐる點が見えた。感じのよい人々。

### サンマルコ・ミューゼ

フロレンスに着いたのは夜中の十二時。何しろあまりに時間が遅いので、若し馬車が一臺もなかつたひには大變だと心配してゐるが運よく一臺見えたので、これ幸と乗り込み、宿屋は和田先生や永地氏の泊られたホテル・ベルシエーを目當にかけつけたところ、生憎満員で断られ、引返してホテルサボイへ轉け込んだところが、此處はフロレンス第一流の宿屋らしい。獨逸人の經營の由、何處へ行つても獨逸人の經營してゐる宿屋はなかく立派である。宿屋の經營は獨逸人が一番うまいといふ説もある。室も美しく、食事も美味すつかりホテル・サボイが氣に入つてしまひ、おまけにこのフロレンスは他の伊太利の町とはまるつきり人種が違つてでもゐるやうに、人情毫も浮薄でなく親切で實に感じのよい處だったので、僅か二日間の滞在で此處を去るに忍びないやうな氣がする。朝飯はすつ





かり巴里人になつてしまひ齒も磨かず、寢床で寝ながら頂戴するやうになつてしまつた。ベニスの雨も此處へ來るともうすつかり晴れてゐる。無闇に心持がよい。春の日がカーテンを通してほかくと暖をしみ込めます。まづフランドル人のフレスコで有名なサンマルコ・ミューゼを見に行く。宿から何でも五六町しかなかつた。入場料は一人二リラである。實に感じの好いミューゼである。廻廊の中心の大樹を取巻く。その中庭の草は眞に緑で建物は眞白い。そしてその大樹は黒いほど緑が濃かつた。アンゼリコの壁畫は大小可成り數多く見ることができた。皆アンゼリコが僧となつてこの寺に入り精進して畫きつゞけたもの許りである。歐洲の旅に出て以來、これだけの感銘を受けたのは初めてである。僕はもうこのアンゼリコの傑作一品だけを見たゞけで、僕の洋行は忽ちに有意義のものとして燦然と光輝を放つたのである。歸去來々々々最早これ以外他のものによつてけがされることが寧ろ恐ろしい。再び歸去來、歸去來と叫ばすにはゐられなかつた。

フロレンスの人氣

異國 藤 栗 毛

フロレンスは日本で言つたら京都であり奈良であり、その内容の充實してゐる點からは、殆ど京都奈良を一緒にしたほどのものと言はれてゐる。美術家は皆ここへ來ると殆ど動きがとれず、つうか



うかと一ヶ月も二ヶ月も暮してしまひ、しかもその一ヶ月二ヶ月全く退屈を感じるやうなことはないといふ。無数の寺、その一寺々々、いづれも由緒深く世界的藝術品ならざるはないのだから、美術批評家、考古學者、歴史家などは垂涎止むる術もなからう。僕たちはサンマルコ・ミューゼを見た後、電車で見晴しのヒエゾレの丘へ昇つた。そこにはまた Theatro Roman といつて野天劇場の跡が二箇所もあり、更に上ると頂上に一寺あり、その下に崖に臨んで Tea Room 見晴らし茶屋がある。ここもまた各國の觀光客でなかく賑つてゐる。この茶店からはフロレンスの町から周圍の山や、丘や、野や、水がすつかり眺められる。一寸輕井澤の氣分がするところだ。こゝで見ると、地勢が京都に髣髴してゐる。フロレンスは、その廣さに於ては京都の方が何倍か大きい。伊太利の畫家が吾等と呼びとめて話しかけ、日本人と聞いて驚喜して強烈な握手を求めた。また上の寺の僧侶も出て來て日本人かと聞くから、さうだと答へたら珍らしさうにうれしさうに、大に歡待してくれた。たしかにフロレンスといふところは、日本人に好意を持つてゐる。感じがよい。



日本人大持てだ。いや日本人に好意を持つてゐるといふよりも、フロレンス人は車中の人々が代表してゐるやうに人氣の美しいところと言つた方が間違ひないかもしれぬ。その證據には、寫眞複製を買ひ込んでその途中、煙草屋にその複製一包を置き忘れて後で氣付き、青くなつて駈けつけて見たところ、客が一杯輻輳してゐるにも係らず、吾々の姿をちらと見るより早く、すぐ例の複製一包を渡してくれた。一言も費す面倒もなく、案じた方が氣恥しくなつたからである。或はこつちが日本人で珍らしいから、向うの印象もまぎれなかつたのだらう。

虚禮中の虚禮

フロレンスで最も有名なのはウヒチとピットとの兩美術館である。この二大建築はボンテ、ベツキヨといふ橋廊下によつて連結され、この橋の第一階は淺草仲見世のやうな賣店になつてゐて、その中央の道路は車馬の通行等無論自由であり、その二階は即ち兩美術館を連結すると同時に、等しく美術品——肖像畫ばかり——が陳列されてゐる。僕はこの橋の家の色彩が氣に入つて、河に沿ふた、つまりウヒチ美術館の階下の一面の往來になつてゐる、大きなアワチ形の窓——それがいくつも並んでゐる——その一つの窓の上に腰かけ、大きな柱に凭りかゝつて持合せた扇面をひらき、例の矢立で





寫生をはじめたところ、不思議なことはフロレンスの人々、通りかゝつては吾輩に一一にこやかな挨拶をしては行く。フロレンスはいよいよ以て人氣のよいところ、外人にまで親しみを持つ感心なところだと大に敬意を表するつもりで、一々また答禮したものだ。ところ

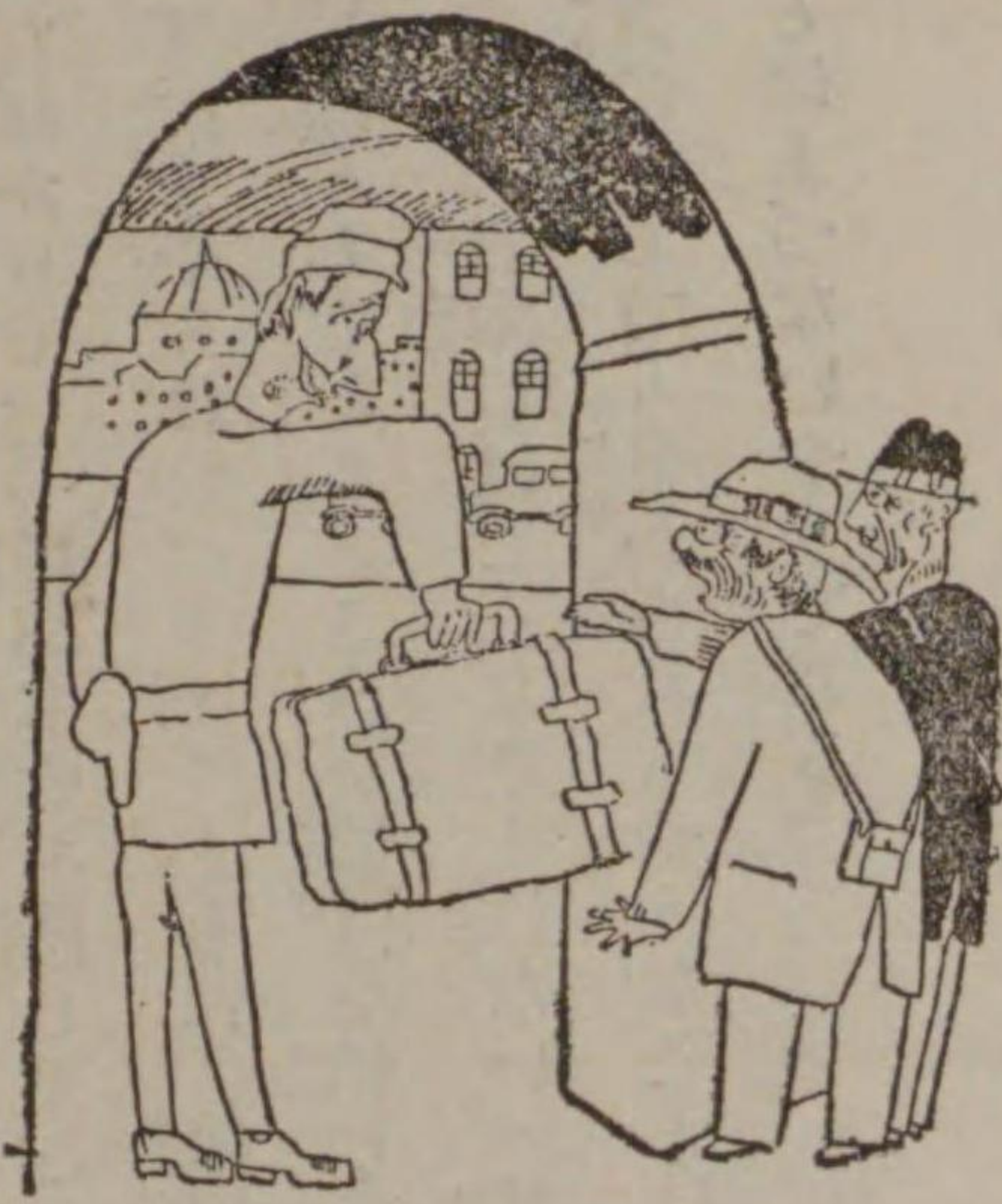
フロレンス、東郷大將

ろが驚いた。寫生を終つて窓から下りて見ると何のこつた。僕の凭りかゝつてゐた柱の後に、矢張り僕同様寫生してゐる閨秀作家（フロレンス人）があつた。彼等のお辭儀の相手は僕でなく、皆、彼女だつたのだからお笑草だ。ウヒチのミューゼからピット美術館を見て出ようとする門前にはまた、例のガイダーや繪葉書賣が群をなしてゐるが、この繪葉書賣の一人の言草が變つてゐる。日本人と見ると、東郷、東郷、東郷大將と奇聲を發する。お世辭のつもりか抑捺ふのか譯がわからぬ。



第十二回

驛頭でオイマテ!



豫定通りフロレンスは二夜泊りでいよく羅馬へ急いだ。春のこの陽氣のよい折柄だから、見物客も日に激増して行つて、汽車もなかくの混雑だ。やつぱり日本のやうに先を争つて乗り込まうとして、此處でも譲り合ふやうなことはあまりないらしい。中には洋傘を先に室内へ投げこんで席の先取權を獲得するものさへあつた。

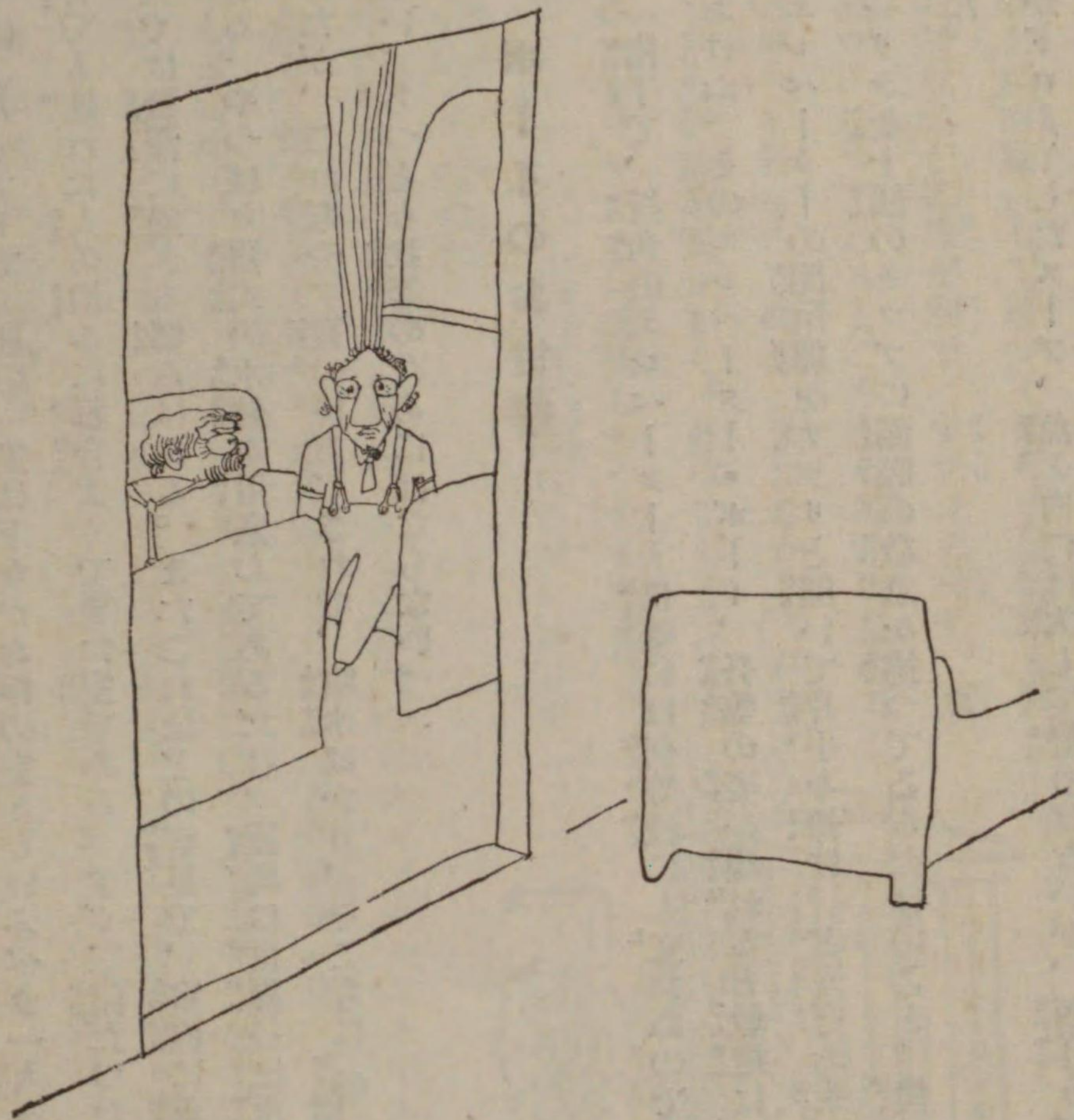
羅馬驛に着いたのは午後六時五十分だつた。日はまだ暮れないが宏大ながら煤けた構内にはもう淋しい黄昏の色が襲ひかゝつてゐた。流石に一國の首都である。下車客も大混雑でプラットホームは人波をうつた。まだ知らぬ土地へ踏み込ん



だばかりで、一種の不安を感じてゐる矢先、驛を出ようとするところを、後から突然「おいこら、まて。」をやられた。ドキリとした。税關吏である。何をいふのか伊太利語ではいよく不可解だ。啞然呆然としてゐるところを猿臂を伸して人の荷物を奪ひとるやうにし、その荷物の重量を量つて見たりする。日本にはこんなことはない。感じが悪い。東京驛へ下りやうが京都驛へ下りやうが、官憲の威力に少しも脅かされるやうなことはなく、遙かな國へ來て淋しいその旅人の心を攪亂するやうなことはまづないやうである。

### 羅馬のホテル

自動車も馬車も待ち合してゐるが、東京驛には比ぶべくもなく、貧弱なものだ。僕たちは自動車を呼んで、ピアナチオナーレ百〇四番のホテル・バイに落着くことにした。停車場から十丁ほど、間部君や國松君が以前泊つたことがあるので、大抵様子が知れてるといふわけで、北島君が案内して呉れたのだ。羅馬ではまづ第一流の方だらう。殆ど満員だったが唯一つ、三つベッドの室だけが空いてゐた。仕方なしにそれで我慢することにしたが、巴リの宿屋と違って西班牙などと同じやうに賄つきの方を歓迎する。賄つきなら泊めてやるといつた態度だ。三人ベッドと言つても二室になつてゐて





一室の奥の方は二人ベッドで、他の一室は下女がお伴の室ともいふべき一人ベッドになつてゐる。夫婦づれで下女でも連れた人の泊るに都合よくできた室である。すぐ二階だつたから出入には便利だつた。たゞ二人では贅澤に過ぎる憾みはある。またこれほどの宿屋で、室内に水道の設備が出来てゐないのは妙である。やつぱり舊式の水鉢を用意してあるだけ、羅馬は世界一に水道の發達してゐるところと聞いてゐるが、これちやア寶の持ちぐされで、噴水ばかり、そこらに勢よく吹き上げてゐるたつてしやうがない。ちつとも我等のためにはならない。

ボーイのお世辭

食堂はすぐ一階下で、折角のエレベーターも僕等には何等役にも立たぬのであるが、伊太利人もなかなか隅へはおけぬ。そのエレベーター・ボーイ、吾等の姿が現れると敏捷に活動を開始して、面前へもつて来てエレベーターの開閉扉をサラリと開いて片手を捧げ、どうぞお乗りくださいと慇懃なものがた迷惑なのだ。

料理は何だかドロ／＼したスープ、魚と肉には大して變りはないが、西洋うどんマカロニは流石に

本場である。皿の上に山盛にして持つて来る。葡萄酒も羅馬のはまた巴里あたりのとは味が別で、少々コゲ臭く、瓶の底から半分菰被りになつてゐるところなぞ茶味に富んでゐる。この食堂のボーイ長なるものが、またなか／＼の愛嬌者で、いろいろとお世辭を振りまく。食べてしまふと佛蘭西語でプー、ビアン、マンゼ（美味しかつたか）と聞く。うまい／＼と言つてやつたら、喜んで雀躍してダンスのやうな恰好をして引込んで行つた。

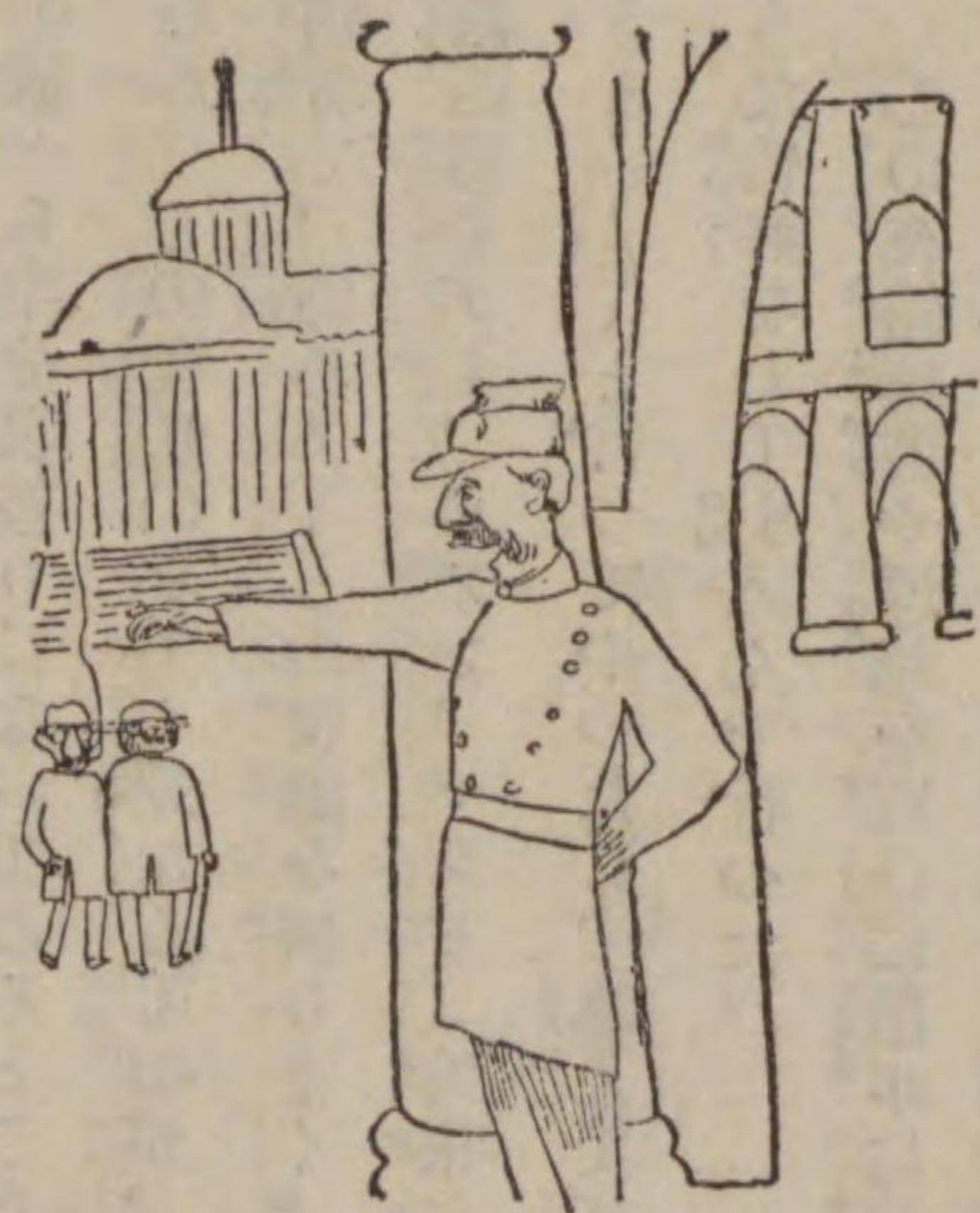
その夜繪葉書や煙草を買ひに散歩に出る。すぐ近所だつたエンマニユエルの大理石が、雪の宮殿のやうに夜の町を壓して輝き聳えてゐた。銀座通とでもいふべき大通を一巡して歸る。夜になるとどんだん店を閉めてしまふので、ほんとに外國の夜は旅行者にはつまらなく退屈だ。といつて酒場や踊場へ行つたところで、お上りさんはあつけにとられるばかりで、いよく興味が薄い。



物を言ふ看板あり



大に活動すべき日が来た。十時にならぬと會社も御役所も蓋をあけぬので不便この上もない。日本ほど早起を奨励する國はないかもしれぬ。その十時まで何をしようか、いつも問題になる。しかも今日は土曜日で、来る月曜日は丁度一日に相當し、それが生憎と勞働祭の日で休日ときてゐるから明日と明後日と兩日休みがつゞくのだから、愚圖々々してゐると豫定通りその月曜日に立派な青い服を着た伊太利人、僕たちを見ると手招きをする。これが即ち大使館の番人で、日本人と見ると必ず呼び入れるといふことである。門前に大使館の看板も何も出てゐないところを見るとこの男がつまり看板代りをつとめてゐるのだ。物を言ひ、目のある看板だから、こんな重寶なものはない。羅馬に於けるこの日本大使館も、流石に場所柄だけあつて全然骨董的な建造物である。やはり相當に有名な古代の建造物を、殆どそのままに使用してゐるのだ。大理石の太い柱が何本となく矗立してゐて、見るから莊重を極めてゐる。その古びた石柱の間を縫つて奥へ入る。まだ早いか、ベルを押しても誰答ふるものもない。あたりは森閑として



て凄いくらゐるだ。

佛領事のお役人

二度目に行くくと丁度その時やつとお役人たちが出勤されたところ。まだ祕書の山田君に會はうとは思ひもかけなかつた。僕の知友の俳人山田蕙子君だつたのには、あまりの不思議な邂逅に寧ろ雙方驚きあつたくらゐだ。旅券を特に早く證明して貰つて、すぐ佛蘭西の領事館へ馬車で駆けつけた。そこには小使のやうな老人が頑張つてゐて、下調を行つてゐる。勞働者を三人ばかり連れて來てゐた伊太利人が、ふとこの老人に紙幣をつかましたので成るほどこの老人もたゞの狐ではないなと氣ついたので、僕等もその要領を眞似てやると、急にニコ／＼と事務の進捗が俄に敏速になつて行く。何事も金の世の中、それが歐洲ではあまりに露骨だからやれきれない。最後に午後の五時にもう一度受取りに來いと言つたのが解らずほんやりしてゐると、老人その不可解の一言を残したまゝ、サツサと片付けて出て行つてしまふ。またしても狐





につまゝれた恰好で兩人あきれ返つてゐたところ、傍から見兼て件の労働者の親分、時計を出して五時の處を指示してくれたりしたので、初めて様子が分明し、一旦引上げ、トーマスクックをまづ済ましてしまふことにする。ところが汽車の方は何でもトーマスクックに依頼すれば簡単に運んでしまふとのみ思つてゐたところ、寢臺券は Wagon lit の會社へ行かなければ取扱はぬといふことが知れ、此處でもまた大まごつきにまごつく。伊太利はさすがに歐羅巴での遊覧見物の國であるだけ、各國からの觀光客が輻輳するところ、寢臺券は特に Wagon lit 會社が専賣してゐるのである。そこはまた大混雑で言葉が通ぜず、後まはしにでもされたひには一大事だと、ひどく案じてゐたところ、この時の北島君の佛蘭西語の流暢だつたこと僕特に驚いたくらゐ。それで首尾能く豫定通り月曜日の汽車に乗り込むことが出来たが、後で今の君の佛蘭西語は前代未聞の傑作だと言つたら、北島君は、『うん、その筈だ一生懸命だつたのである。行列の中で順番の廻つて来る間、作文と會話を何度口中に繰返して練習したかしのれないよ。』と。

### 龍頭蛇尾

畫飯後名畫の複製の一手販賣であるアンデルソンといふ店を訪れた。一種の商店に相違ないから大

通に面した普通の店とばかり思つてゐたところ、それは大間違ひで、これはまた、貴族の別邸とも見られるやうな門構だ。その門が閉つてゐたけれど、押すとすぐ開く。更に奥へ入つて行くとなかく、立派な店だ。なるほど世界的にやつてゐるだけはある。歐洲各國の名畫複製は殆ど餘すところなく、しかもそれが整然と國別に誰にでも早わかりのするやうに陳列されてゐる。それよりも何よりも驚いたのは、日本で二三圓してゐたやつが十五錢の正札つきだつたことである。日本の商賣人の無闇に儲けやがる。殊に最近やつて來た一人の日本人などは、この複製を各種悉く買ひ込んで行つたさうだが、複製を複製して一儲けしようとしたくらはる奴に相違ない。僕は西班牙でこの複製について大失敗したことがある。それは外でもない。やつぱりアンデルソン同様、普通の商店くらゐに思つて入つて行つてまづ少しも商賣屋らしくなく、馬鹿に落着いた、貴族の應接間とでも言ひたいやうな一室に通された時に面喰つてしまつた上に、畫傑ゴヤにあまりに心酔してゐたせるもあるが、大に調子がはずんでゐる場合だつたので、つい傲然とゴヤの作品全部をとり揃へて呉れと口を切つてしまつたのだ。いやゴヤの作品といつたところで數に於ては大したこともあるまいとたかをくつてゐたのであるが、やはりこの邸宅相當な貴婦人めいた主婦さん、すつかり落着き拂つたもので、悠々とこちら

の註文通り取揃へて來たのを見ると驚いた。ゴヤの作品のみで百何十枚、それが伊太利よりも凡て物

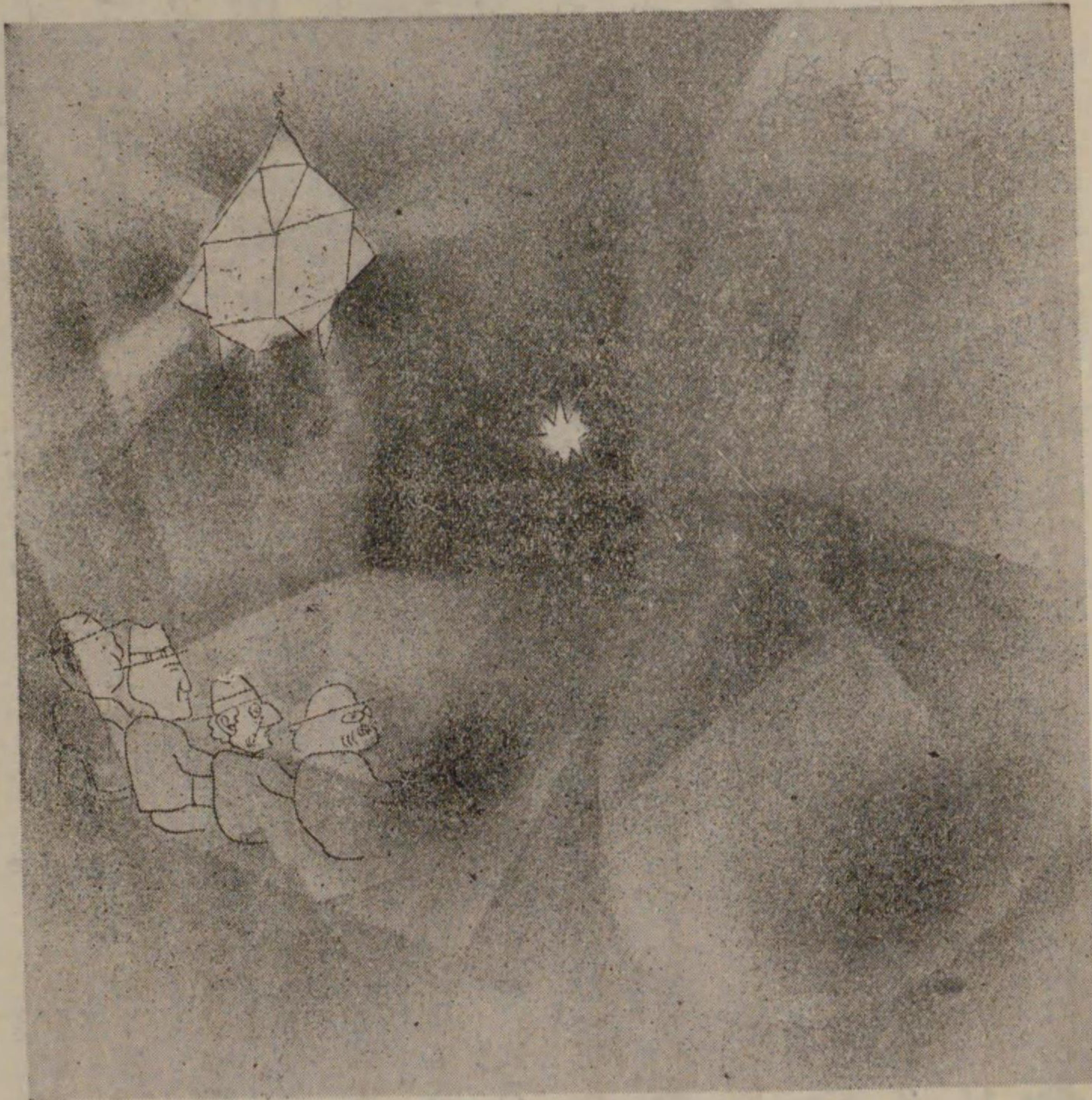




價の高い西班牙のことだから一枚が七十錢以上に相當し、總計百四五十圓に達したのだから僕にとつては一大事だ。大に日本人の體面を重んじ、この際財囊の底を拂つてしまへば文句はないが、この複製所望は僕のふとした出來心である。かういふ場合にはまたしても言葉の不明瞭な一事が役立つ、かまはず、その中から撰分け、結局四五十枚に減らしてしまつたが、實は最初の元氣何處へやらこんな氣まりの悪かつたこととはなく、主婦さんも妙な顔をして驚き呆れてゐた。勝手な變方來と思つたことだらう。午後五時に約束通り再び佛領事館を訪れると、旅券の裏書は間違ひなく出來てゐた。これで巴里へ戻る用意はすつかり濟んだのである。いよくローマ見物にとりかゝる。

未來派の酒場

先刻大使館で外務省の留學生といふ吉浦君に會つた。明日曜日羅馬古蹟巡りの案内をして貰ふことにたんのだら快諾してくれる。宿へ戻つて夕飯を濟ますと、九時頃約束しておいた大使館の山田蕙子





君が訪ねて来て、一人近所のカフェで友人が待つてゐるからすぐ出ようと誘はれる。芝居のすぐ隣の  
 カフェ、そこでは自費留學生のM氏に初めて會ふ。一緒にまづ穴藏(地下室)のビール屋へ行く。  
 獨逸式のバーでビールはミュンヘンのを取寄せてゐる。素敵に美味だ。軍人が定連のやう、嚴めしい  
 連中が傲然と構へてゐる。夜は何處も淋しいが羅馬は古いだけ特に物凄く淋しい。その淋しい町を奥  
 深く行つて、未來派の連中が始めたといふカーザダールといふ酒場へ案内された。坂の町の中途で氣  
 味の悪いほど暗く廢頽した靜かなところだ。入る前に外套のポケットには何も入れて置かぬ方がよい  
 よく盗られるからと、山田君たちに注意される。いよく氣味を悪くする。入るとすぐ外套を預ける  
 ことになつてゐる。内容は成るほど未來派である。未來派を應用した製飾一てんばり、暗く、沈んで  
 物凄いかと思ふとポツカリ偶然のやうに明るく、強烈な線と色彩の室へ導く。新しい人々がその室内  
 に浸つてよい氣持にならうとしてゐる。昔の劇場の廢頽した跡を使用してゐるのださうだ。穴藏の底  
 のやうな氣がする。蝙蝠でも飛び交へさうなところだ。「實在」といふ雑誌を出してゐる文士が御大將  
 で經營を始めたとか。拙いシャンパスを出されたので山田君憤慨し猛烈な抗議を申込んだりしたが結  
 局、埒が明かず一文も支拂はずに飛び出してしまつた。何のために入つたのかわけがわからず、未來  
 派の畫のやうに感覺そのものが藝術であるとしたら、一種不思議の破壊的な出鱈目な氣味の悪い感觸

を充分味つたわけで、未來派の酒場に對しその眞意義に接觸して眞面目に敬意を拂つたことになる。

ローマの日本化

ローマでは今日本の眞似を盛んにやつてゐる。日本の葬式に用ひる白張提灯に似たものが、この未  
 來派の酒場にも麗々しく應用されてゐた。キモノ、ゲイシャといふ日本語は可なり普及されてゐると  
 のこと。日本の着物など立派な店で賣つてゐるがそれが時々  
 賣れて行くといふから世界も大分調子が變つて來てゐる。し  
 かもその日本衣服が八百リラ千リラ(八十圓・百圓)といふ  
 高價であるといふ。ローマのおばあさんが料理屋へ日本の紋  
 附羽織を洋装の上に羽織つて來て得意だつたとは山田氏の實  
 見談、偉大な軀幹の洋装の上に紋附羽織、想像しても見給へ。  
 痛快な恰好だ。日本にも外國かぶれの連中にこんな矛盾が澤



山ありはせぬか。他人を笑ふよりまづ自己を省ることによよう。



## コロセオ

羅馬古蹟めぐりは手近の羅馬草創の七丘のうちで一番早く開けた一丘を見る。五室の跡、罪人の留置所の跡、門の跡、凡て原形は破壊され、その残墟は穴と草と斷崖の集團になつてゐる。空は晴れて白い雲が長く帯のやうに流れてゐる。遊覽日和である。全體羅馬そのものが既に野天の博物館のやうなもので、一大骨董屋とでも言ひたいくらいだ。寸土一石悉く歴史的に因縁を秘めてゐるのだ。唯瞑目して漂渺と歩いて行つただけでも、胸に萬感湧き返つて、興味の盡くるところがないのである。亞米利加のやうな新興國と對比したら殆ど別世界の感あるに相違ない。丁度日曜だつたのでこの舊蹟もロハで見物ができたといふもの、此處をつつ切つて行つて今度はコロセオの舊蹟へ出ると、他にも外國人の見物がチラホラ。こいつはまたあまりの大袈裟なのに肝を潰す。

コロセオ王がこれを作つた時、これが破滅するときには羅馬大帝國が亡び世界が亡びる時だと豪語したさうだ。この意氣でなくてはこんな馬鹿けた素でつかいものが出來やう筈はない。抑もこのコロセオといふのは猛獸と猛獸、人と猛獸、また人と人との争鬪を見物する一大觀覽場だつたのだ。五十萬人は充分入れたといふことである。昔の東京の人口を全部收容し得たと思ふと驚かざるを得ない。

しかも凡て無料で見物させたばかりか、それ／＼食物をも振舞つたといふ。國を擧げて驕奢と遊樂に耽つたその當時の光景がこのコロセオの土を踏むとマザ／＼と眼底に髣髴として來る。吉浦君の話によると、黒人を戦はして最後に勝つたやつが相手を殺すか殺すまいかを觀客にたゞす。そのとき貴婦人が右の母指を擧げればその男の命は救はれ、左の小指が振り上げられたが最後殘忍にもその英魂は忽ちコロセオの露と消えてしまつたのださうだ。また基督教徒を猛獸の齒牙に葬つたり、命がけで遊樂に溺れた慘憺たる生地獄の跡なのである。中央の闘場、猛獸を收容した地下室等の廣い面積を取り巻いて、圓形に何層かに聳えたつた觀覽席も今は全く穴居の跡のやうに廢頽してしまつたが、軍人がよく此處へ來て野營することなぞあるとのこと。なるほど、これなら室が澤山あつて都合がよからう。しかし一方一種の便所として利用されるので、掃除人が必要であり、日本の華嚴瀧と同様、よく自殺場所として選定されるといふことである。それがあまりに廣大に過ぐるため、十日も二十日も發見されずに濟むといふことである。それは兎も角、月ある夜は強い陰影を形成し、凄まじく美しいといふことである。入口の廣場には見物をあて込んでガイダーがウヨ／＼してゐる。こいつがまた伊太利の名物とでも言はうか。煩く執念深く付き纏つて來る。中には世界萬國の言葉ができると素敵に自慢のガイダーもゐる。勿論夫等は日本語もできると日本人に向つて豪語してゐる。それは一時間十リ





ラ(一圓)くらゐで案内する。彼等は蓄音機と同じだと北島君が言ふ、なるほど日本語、英語、獨逸語等案内に必要なだけの言葉を吹き込んだだけのものである。ふッこんだだけはベラッ、饒舌るが。その他は何にも出来るものか。勿論僕たちには吉浦君といふ立派な案内者があるので、所謂ガイダーのお世話になんかなりやしない。また繪葉書賣が澤山肉薄して来て、(アナタ、イカッ)なんて日本語をやられるのに時々度膽をぬかれる。

癖の悪い馬車

コロセオから馬車を雇つて、昔榮えたといふ街路の一つ「ピサ」の路を馬蹄を響かせて走つて行つた。目指すところはカラッ、王の大浴場、カラッからコーバチスである。この馬車がまた問題で、全體人氣の悪い伊太利のことだから今更事新しく擔ぎ出すわけでもないが、朦朧氣分を發揮してなかなか以て癖が悪い。最初は無闇に高くふツかけるのが例で、吉浦君が交渉してくれ、歸つて来てなほホテルまでを廿五リラに値切つて乗ることができたのであるが、途中からソロソ、割増金酒手の請求で煩いことつたらない。カラッ、王の浴場の跡、これまた想像以上に宏大なものである。此處には番人がゐる。その王の浴室も見たが、このカラッもまた驕奢と滅亡の歴然たる記念物の一つなので





わざとその部分だけ銅を用ひたのだ。いろくくと迷信的困縁を

ぎ足したのであつた。つまり銅製の足袋をはいてゐる形である。善男善女の幾千萬が参詣の度毎に交るくキツスするので

偉大な像のやうな足跡のやうに、ピエロの足跡をこの石疊の上に、刻みつけたかもしれぬが、偶像崇

コーバチス

ある。

コーバチスはピエロがコロセオから此處まで逃げ延びたが、俄然大悟して踏止まり、直に引返して

道のために殉じたといふその踏止まつた地點を言ふ。ピサの道のその石疊と共に、堂の中に保存され

てゐるのである。もしこれが東洋だつたら、コロンボで見た、お釋迦様の足跡といつて石に穿たれた

拜もそこまで脱線はしてゐないけれど、そこに祭られてゐる、ミ

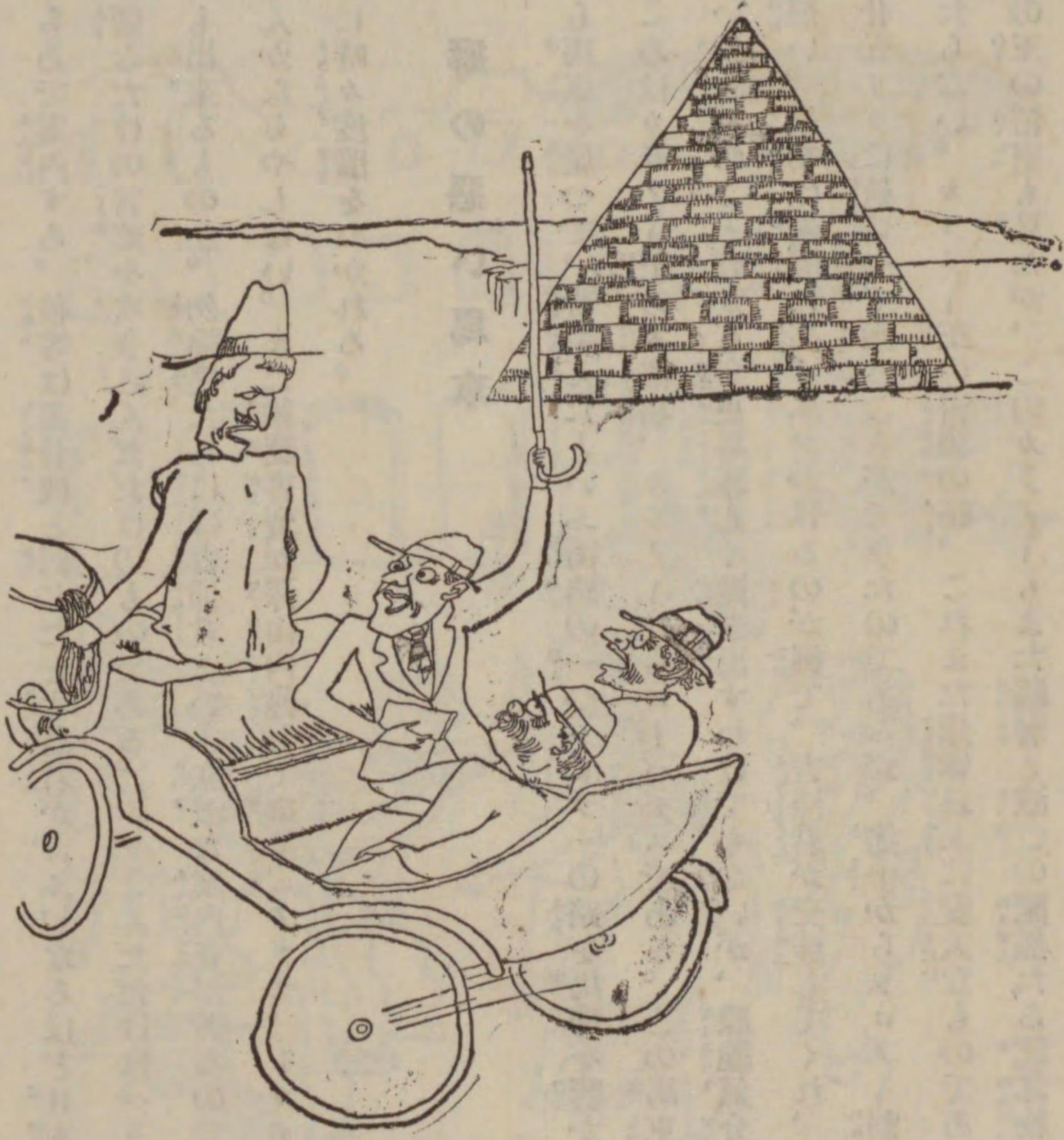
ケランゼロの石膏模寫像の足頸以下が特別な色彩にオビンヅル

のやうにテラ〜光り輝いてゐるので不思議に思つたら、何の

こつたい、石膏像へもつていつてその足頸以下を銅で造つてつ

ぎ足したのであつた。つまり銅製の足袋をはいてゐる形であ

る。善男善女の幾千萬が参詣の度毎に交るくキツスするので





つけることは敢て日本ばかりではないのである。

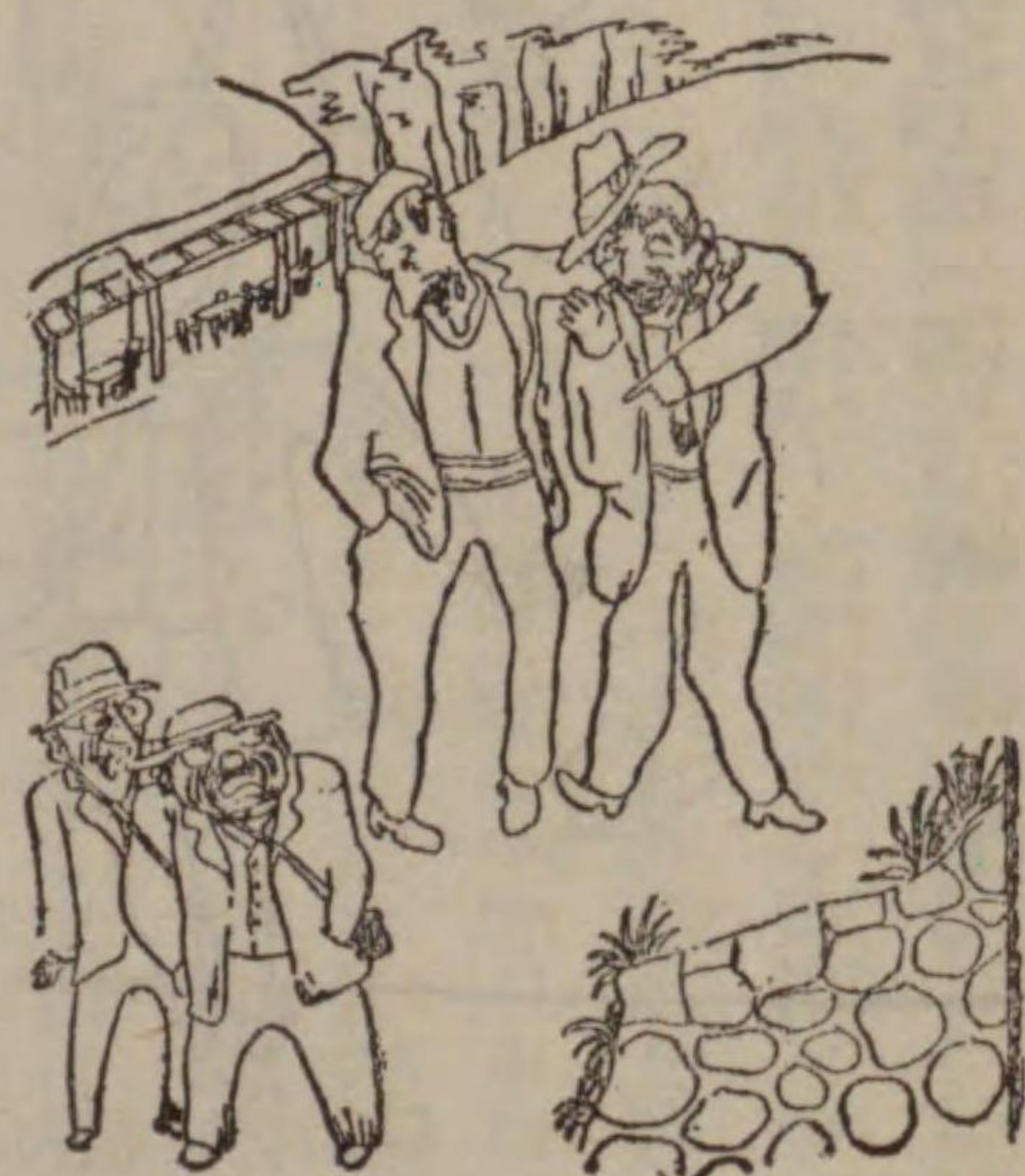
### ジャニコロの丘

こゝでまた頑迷に馬車屋から強請され、癩に障つたので一旦宿へ引上げ吉浦君と三人で晝食を共にすることにした。その途上これも伊太利名物の一つ、酒を運ぶ車に時折行き合つた。その色彩模様の強烈な幌をかけて、その中の酒樽に腰かけた馬丁、上機嫌居睡の圖なぞは、悠長とした何千年來の古い都にはいかにもよく調和したなつかしいものであつた。午後は自動車を雇ひ郊外のサンポーロ寺院を訪れた後、引返してジャニコロの丘へ上つて、嘗て小港醫學博士だけが伊太利旅行に出でこの羅馬へ来たとき、逆も豫定期日中だけではローマ見物を思ふ存分決行することができず、癩に障つたといふのでこの丘に上り、見残した所を地圖と引合はせて見て、漸く満足したといふことほど、殆ど羅馬全市が指呼のうちに展開されてゐるのだ。ガルバルデーの銅像が建立されてゐる。このジャニコロの丘も電車で上ることが出来る。その電車の終點に近く珈琲店があるが、そこから出ようとすると、丁度行き合つた醉漢數名、我等を擲擄してシノア（支那人）シノアと叫ぶ。そればかりか「どうだいな歩さぶりは、素敵な姿ぢやあないか。」てなことをいふ。癩にさはるが相手は酔ッぱらひ、また元來

洋服を着ると兩股の空間がいよゝ顯著になつて無恰好を極める日本人、何とも申譯がないと黙つて引込むよりほか致方がない。何にしても伊太利へ來ると、フロレンス以外何處へ行つても、かうした不快な感慨に襲れることは珍らしくない。しかし何處へ行つても支那人だ支那人だと言はれるのは、うんざりしてしまふ。支那の方が日本よりも國が大きいだけ、また古いだけ世界的には有名なのかもしれぬ。

### 古都の暗黒面

このまたジャニコロの丘の麓の町は羅馬でも危険區域、魔窟の本城と目されてゐる。歸りに徒歩でその邊を通つて見たところ、兩側の二階・三階・四階の窓から四五名宛組をなして首を出し、見下してゐた男女、凡て魔性の本體ばかりで、何れも眼光既に異様の光をたゞへてゐて、それらが吾等に向つて罵詈雑言、幸ひ言葉が解らぬから存外平氣で通れたのかもしれない。逆も夜なぞは一步も踏み込めないとのことである。つまり羅馬の主要の町の方からは川向うに相當する。一帶の低級の町である。







尙コロセオ附近には夜になつてうっかり通りうものなら、頭上の高い窓から綱の先に輪をこしらへ、釣り下ろしてたぐり上げるといふ恐ろしいところもある。また車中、驛内、宿屋等でも拘摸、かつさらひ、盗賊の災厄に出あつたものも僕の知つてゐる範圍内でさへ可なりある。一寸その邊は支那に似てゐる。未來派料理へ同行したM君などは、それが決して場末でもない、立派な町の中で、それは深夜には相違なかつたが強盗五人に圍まれ、ピストルを向けられたが、そのときは酔うのために左程驚かず地上に胡座をかき、さあ打たば打てと覺悟のほどを見せたところへ、幸運のことに、丁度巡査が來合せたので助かつたと言つてゐた。何しろ恐ろしくも物凄くい國である。また不潔な點も支那に近い。羅馬市の殆んど何れでも、立小便などは平氣らしい。一寸横町へ入ると共同便所といつても頗る簡單なもので、小便壺が溢れ出し、石疊にさながら小川を何處までもと形成してゐる。羅馬は骨董の老舗に譬へて想像した方が早分りがする。立派な藝術品の一隅には、何百年何千年からの塵埃が沈積してゐると同様だ。

日本人の腹切

最近羅馬の新聞紙上に、日本人の腹切といふミダシで一日日本人に關する一珍事件が報導された。そ



これはまた歐羅巴の各國新聞にまで轉載されたともいふ。その事件の主人公、その一日本人といふのは即ちM氏のことであつて、その事實はしかもその主人公から穴藏の酒場でミュンヘンビールに舌鼓を



うちながら、拜聴することができたのも不思議である。かくして伊太利の旅は、一方に藝術的に僕を蘇らすと同時に、一方陰惨な世界へと、ジリ／＼と導き入れようとしてゐる。一體、日本人の腹切といふ題目の底に潜んだ眞の事實とは何かといふと、M氏が卓上燈下にさしのべた彼の左手の手頸が既に無言にして事件の凡てを歴然と物語つてゐるのだ。僕はこれを眼前に見たとき慄然として驚き恐れた。それはまだ生々しい切傷の痕跡である。長さ一寸以上將に左手は切斷されんばかりである。山田君が傍らからM氏に代つて、その當時の消息を冷かに語り出す。これを簡単にいふと、實はM君が伊太利到着以來強度の神經衰弱にかゝり、二ヶ月以上も殆んど不眠の状態をつゞけ、苦悶の結果魔酔劑として強烈な酒をあふればあふるほど病勢は募るばかり、最後に醫師について睡眠劑を得、先づ一回分を服用したところ、無効なりしたため、二回分、三回分と、一夜のうちに、劇薬を多量に用ひた結果、あまりの苦

しさに夢現の心持で、動脈を切斷しようとして、ナイフを振つて自ら傷けたのが即ちこの左手の手頸なのである。M氏はそのまゝ昏倒し、この騒で下宿屋はふるへ上る。大使館へ擔ぎ込むやら、これが新聞紙上に日本人の腹切として報導されたわけである。外國人は日本人の自殺と言へば何でも腹切と心得てゐる。

### 不穩の汽車

五月一日、生憎と羅馬の勞働祭の日に出あつてしまつた。自動車も馬車もみな休みで、交通機關は全部杜絶されてしまふ。何處へ行くにも徒歩にあらざるは致方がない。これにも閉口した。ミケランゼロの地獄の大壁畫等で名高いバチカン宮殿まで可なりあるが、それもテク／＼歩いて行かなくてはならなかつた。羅馬市民は承知の上だから平氣だ。死んだやうに靜な町を人間ばかり、ゾロ／＼と動いてゐる。歩く可なり暑い。忽ちワイシャツが汗でびしょ／＼になる。しかし、宿屋の自動車だけは都合がついた。——それも停車場まで……汽車は二時二十分に出るといふ。お祭で汽車も休みかも知れぬと宿屋のものが言つてゐるが、ルツクス（直通車）だけは安全だといふのでホツとした。ルツクスはナポリと巴里間を直行してゐる。僕には何といつても巴里がなつかしい。このルツクスに乗込



んだときは、最早巴里の明るい華やかな心持になりきつてしまふ。車掌が新聞紙を持つて来て呉れる。何事かと思つたらその新聞紙上に支那皇太子の肖像が出てゐる。吾々を支那人とまたこいつも間違へてゐる。どうも怪しからん。

そのうちに發車したが、途中のとある停車場へ着くと、停車時間を超過してもどうしたのか一歩も動き出さない。車外には何となく不穩の氣配が横溢してゐる。よく鐵道従業員の同盟罷業が行はれると聞いてゐるが、急に心配になる。こんなところで立往生をやられた日には大變だ。驛員や車掌や巡查や軍人のやうなものゝが穩かならぬ行動をする。いよく危険だと思つてゐるうちに、一人の暴漢らしい奴が僕等の車室の外へ落書して姿を消してしまふ。するとその落書を見て、驛員共は薄氣味悪く笑つてゐる。いやもう、淋しい心持になつて外國の旅もつづくくいやになる。いかにも不安な日だ。まだ羅馬を出て二時間も経たぬのである。



英國貴婦人の赤毛布

しかし不穩の状態もいつの間にか解け、それでも一時間以上停滞した上、いよく車臺はゆるぎ出した。またホツとする。車掌に二十リラ（金二圓）やつたら大恐悦。食堂へ行くとチャンと室を閉めて鍵をかつてくれるし、歸つて來ると寢臺も立派にできてる。何でも金の利目だ。あまりに肥満して、殆んどよろばひさうに歩いてゐる婦人が乗つてゐた。それがお三時にも夕食にも重い身體を持ってあましながら食堂へやつて來た。その婦人は丁度僕等のすぐ隣室で、室がわからぬときはいつも僕たちの目標になつた。寢臺をこしらへるときだつた。この婦人は寢臺はこれが初めてだと言つて笑つてゐた。よく大聲で笑ふ婦人だつた。英國の貴婦人ださうだ。そんなことをみな車掌が報告してゐる。



これが朝になつて洗面所へ入ると水の出口の栓の取扱ひ方を知らなかつたと見え、すつかり洗面所を洪水にしてしまつた。新聞紙や手拭を敷いたりしたつて間に合はない。困りぬいて逃



け出してしまふ。日本人ばかりが外國へ来て赤毛布を演ずると思つてゐたが、現に英國の貴婦人でさへこの有様である。これこそ寧ろ滑稽だ。ところが僕が今度は頸筋を南京蟲のために七八ヶ所やられた。凹凸甚だしく、逆も人前へは出られぬ。北島君も少しはやられた。伊太利は南京蟲の本場だといふが、まさかルツクスの寢臺車でやられようとは夢にも思はなかつた。面白半分車掌に、ピネーズビネーズ（南京蟲く）と叫んで頸筋の明瞭な犯跡を指摘して見せると、この室は新しいので南京蟲のゐる筈はない。蚊にでも食はれたんだらうとほけてゐる。

ア・ラ・ガール (à la Gare)

汽車は國境モダーンへ来るまでに三時間も遅れてゐる。直行車でありながら暢氣なものだ。伊太利の汽車には日曜に休むのがあるから、こんなことはお茶の子さいさだ。やつぱりこのモダーンでは警察官が旅券を調べに來たり、税關吏もやつて來て各自の荷物を一應検査した。しかし、ほんの形式だけで、たゞ金貨と煙草だけが相變らず嚴重だ。國境の雪山の眺めはまた雄大を極めたものだ。日本アルプスの麓を掠めて、汽車が走りつゞけて行くやうな處、野は青く、梨の花、林檎の花が満開で野の日と雪山と、天地相映發の山間の春は眩いほど光輝が充ち溢れてゐる。偶々山上に城壁の

やうなものが見える。村もいくつか見て走つて行つた。隧道も随分數多く存在した。デイチヨン驛へ着く前乗客も大分退屈なら、鐵道従業員も怠慢を覺えてゐる。車掌に葡萄酒を馳走してやると忽ちよい御機嫌になつてしまひ、隣室のマダームは英國人だらうと聞いたなら、「うん左様だ。ありやあ、à la Gareだ」と投げつけるやうな面白い手つきをして見せた。à la Gare（ア・ラ・ガール）は非常な侮辱の意味だ。次に青い衣服を着た娘を連れた三人連は白耳義のミニスタ―だと教へてくれる。一國の大臣でも、この汽車ではこれ以上がないので、僕たちと同格だ。巴里近くなつてから、再び例の車掌が飛び込んで來て、今貰つた大臣のチップを披露する。二本指を見せてチエーチエーバーバー、吐き出すやうな真似をする。二十法のこと、（二圓）四人に二十法はケチ臭いといふことだらう。丁度僕等二人のチップと同額だ。またしてもそつちの室に向つて à la Gare を盛んにやる。下等だが滑稽な大茶目だ。斯くして巴リのリヨン驛に着いたのは午後の十時、羅馬から丁度三十二時間を要したことになる。





## 通譯か被通譯か

四度巴りに歸つて来て、歐洲の他の都と比較し得る資格を有する今日になつて見ると、巴里ほど華やかな明快な都は確かに見出しかねると言ひ得るやうになつた。それが今度には特に巴里の繁華の中心ともいふべき、オペラ前のグラン・ホテルへ泊り込んだのだからいよく、以て吾が世界は光輝に充ち溢れた次第である。さてこのグラン・ホテルといへば、恰も東京に於ける帝國ホテルといった、外國人相手の第一流旅館として、その客室大小高下合せて千以上を數へると聞いただけでも、その廣大さが知れやう。以前泊つたシチー・ホテルなどは、これに比べると全で塵箱同然だ。急にブルジョアになつてしまつた。併し旅はかうなくては面白くない。昨日の乞食生活から一躍貴族の驕奢を極める。かくして天上天下兩面を知らなくつては畢竟どつちも不可解に終るわけである。シチー・ホテルへ預けおいた荷物を受取りに行くと、若い主人主婦グラン・ホテルへ陣取つたと聞いて、目を丸くしてゐたのも無理はない。そんなに急激な變りやうである。ちやうどその折だつた。鈴木大寺の兩君は留守だつたのでその室で歸りを待つてゐると、女中のマデレーンが慌てゝ入つて來、さも當惑した面持をして來て何か言ふのだがわからない。けれど何事か一事件が持ち上つた様子、腕を引かるゝまゝ階段

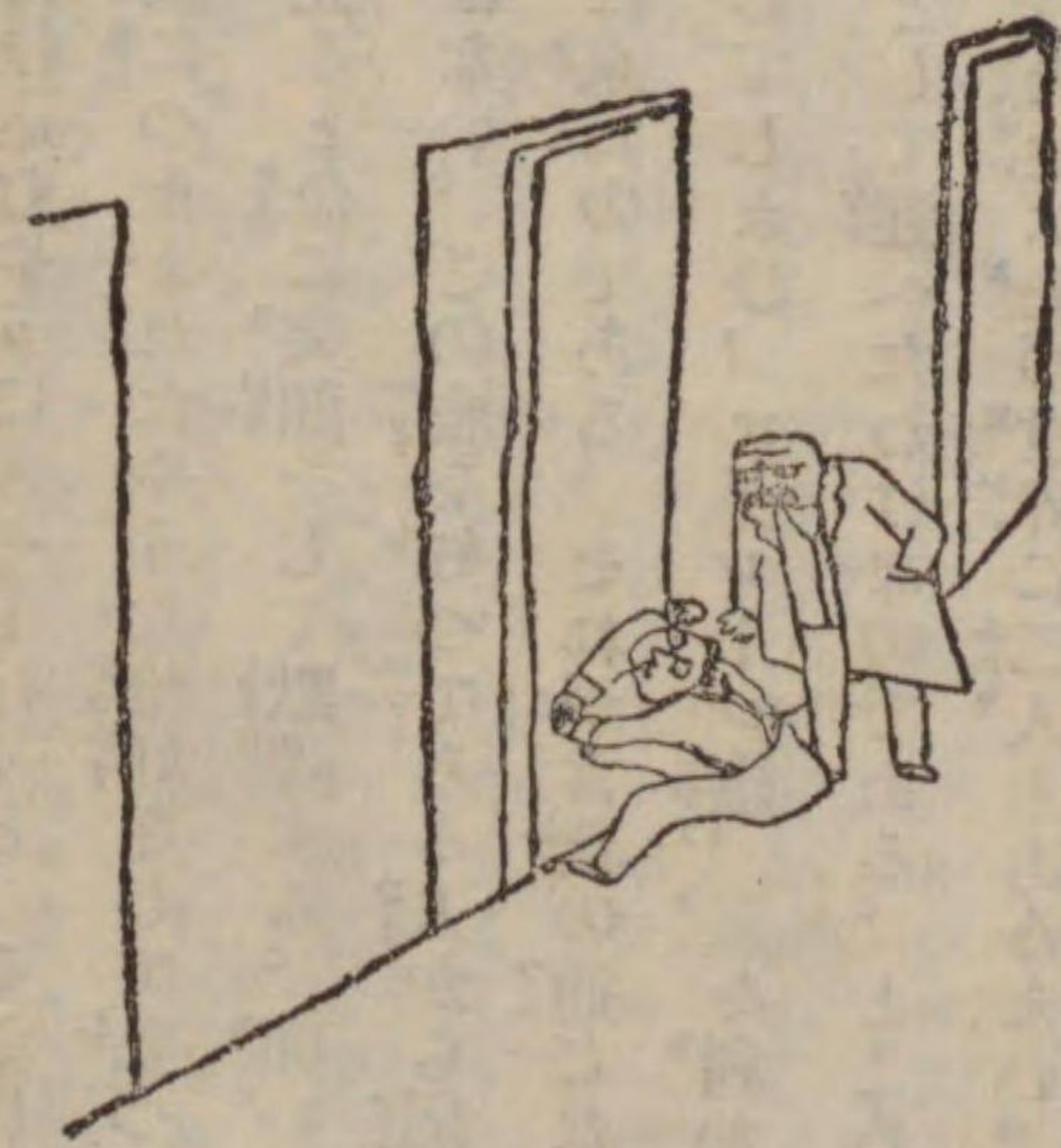


を下りて、暗い帳場へ轉け込むやうに入つて行くと、そこには一人の若い日本人が狐につままれたやうな恰好をして立つてゐるが、僕日本人を見ると急に笑顔をして黙禮する。聞いて見ると大した問題ではない。この宿を知つてゐる人から紹介されて、貸間を探しに來たのである。それが言葉の通じないところから雙方閉口してしまひ、マデレーン嬢、氣を利かしたつもりで僕を通譯として迎へたわけなのである。ところがこの通譯ほどあやしい先生は先づ世界に二人とあるまい。相手の日本人の話はわかつて、それを佛語に翻譯することが至難の業だ。つまり通譯の資格は厘毛もないのである。却つてこの通譯よりもその通譯される日本人の方が佛語が稍上手なのだから、凡そこれくらゐ馬鹿けた話はあるまい。これでは全で通譯が通譯されてゐるやうなもの、その若い日本人は平尾といつて化粧品研究に來たのだが、今まであまり立派なホテル生活をしてゐたので、友人の忠告により、生活改善の必要から、ちやうど僕と反對に今度は下級ホテルに移らうと思つて來たのださうだ。しかし室を見てあまりの貧弱さにあきれて立ち去つた。



### 大ホテルの威力

實はかくして Boulevard des Capicines Grand Hotel に驕奢を極めたのも、最早歸朝の日も決定、マルセーユから乗り込む船のキャビンまで約束ができた場合、大いに最後の健康を祝福するために、特にこゝを選んだのもある。ところで如何にそれが華美を盡し、宏大を極めたホテルであらうとも最早大分外國のホテル生活には馴れ親しんで來てゐるのであるから、大してそこに失敗のあらう筈はないのであるが、宿によつて全く特殊の設備がしてあるため、うっかりするととんでもないお笑ひ草を演ずる。現にこれは内密だが、最初一旦自分の室へ通され、ふと別室の北島君の室へ出て行つて戻つて來ると、もう自分の室は鍵づけにされて、いくら押してもひねつても開かない。青くなつて北島君に加勢を頼んだが効果は前同様。手のつけやうがない。残念ながらガルスンの應援に待つことにしたところ、馬鹿くしいではないか、こゝのドアは各室開閉と同時にひとりでに鍵の下りる設置



になつてゐるのであつた自分の室の鍵はいつも所持しておく必要がある。つまり急に大ホテルへ泊り込んで、その威力に心漂渺としてしまつたのである。

### 佛人と英人と

パリから倫敦へは一番譯はない。ガール・ドウ・ノルドからドバー・カレの連絡船を越え、倫敦のビクトリアヤ停車場まで都合七時間半で行ける。それがまた獨逸・伊太利・西班牙の旅と違つて沿線の氣分頓に明るく、汽車汽船の設備は極度に完全してゐるので、特に春の旅などは麗かに長閑なものであつた。僕の倫敦見物はやはり北島君と二人きりの水いらす、彼地には副領事の渡邊君と十年前渡英してその儘倫敦ツ子になりきつてしまつた栗忠——栗原忠二——が待つてゐて呉れる筈。そこへ岡本一平君が亞米利加經由で今倫敦へ着いたといふ報知を、藤田のところから聞いたのだから、未知未見の國へ志すやうな氣持にはなれないくらゐだ。ノルド驛から乗り込むと、獨伊あたりの汽車と違ひ、乗客は多く英國人で、英國人の色彩が頗る濃厚鮮明である。そこで見るとなく思ふとなく、英人、佛人の對比が眼前に髣髴と浮き上つて來るのも妙である。英國人は唇が厚く見える。佛人は特に女になると大抵唇が薄ッべらで、それが輕薄に見える素因をなしてゐるやうだ。成程英國人は、



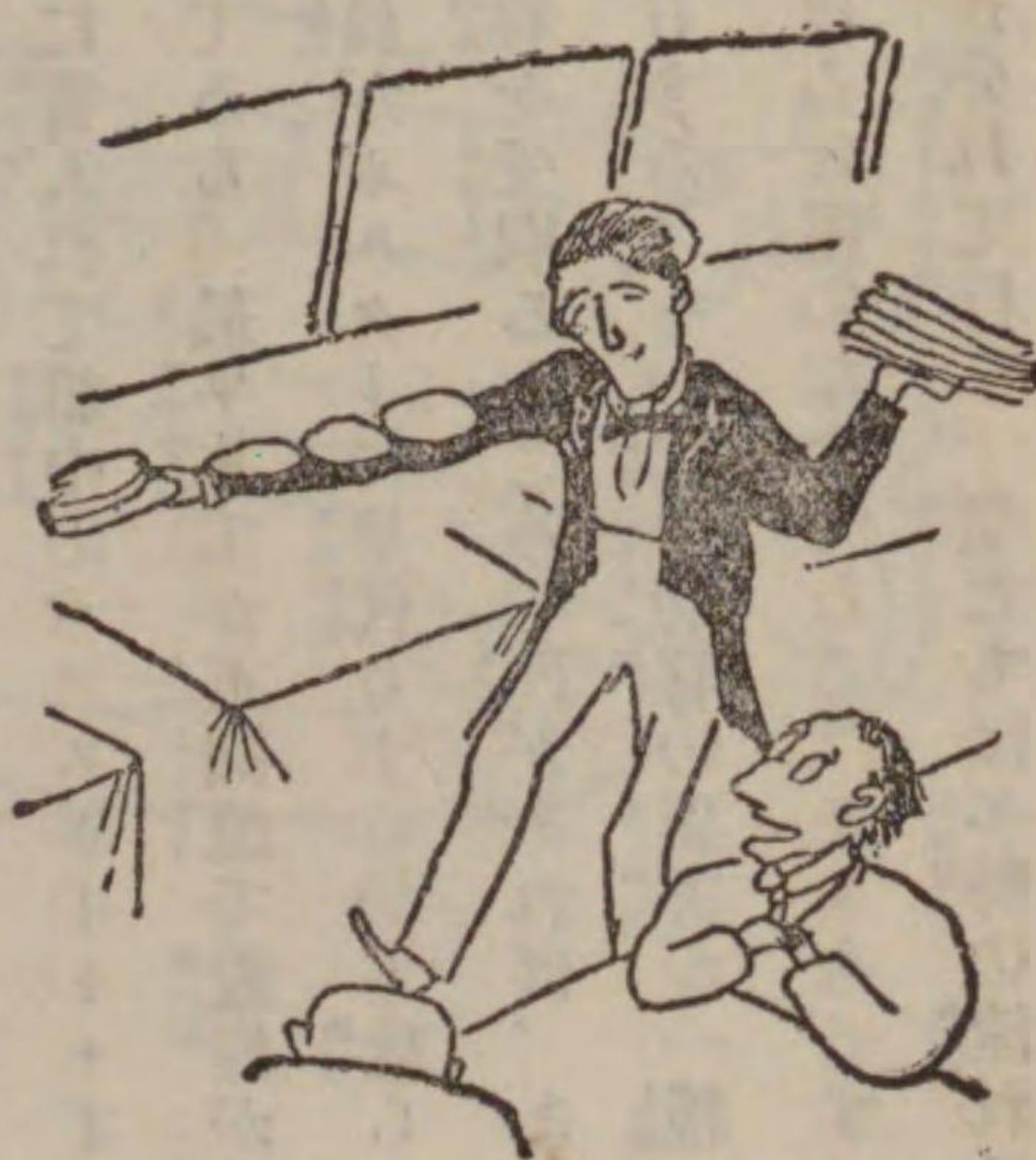


皆言ひ合したやうにすましてゐる。お行儀がよいといふのだから。それに比べると、佛人はお行儀の點に至つては可成り自由氣儘らしい。結局英人は反り返つた態度で威嚴を保たうとしてゐるが、佛人は猫脊で腰が低く、大分に茶味を帯びてゐる。食堂車で英國婦人と向ひあつたときは、如何にも窮屈で食事の味感を可成り減却された。それが倫敦では電車が定員通り満員の場合、一人婦人が乗らうとするときは、一人の男子は降ろされ、婦人のために代つてやらねばならぬといひ、また電車内などで婦人に足を踏まれたときなども、男子は却つて、Thank you と言はなくてはならぬなぞ聞いてゐるから、僕にとつては倫敦の婦人はもの恐ろしいのである。

ガルソンの茶氣

このまた食堂車のガルソンこそ、佛人の茶目振茶氣を代表してゐるものであつた。腕を斜めに延ばして、肩の邊までバターの小皿を五六枚も並べて乗せ、車臺進行の動搖に調子をとつて、料理運配に

活躍する様の巧妙で愉快なこと、日本の食堂ボーイのハイカラ氣取りですましてゐるのは天と地の相違がある。つい心まで晴やかになつて、料理が一段と美味を感じて来る。仍てCalai 驛につく。荷物は赤帽に托し、乗客がなだれをうつて出るその群衆の中に、僕等は没し去られてしまふ。するとこの群衆の内部に、不思議にも二つの小さな洞穴が構成された。しかしそれは不思議でも何でもない。つまり英人は總じて丈高く、僕等は忽ちエスキモー化されてしまひ、そこに構成されたといふ洞穴の底には、北島君と僕といふ二人の日本人の顔が、群衆と共に動いて行くにつれ、構内の屋根裏や青空を見上げてゐるのであつた。かうなると倭軀の日本人たるもの、その倭さを啣ちたくなる。それでもやつぱり税關は吾等を一人前に取扱ひ、一人前に調査する。少々不平だ。かくして旅券荷物の檢閲が済み、いよゝ、連絡船へ乗らうとしたが、僕たちの赤帽五十一番が見えない。巡査に聞いたら、船の方へ行つてゐるだらうと言ふ。船の方には多數の赤帽が各自自分の番號を叶んでゐる。五十一番の聲はどこよりも響いて來ない。さあかうなると何しろ時間に制限のある場合だからまごつきだした。ふと赤帽係とでもいひ



ふと赤帽係とでもいひ



たいやうな男を見つけたので、五法奮發して探して貰ふと、船のすつと隅の方にほんやり待つてゐたこいつ少しく低能かもしれぬ。とんだ奴にめぐりあつたものだ。何しろ厄介なことである。そんなことで僕たちは一番遅く乗り込んだので、船中のよい場所はもう皆塞がつてしまつた。

### 海峡の連絡船

海峡の波は、時に随分荒れ狂ひ、あまり大きくもないこの連絡船は可成り翻弄されると聞いてゐたので、既に覺悟はきめて來たのであるが、幸ひも幸ひ、實に晴々と長閑な日、船は宛ら鏡面を迂り行くかのやう。乗るとき妙な書附を貰つたが、つまりこの質問書に書入れて船中のパスポート・オフイスに出頭しそこで旅券を示し、口頭調査を受けることになつてゐる。最早凡てが英國流で設備が完成してゐるだけ、なか／＼嚴重なものだ。ドバーへ着くと、船員がホルターに早代りするものも珍らしい光景だ。大混雜のうちに船から停車場構内に入ると、上陸切符を受取るところの門があれば、またパスボールの代用切符（船中で呉れた）を渡す入口があつたりする。その代用切符の裏書が一種の符牒にでもなつてゐるのか、全部の乗客をそこで二種類に分ける仕組になつてゐる。こゝらもすつかり英國式だ。つまりこゝから二つの通路に、二列の人の流れが分れて行く。僕たちは多勢の流れの

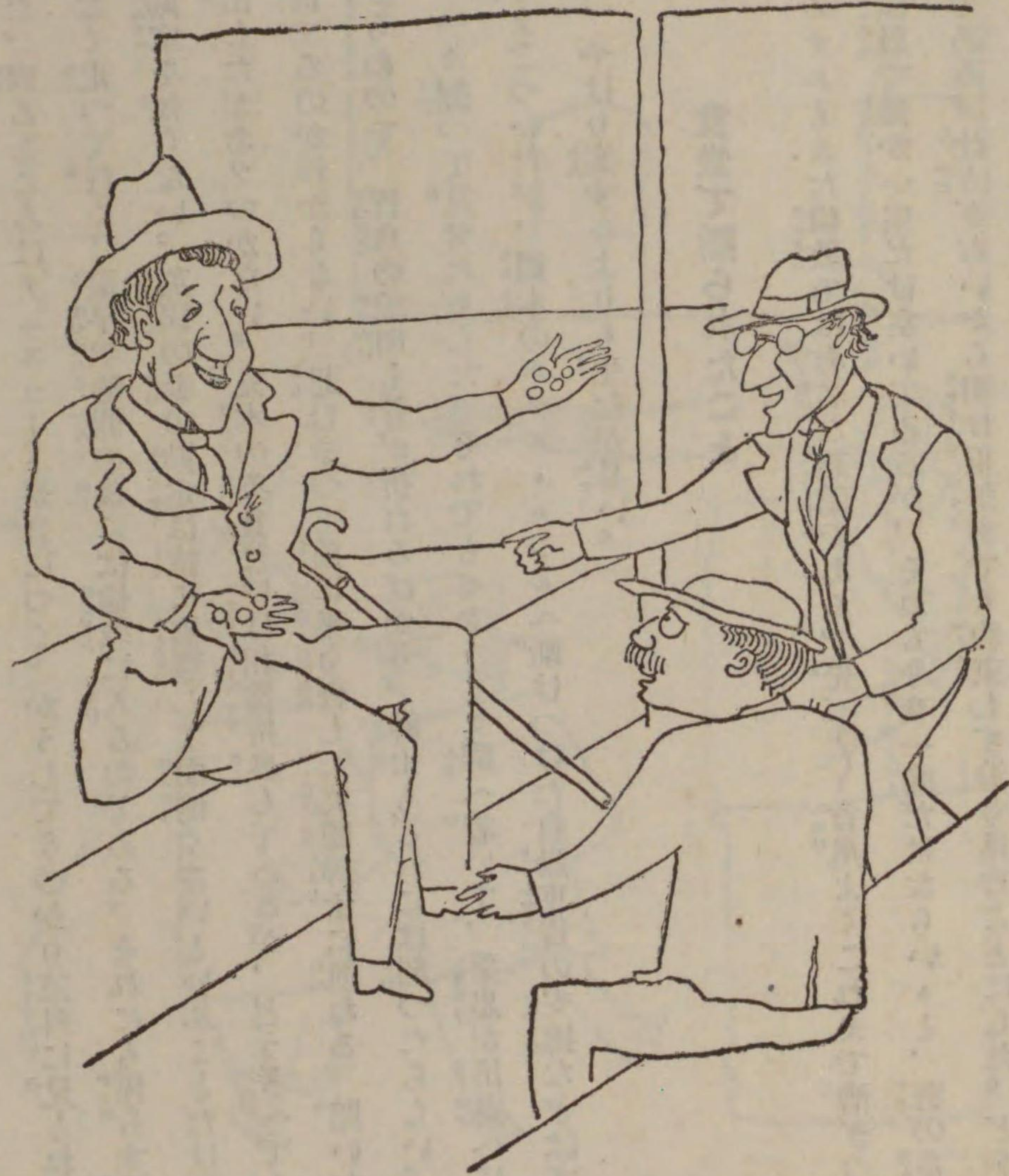




方へ廻されたが、今度はいよく嚴重で、名高い英國の税關に直面することになった。僕等は別に大した荷物もないので譯なく濟むと思つてゐたら、肩にかけてゐた寫眞機を先づとり上げられてしまひ、荷物は恐らく今度の歐洲漫遊中一番嚴密に調べられた。日本の小楊子を見てこれは何だは恐入つた。寫眞機は結局、一週間後に出帆する榛名丸で歸朝することがわかり、五バウンドの保證金を納めることになつて、兎に角通過した。その保證金は出帆の際戻して呉れるといふことである。相變らず外國の旅には煩雜な事柄がつき纏ふ。

### 複雑な英貨

ドーバー驛から倫敦ビクトリヤ驛までは、僅か二時間くらゐのものである。乗らうとしたら生憎満員だつた。ところがすぐ後へ一臺つけてくれたので今度は樂に乗れた。こんなところは日本の汽車より迅速に融通が利く。最早僕たちは英國の土を踏んでゐるのである。窓外に見える町の光景も規律正しい。外國人は日本人が菜ツバを栽培してゐるやうに、動物を野に栽培してゐる。羊が野に生えてゐる。馬が岳の上に芽ぐんでゐる。山羊の種が蒔かれてゐる。野原は皆動物の畑である。鐵路に近く、雉子が遊ぶ。鶉が餌をあさる。兎が飛ぶ。動物愛護の國はさすがに違つてゐる。佛國から來ると運動





は盛んだ。到るところにテニスコートが目につく。かうしてうつかり窓外に見とれてゐる間に、汽車は遠慮なく走つて行く。最早半時間の後には倫敦に入るのである。それにも係らず僕たちはまだ英國の金の勘定を知らない。英國の金の勘定は特に複雑して面倒くさいといふことだけは知つてゐる。急に慌て出したがおツつかない。見本の英貨だけは相當持参してゐるが、どう考へても一磅が幾シリングに相當するのかわからない。思ひきつて前に乗り合した英國紳士に訊ねる。聞いたところで英語が碌にわからぬので、折角の説明も骨が折れるばかり、紳士もこれには弱つたらしい。たうとう現金を出して、一々握つて見せたりした。それでもビクトリアア驛へ着いて、栗忠が出返へに見えなかつたので、一寸まごついたが、岡本のホテル・セシルへ駆けつけた自動車賃の支拂などはすこしも間違はずにすんだ。やはり案ずるよりも生むが易い。

### 食堂で断られたこと

セシルホテルもまた倫敦では有名な旅館である。先づく首尾よくこれまで漕ぎつけたはよいが、折悪しく満員で僅か一室だけ空いてゐるが、それも今夜一晩だけならいと、宿の番頭さんなかく権柄づくである。仕方がないから明日正午までも約束して泊り込むことにした。どうして素敵もなく



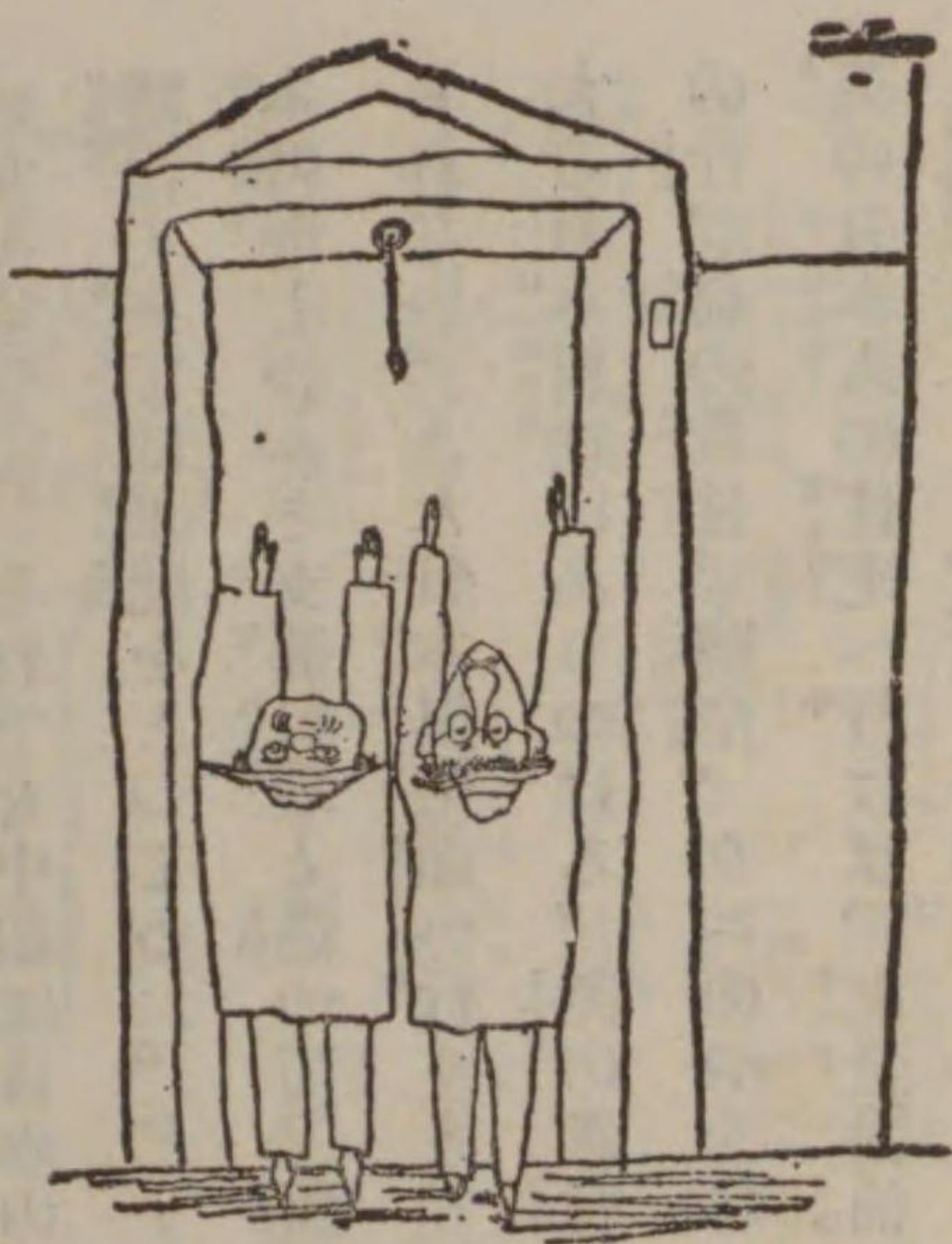


堂々としたホテルだ。十二三歳のボーイ数名が入口で、僕たちを見ると、日本語で『今晚は！ 今晚は！』と口々に連發して浴せかける。眞晝間に、『今晚は。』は可笑しいが、いかにもそれらが人形のやうに可愛い。ところでその夕食だ、やはり巴里のつもりで、簡易な脊廣服のまゝ、こゝのすつと奥の食堂へ通らうとすると、『アナタ、オマチナサイ。』をやられた。この食堂は脊廣服ではいけない。タキシードのやうな羽織袴に着換へなくては出られぬのである。巴里ならグランドホテルあたりの食堂でも、脊廣で大威張なのに馬鹿にしてゐる。大に癩だとは思つたが、元來タキシードなどの持合せがないのだから泣寝入だ。でその代り着流しの脊廣服の連中に向つては、別に相當の食堂ができてゐるの。で兎に角喰ひはぐれはなかつた。これに奮慨したわけでもないが、英國の料理は巴里のに比べると分量が少し宛で頗る味感拙劣だ。それにボーイの動作鈍く比較的高價だつたので、今度はほんたうに癩にさはつた。

留守中の發見

倫敦見物第二日目、まだ見物どころの騒ぎではない。先づ栗忠をハンマースミス驛近傍の場末へ訪ねたが、留守だつた。しかし却つて彼が留守だつたために一大發見をした。彼は、如何に場末とはい

へ平家建など樂にしたくもない倫敦の町の中で、一軒だち平家のアトリエを獨占してゐる。あまりに洒落てゐる。ところでその表扉に垂下した訪問客にそなへたベルの引手だ。こいつが馬鹿に高處に



outh Kensington Hotel に定め、その夜は岡本を合せ、東洋館といふ日本料理で會食した。

倫敦の日本料理

全く倫敦へ來ると日本料理に不自由はない。東洋館の主人は日本人だが、西班牙人そっくりだつた。そこでは湯豆腐、鯛の刺身、菜のひたし、金ふら(エビ)ざるそば(少々カビ臭かつた)しるこ

なつて、北島君と二人で飛び上つても届かなかつた。落着いて考へて見ると、日本人の栗忠のために建てた家ではない。もとく英國人のための家であるから、吾等日本人に役立たぬのはわかりきつたことである。またこんなところでも、吾等日本人の倭軀をなけいた。その足で領事館を訪問し、副領事淺邊君とは勿論、栗忠にも出會して、相共に強い握手を交すことができた。しかも宿は靜かな Queengate terrace の



を食べた。まづ日本の通りだといひたいくらゐ旨かつた。但し日本の宿屋へ泊つたやうに僕だちを晝家と知つて晝帖や色紙を持ち出し、御揮毫をと出られたときには閉口した。次に倫敦では古い町といふ大火の記念塔の立つてゐる近所に常盤といふ日本料理屋があるが、それへも案内された。こゝは妙な行燈風のものをぶら下げて、日本を表徴してゐた。こゝもぬた、刺身、木の葉井うなぎ等、日本のものなら何でも御座れといった具合であつた。英國人の若い女を使つて、それで女中頭は日本の女、これが洋装して時時出て来ては采配をとつてゐた。どうも不思議なことに、日本料理といふと支那料理と違つて、西洋人の客は全く影も見られない。また日本俱樂部へ行くと、何時でも膳椀附の堂々たる日本料理にありつける。魚の煮付、大根、カマボコ、魚の汁、鳥の煮付、鹽辛、ウニのやうなものも食へた。更に滯英の日本人の住宅へ行けば、充分醤油の香に親しむことはできるわけである。僕だちは一度副領事から招待されて、奥様お手料理に故國を謳歌する光榮を有した。



### 倫敦の女中

そのときである。栗忠も無論同席して、十年間の出来事を僅々四五時間の一夜に語りつくさうとした。随分色々な話が出た。渡邊副領事の邸宅は東京の麴町ともいふべき閑靜な住宅に位置して、まづ上等の借家である。客間、居間、書齋、女中室、厨等六七室に湯殿附、エレベーターで上つて四階目のところにある。それで家賃は月三百圓に相當するが、倫敦では月拂でなく、一週間支拂の規約で、その一週間分が六ギニー(六十圓)で、倫敦もよいが家賃の高いのには閉口すると、副領事たるもの



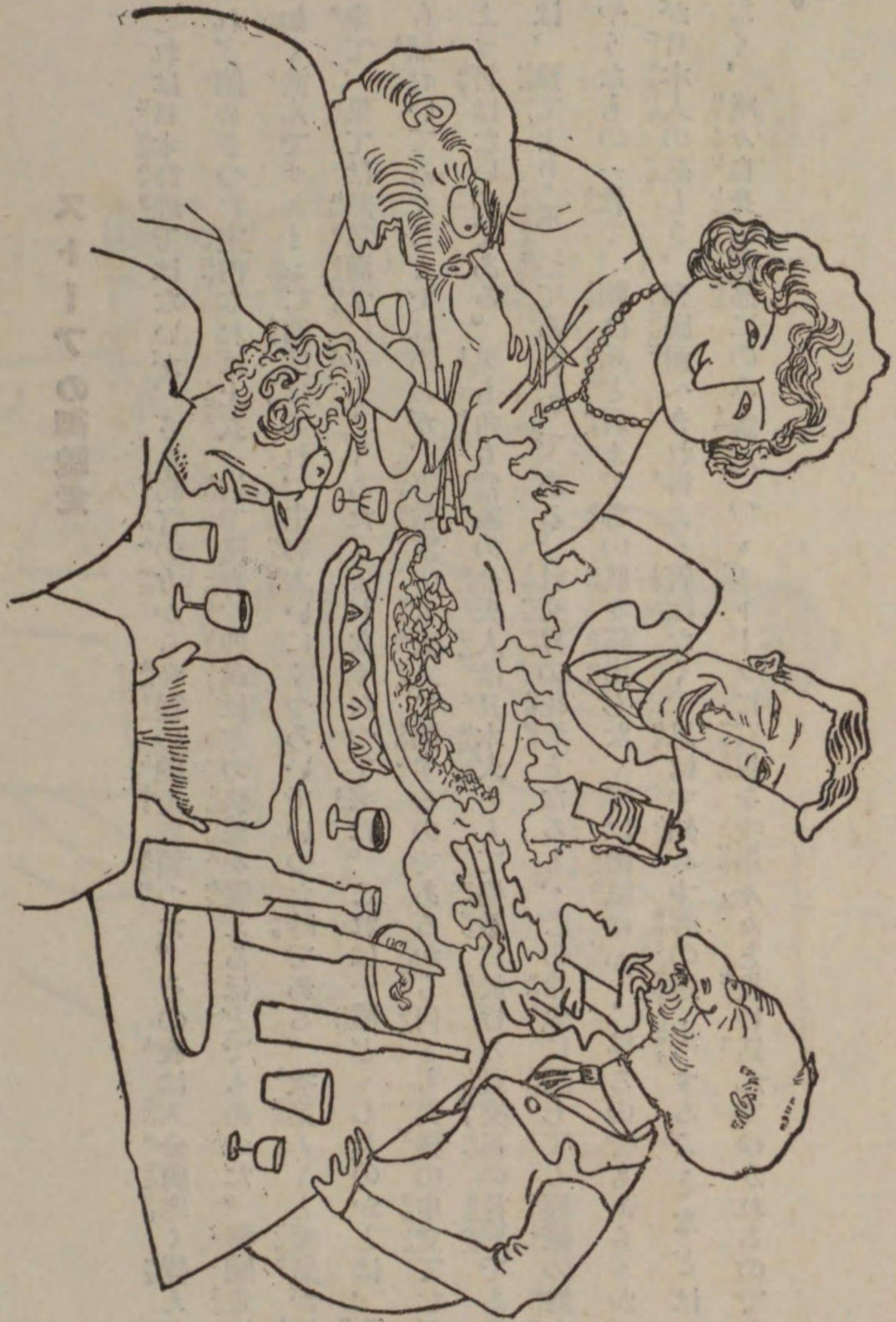
大いにこほしはじめた。倫敦の女中はまた頗る新しい。時間制度でその時間中も規定の仕事はするが、それ以外には一歩も踏み出さない。それで時間外になると、子守といへども子供が泣かうがもうふりむきもせず、さつさと歸つて行つてしまふさうだ。渡邊君のところでは雇つてゐるバーヤさんなどは日曜の公休日に酒を飲むのが無上の樂しきで、歸つて來るときにはいつもベロ／＼になつてやつて來るといふ。日本の



雇人とはまだく、餘程相違がある。

### 栗忠の愛人

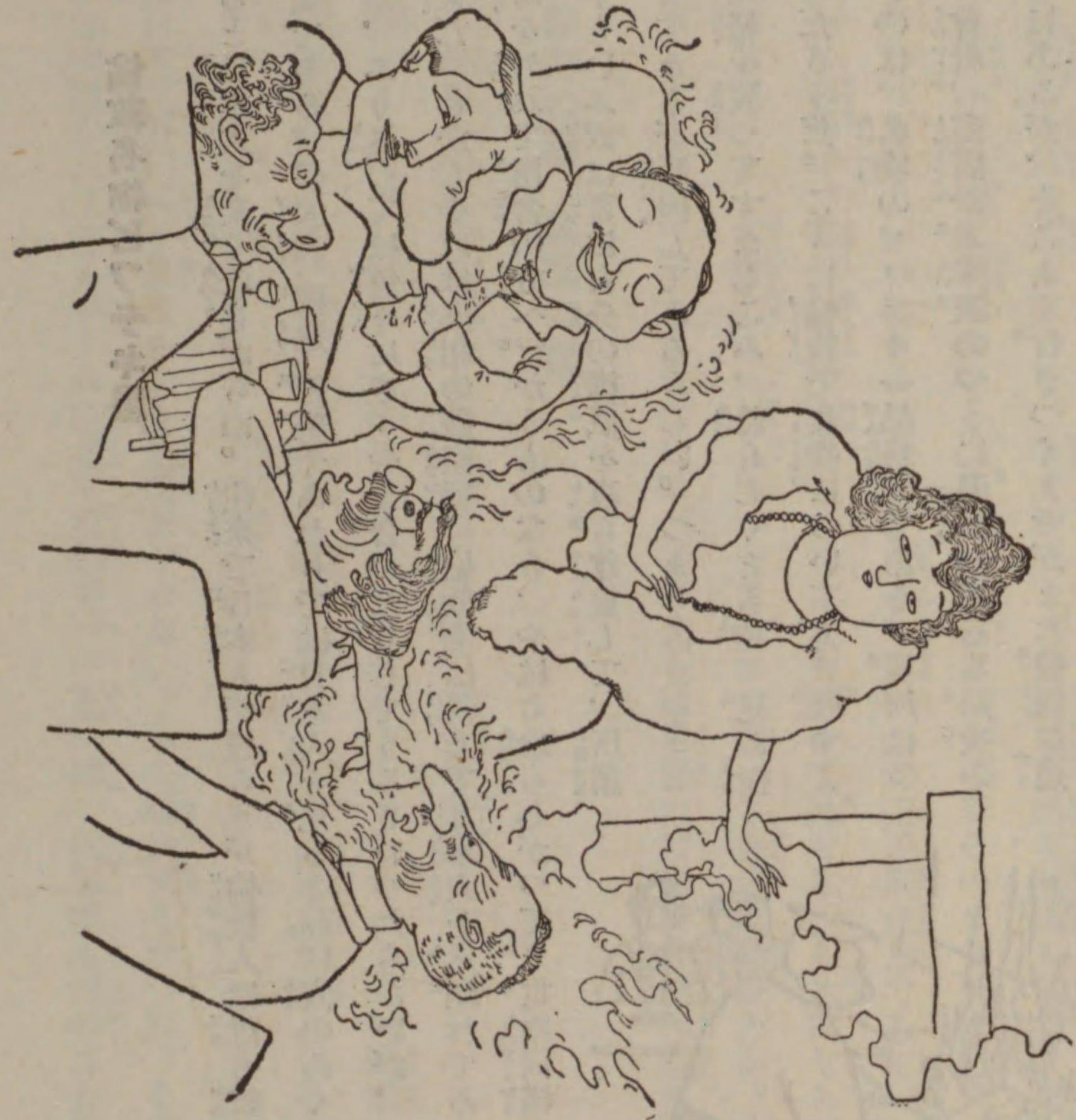
栗忠のアトリエにも一度招聘を受けた。これも同様の日本料理が表看板だが、この裏面内容は十分に變つてゐる。栗忠にとつては由緒因縁の淺くない、美しい佛蘭西婦人の愛人との共同道理の結晶だから、これ以上華麗な情趣に富んだ馳走はない筈だ。このアトリエのすぐ向ひが酒屋で、栗忠は十年以來一日も缺かしたことがない華客様々だ。客は變らないが、その十年の間に酒屋の方は三代も變轉してゐる。ビールはそこから無盡藏に運ばれるわけだ。ビールと牛肉のすき焼、これでは可成りメートルが揚る。戦争中潜航艇に包圍され糧道の盡きたとき、ハイドパークは改耕され、芋畑になつたことや、その時分女軍も大分編成されたさうだが、その女軍人と入り交つて進運中、伏せい……をやりながら男の兵士ども、女軍人の姿をのぞき見ては、如何に士氣を鼓舞されたか、全く敵弾の前に活氣縦横、寧ろ滑稽以上に突撃の効果を収め得たといふことや、爆彈を投下されたとき、その近傍を通行中のものは皆その、音響に打たれて、同時に必ず人間通有の不潔物をうち洩らしたなど、嘘のやうな話だが、栗忠君命がけの實見談であり、實驗談だから間違はない。





## ストーブの御馳走

これは日本料理ではないが、さる高官の方から晩餐の馳走に預つた。その夜は大分膚寒く覺えた。けれど閉めきつた室内なれば上衣一枚で淺春、仲秋ほどの快感を覺えるほどでもあつた。御馳走は型の如く濟んでサルーンに席は移され、主客大いにくつろいでいつた時である。次第くと暖氣が増して来て、果ては熱氣滿堂に充ちくゝるた、まれなくなつて来た。これは一體どうしたのかとは、先刻から氣付いてゐたことではあるが、事當家の令夫人に關するのであるから何とも異議の申立てなぞ出来よう筈はないのである。兎も角も當家の令夫人は日本人として倫敦に於ける社交界の花形であることは、豫てより承つてゐたのである。社交界の花形となると、この冷氣に際しても輕羅の海水着のやうなもの一枚で、腕は殆ど肩まで雪の肌を露出しなくては權威にかゝはるのでもあらうか、そこが日本人の悲しさ、到底耐へきれ得よう筈はなく、思はず知らず客の逆上することなどはお構ひなく、唯々自身の實感にのみ訴へつゝストーブに石炭を次第々と投げ込んでゆかれるのであつた。





倫敦名物ビフテキ屋

倫敦へ來ると日本人を全く珍しがらぬ。往來で日本人が通らうが倫敦人は誰も彼も見向もせず、知らぬ顔の平氣である。伊太利、獨逸、西班牙あたりでは日本人と見ると顔に穴のあくほど八方から視線を放射するし、ふり返つては色々にさゝやき合つたりしてうるさいつたらないが、この點だけは倫敦へ來ると氣樂だ。しかしそれは皮相の觀察で、倫敦では決して日本人を見馴れてゐるわけではないので、倫敦も町を外れて田舎の方へ行かうものなら、やはり珍らしがつて見世物同様に取扱ふさうだが、倫敦ツ子といふ奴は實は自分の權威を専ら尊重して、所謂倫敦氣風のおすましが原因してゐるらしい。つまりあまりコセコセしない風格を装つてすましこみ、珍らしくとも見て見ぬ振をしてゐるのださうだ。こゝに倫敦で食物について書き残すことのできないのは、名物のビフテキ一品料理である。場所はシターの銀行、會社、商店が未來派のやうに混雜してゐる路次のやうなところにあるが、そこまで行きつくまでがまた愉快な道



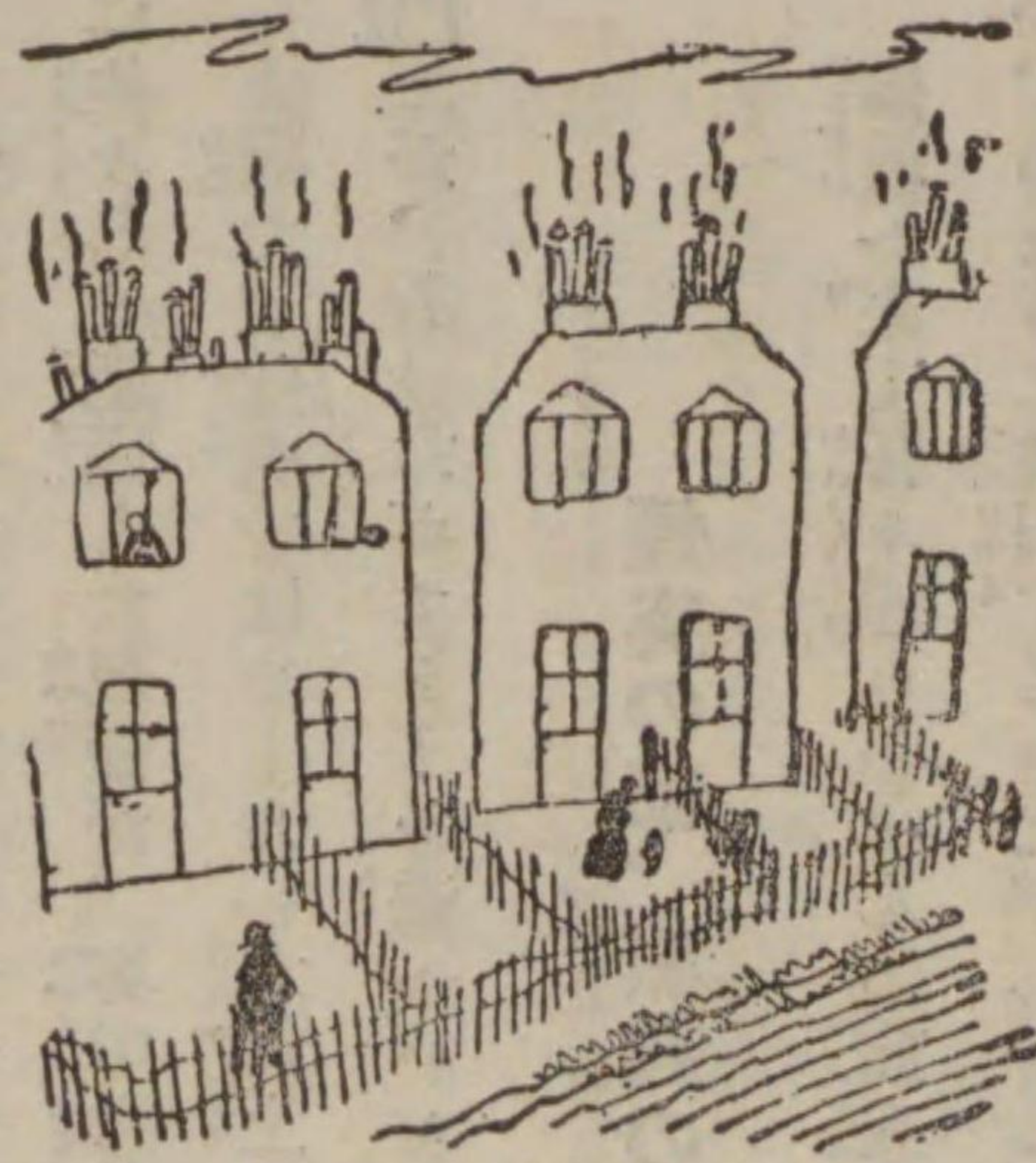
程を踏む。それは即ち近道を選ぶことで、各ビルディングの隧道小路を縦斷して行くのである。しかしこれは餘程倫敦に親んで地理に通じないと出来ない仕事だ。そこでそのビフテキ屋だ。まづ屋臺店の一世紀ばかり進化したものといつたらよからう。卓子も狭いのが二三列並んでゐて、ビフテキのやうに生々しく肥満した親爺が、客の目前で大きなビフテキを焼いて見せながら食はせる、お座敷てんぶらの類だ。此處ではビール一本以上は(一人につき)飲ませないと嚴重な掟がある。全くビフテキ専門だが、あけたポテトを添へバンも食はせる。ビフテキは自慢だけに世界的逸品だ。

煙突の都、黒霧の都

倫敦へ來て吾々通り一ぺんの旅人にもすぐ氣づくのは、有名な富豪ロスチャイルドの邸宅といふのが、あまりに貧弱なことだ。しかしそれはハイドパークに沿つて、そのパークを庭園にしてゐるのは感心だ。日本の金満家のやうに、市中に大邸宅を構へるのは大分に量見が違ふ。その代り郊外には自動車で突きつても四十分も要するほどの大邸宅を構へてゐるさうである。ハイドパークで思ひ出したが、この公園は日比谷の何十倍あるのか見當がつかない。草の緑が美しかった。その草の上林の中にベンチが數しれず置かれてゐるがそれは凡て有料で、一臺一錢、回数券も發行されてゐる。これが



また市の一大財源であると聞くと一寸驚かされる。倫敦人は日本人のやうに、家内に引込んでゐない證據にもなる。しかし如何に外光好きの倫敦人でも、秋から冬にかけての倫敦特有の名物濃霧の時期に入つたら仕様があるまい。この濃霧といふのも元來倫敦は吾等の見たところだけでも煙突の多いのに吃驚する位で、一棟の屋上には無慮三四十本から四五十本の煙突が筒を揃へて立つてゐる。それが



と自動車十臺でも二十臺でも規定の場處まで必ず引き歸させる。

皆石炭を焚くのであるから、その黒煙が凝結して落下し霧に交ると即ちそこに恐るべき黒霧が構成されるのださうだ。で、町は總じて煤けて決して美しいとは言へぬ。一年の半分をこの黒霧に閉されてしまふのだからたまらない。その陰氣な暗い感じのする町の中に、女の巡查を見かける。また女の郵便配達も見つた、無闇と二階のある自動車が走る。線路のない機關車が黒い煙を吐き出しながら、地響恐ろしく通つて行く。この混亂を整理する辻々の交通係の巡查は頗る嚴重で、違反するものがある

令夫人の運轉手

倫敦へ來ると吾々でも誰でもゼントルマンと言はれる。ところが倫敦では便所までゼントルマン扱ひだと聞くとちと落膽する。それが何處でも共同便所などでは單に男女と書して區別してあるのを此處ではレヂーゼントルマンと麗々と表示されてゐる。だが共同便所の美しいのは世界一だらうといふ評判である。伊太利の代理大使諸井さんはこの便所内で坐禪したといふ逸話も聞いたし、僕等も見物道中、三十分宛でも便所内で休憩したらと思つた位だ。但し倫敦で婦人に便所のことを聞くのは大禁物だ。

倫敦へ來ると女の自動車運轉を可成り見受ける。——亞米利加は更に一層盛んださうだが、……それが奥様操縦といふのであるから勿體至極もない。主人の送迎への用具として、自動車を濫用してゐるわけである。會社、お役所のお歸りが遅いと言つては、忽ち一走り、これでは倫敦の紳士たるものうっかり他所で鼻毛を讀まれる氣遣はない。家内安全天下泰





平、自動車も家庭團欒には缺くべからざる要具になつてゐる。

### 鐵柵に監禁

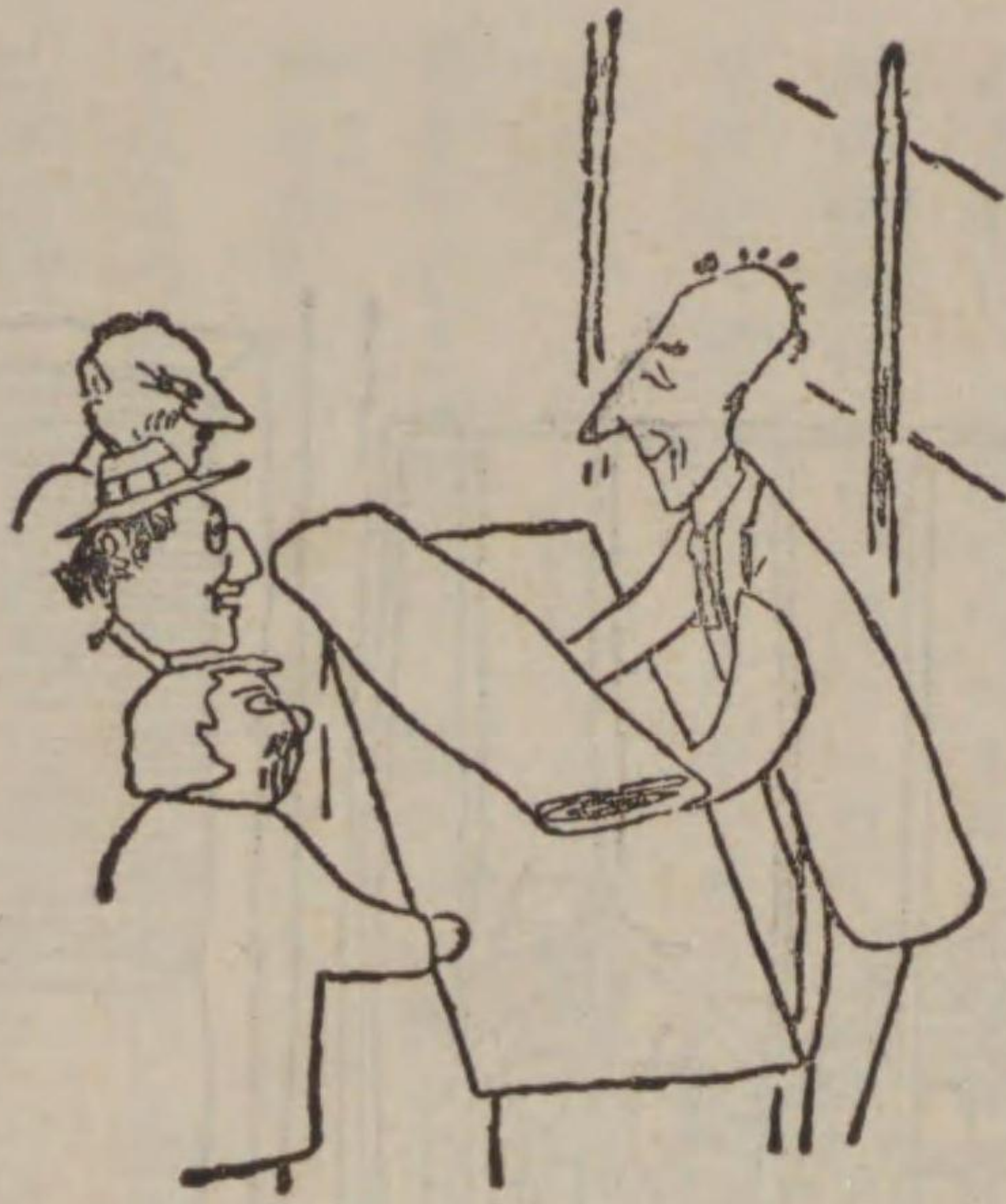
倫敦へ來ると業務時間を絶えず念頭におかぬと、とんだ目に會ふ。僕たちは、副領事の案内で、とあるビルディングの四階目に店をもつてゐる日本人の寫眞機ブローカーのところへ行つて愚圖くしてゐる暇に、執務時間の最極午後六時を突破してしまひ、周章で、駈け下つたが、もう間に合はず、出口の鐵柵は嚴重に閉ぢられて、いかな金剛力でも到底無効だ。既に全部オフィスの従業員は引上げて住宅へ歸つて行つたのである。廣いこのビルディングには最早誰一人として残つてゐるものはないのである。これには當惑した。鐵柵の外はその住宅に急ぐ人々で踵を亞ぐ賑やかさだが、吾等四人は下手をすると明朝まで、檻の中に獅子のやうに監禁されてしまはなくてはならぬ。ブローカーの富永君仕方がないからとて梯子をかつぎ出して來たが、渡邊副領事は梯子もよいがそんな眞似をして若し出るところを巡查にでも見つかつたら面倒だと心配する。外の連中は皆笑つて通る。しかし幸のこと不思議にも一人番人が残つてゐるのが、ひよつこり出て來たので、やつと明るみへ出た。もう一分遅れやうものなら大變だつた。





## 倫敦の山の手と下町

倫敦へ来て一度洋服屋を呼んで見た。最初は時間通りに来たが、最後の洋服仕上りの約束は餘程時間を超えた。西洋でも時間厳守はそんなにやかましくないやうだ。この洋服屋の番頭さん、まことに美しい禿頭の持主で、禿頭の愛嬌に富んでゐることは東西同様である。その禿頭に泡粒のやうに汗



をためてゐながら拭き去らうともせず、日本人は一人残らず自分の店へ注文するやうに、また日本人の好みは自分が心得てゐるやうに言つてなかく、鼻息が強い。ところがこの洋服屋はシテーの方で、渡邊君の倫敦紹介によると倫敦にもシテーと言ひウエストと言ふ。つまり東京の山の手下町と言ふやうなものがあつて、下町に相當するウエストの方で洋服をこしらへるとシテーよりも倍は高くとられる。それで田舎者の日本人は皆シテーの方で注文しては日本へ歸り、三越あたりへ行つて、こんな風なのをこしらへると命ずる。さういふ人が讀々來ると三越の方ではその仕立先を調

べると、それが倫敦のシテーの方の洋服屋で出来てゐるので、これが近年の倫敦スタイルかと思つて洋服屋をそのシテーへ派遣するやうになつたといふ。その實シテーは所謂安價ながら山の手型なることは是非もなく生粋の倫敦スタイルは何といつてもウエストださうだ。

## 蠟細工の名人

倫敦へ着いて吾等として先づ何はにおいても見物すべきものはナショナルギャラリー、ローヤルアカデミーとブリチツシユミユーゼウムである。が、これらはちと肩の凝る方であるからこゝには省いて、マダムタツソードの蠟細工の巧妙さを特筆しなくてはならぬ。つまり蠟細工の一大展覽會で日本なら龜八の人形といつたやうなもの。凡て蠟細工の人形を取扱つて人生の暗黒面をまざくと暴露しようと努めたもの、實に恐ろしく物凄く、戦慄すべき底のものである。若しマダムタツソードが日本にゐて、今度のやうな大震災に遭遇したら、必ずや被服廠邊の大慘狀を此處に再現すべく努力したことであらう。地下室の犯罪なぞ實に呪ふべき死の影が満場に横溢してゐるのだ。この地下室に一夜無事に過ぎたものに、何萬とかの懸賞金を懸けたさうだが、未だ會てそれほど不敵な人間は倫敦では見出すことが出来なかつたやうである。それほどそれがあまりに現實に肉薄してゐるので、血腥く凝視す





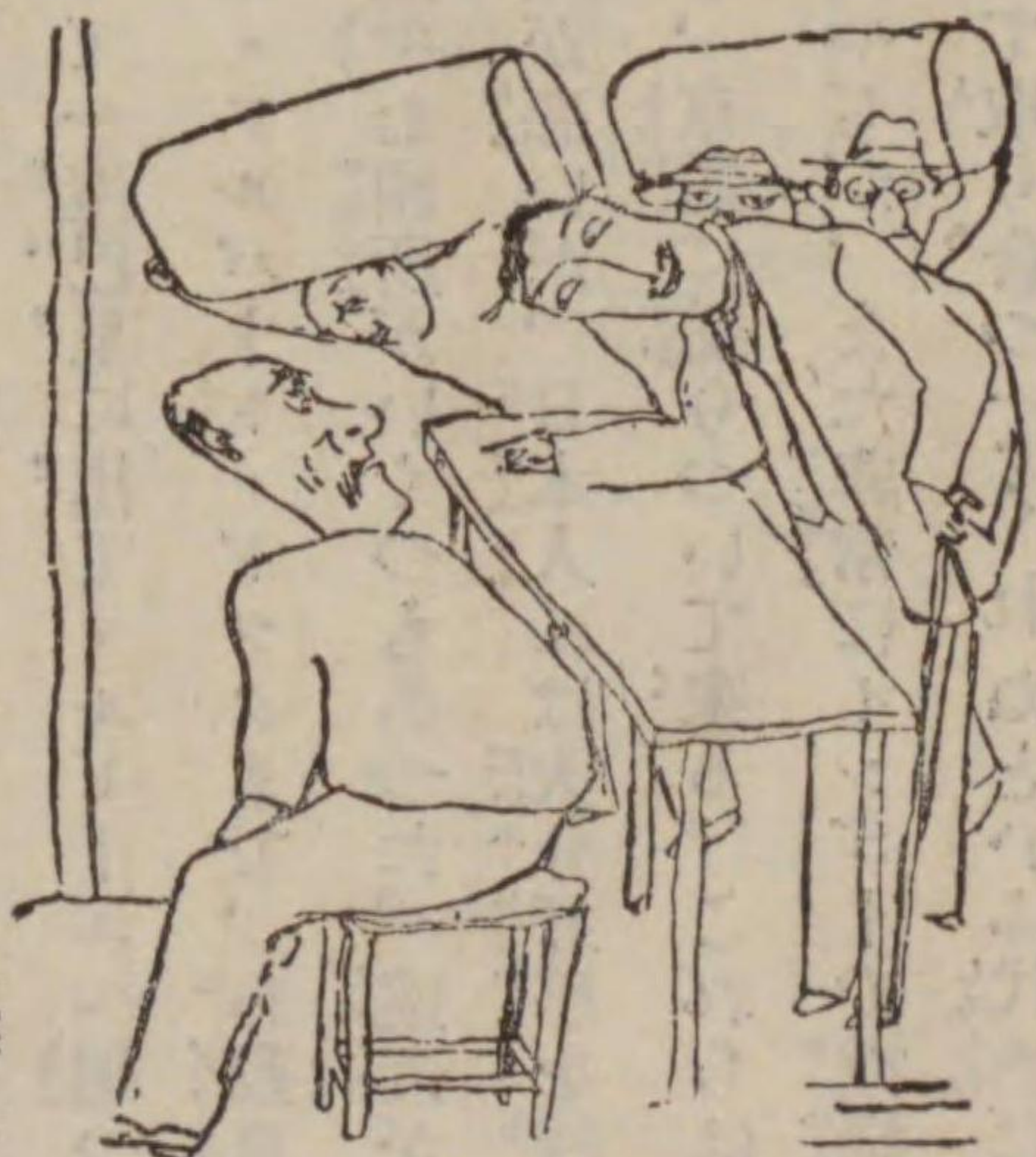
るに忍びないほどで、實にその精細な技術には感心させられる。で、滑稽なのはあまりに人間に似てるので見物の方が却つて人形に見えたり、人形が人間に見えたり妙な氣持になつてしまふが、人形のカタログ賣りがよく人間に間違へられて、言葉をかけられる。またほんものゝ巡查かと思つて、よく見ると人形だつたり、あまりに精巧を極めると、寧ろこんなに滑稽を感じるやうになる。

因 業 親 爺

いよく、倫敦を明日出立と決まつた日である。色々買物してトランク二個とまで膨脹してしまつた。この厄介物を先に榛名丸へ積み込み置き、吾等は身輕になつて一度巴里に出てマルセーユへ廻つてこの船の廻航して來るの間に合ふやうにした。即ちローヤル・アルバート・ドックまで、自動車走らす、そこまでは思つたより遠い、四十分以上も要した。途中お關所がいくつもあつた。巡查が控へてゐて、中をのぞき、日本人か、よろしい。アハ、は氣味が悪いが、日本人には大分好感を持つてゐるやうだ。ドック近くになると、何處よりか小僧が飛びつき、車體に縋りついて來る。これらは税關へ荷を運んで呉れる小勞働者である。この税關の荷物係のおやぢが、また非常にインゴで機嫌を損じた日には大變で、四時間でも五時間でも平氣で棄て、おいて取り合つてくれぬといふ代物だ



と、その邊の呼吸をちやんと呑み込んでゐる。栗忠君、僕等は決して口を出してはいけなと注意する。腫物のやうなおやぢだ此おやぢが倫敦で今時めいてゐる畫家プラングキン氏の妻君の兄さんに當るさうだ。それは兎に角、かくして無事に荷物を積み込んだが、別に一つ残つてゐる問題は保證金五十圓を納てある寫眞機の一仕事である。しかしそれも親切なセコンドスチワードの斡旋で税關吏の出張を乞ひ、キャビンの抽斗に機械全部を入れて蠟附の封印をして貰ひ、出帆の際スチワード君に保證金を受取つて貰ふことにして、首尾能く解決した。



蟲眼鏡のハイカラ

巴里への歸り道は等しくドバーカレー經由だつたが身輕ほど氣樂な旅はない。悠々たる哉、海峽の晝である。暢氣にかまへて船室の一隅に寝そべつてゐると向う側にも同じく日本人が二人、矢張り悠悠たる哉で寝そべつてゐるが、ふとその中の一人の方が僕たちの方へ近づいて来て、馴れなくしく挨拶する。これだけではあまり平凡な事實だが、彼が挨拶するに先立ち、帽を脱つたら驚いた。若く美しい貴公子は倫敦シテアの洋服屋さんのやうに年に不似合ひな、綺麗さつぱりの藥罐頭だ。ところでこの禿頭子は大分茶氣に富んでゐる。しかも頗る神經過敏と見えて、僕なれば生えて來たら、後からく、刺つて置けばよいと思ふほどの最後の残毛、それも一目で數へ得るたつた八本ばかりのやつを、中央から四本宛綺麗に分けて蟲眼鏡のハイカラを代表してゐる。しかしこれは決して凡人では出來ない仕事だと思ひ、これが不思議の因縁となつて、たうとう巴里から日本まで長旅の苦樂を共にする間柄となつてしまつた。姓は石崎、名は誠一、羅紗屋の専務取締役をしてゐる。



花の巴里

五度目に歸つて來た時の巴里は恰も新芽の盛り、マロニエの花盛りで、所謂花の巴里とも巴里の春の最中ともいふべき好季節で街樹の下にカフェエの椅子にもたれてゐると、たゞ無闇に陶然としてし



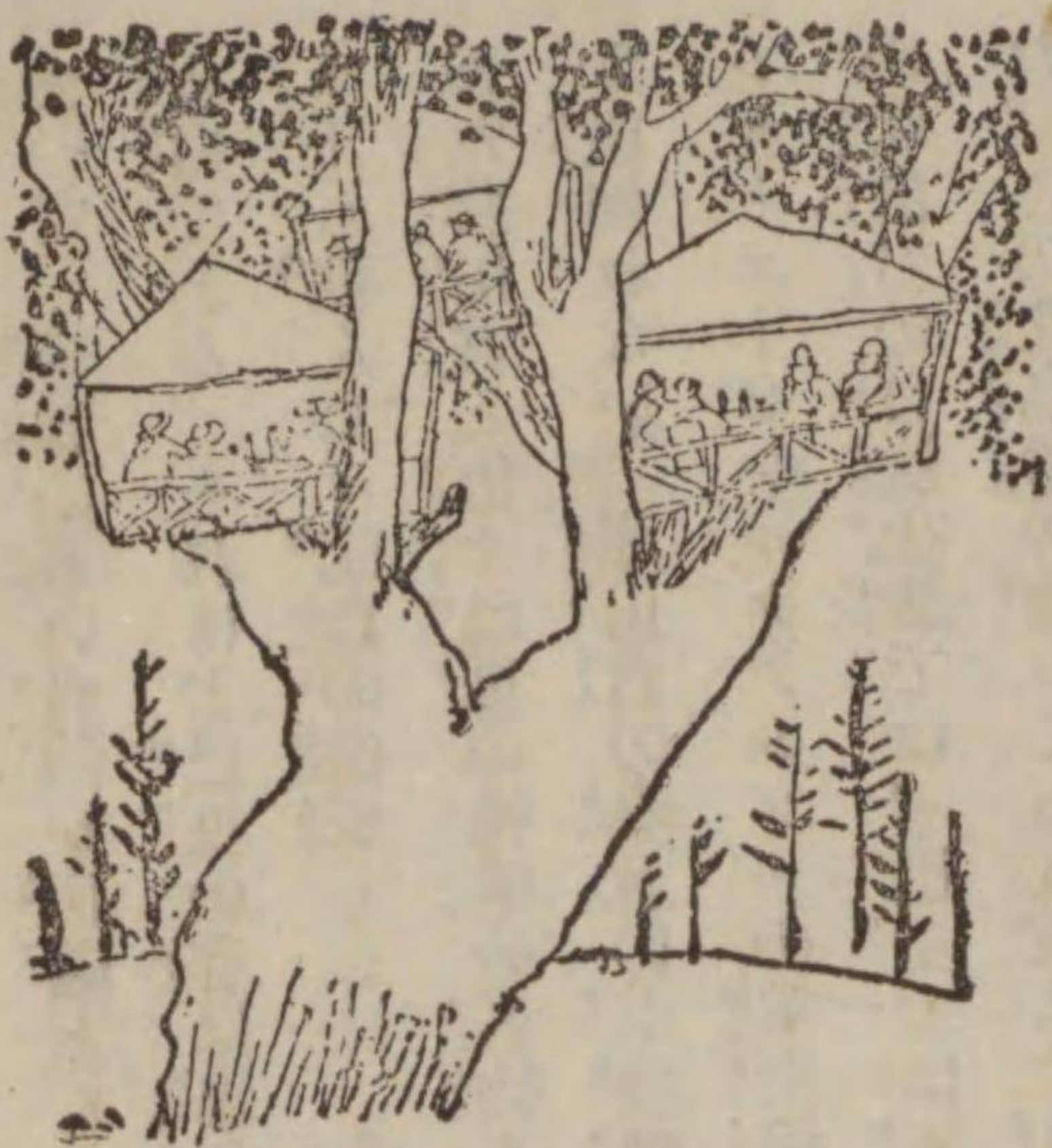
まつて、青春の若い血潮が何處ともなく全身に蘇へつて来るのを覺えた。これは形容でもなく實際の告白である。それほど巴里の春は温和である。ノートルダムにも上つた。エッフェル塔の中空でカフェーも飲んだ。記念の撮影もした。藤田君の案内で七八名揃つて踊場へ波のやうに押し寄せもした。また藤田君と色々巴里の特殊の名物を喰ひ歩いたりタクシーで公園を乗りまはつたことも幾度だつたか數知れない。藤田君の妻君の手料理や加藤君の得意のキャベツのドブ漬なども馳走になつた。ロダン・ミューゼやルクテンブルの美術館、ルーブル博物館等は幾回も足を運んだ。郊外ピアンクルの北島君の自炊生活では、巴里では下等の部に屬してゐる鯛の鹽焼で日本飯を鱈ふくつめ込んだりした。この北島君の借りてゐる家は、僕の舊友で伊太利ナポリで客死した廣瀬勝平君が住んでゐると聞くと思無量であつた。前通の川ぶちにはボブリエがスイ〜立つて、川を隔て、ロダンの舊宅のあゝるムードンの丘が霞んでゐる。夏になるとこの川から、巴里の町の中まで乗合の小蒸汽が出ると聞いた。やがて鈴木、大寺の兩君もこのピアンクルに移轉して來ると言つてゐた。巴里の競馬はまた巴里名物の一つだ。それへも行つて見た。巴里では書きたいことが數知れずあるが、これ位でやめておかう。





## 樹上カフェー

郊外といへば本號の口繪に書いたロバーソンの樹の股カフェーとも樹上カフェーともいふのが振つてゐた。何でもルクサンブル公園近所の停車場から、汽車で一時間ほどで行けた。それが最初の誰やらが樹上カフェーがあるとだけ聞いて、それは珍らしい一度行つて見たいものだと思つたが、その所在地を聞いておくことを忘れてしまつた。で吾等日本人なればこそ樹上カフェーで通じやうが、巴里



人には別に何とか稱號があるに違ひなく、一日大寺君のゐるシチー・ホテルへ行つて女中のマデレーンに聞いたが分らずこれもまたたうとう畫解をして、やうやくそれとつきとめることができたが、その時は宿の主婦さんが地圖を持ち出して来るやら、大騒ぎをして、ともかくもロバーソンといふ村にそんなものがあるといふことだけ會得することができた。さてこのロバーソンであるが、長閑な林の多い小さな村で、何といふ木かしらぬが何本か大木があつて、その木の中空の樹

の股には鳥の巢のやうに、茶店がぶらさがつてゐる。中には一樹に三軒も家がなつてゐるのもあつて一寸奇觀だ。それへ上るには樹幹をめぐつて螺旋狀に粗末な階段が出来てゐる。その樹上カフェーは一軒に少くとも十人以上の客を收容することが出来さうだ。料理もできるのであるから、或は樹上レストランといふ方が適當かもしれぬ。その料理などは皆釣瓶で繰り上げる仕掛も愉快である。何しろ此處は巴里人の遊園地になつてゐて、鶴見の花月園のやうなものではあるまいか……但し入園料はとらぬが、さういふ場所だけに、樹上、空に近く漂渺としてゐると注文もしないのに無闇と料理を運んで来ては、此處のガルソン素敵にお世辭を振撒く。また此處は巴里の腕白小僧のために驢馬が大流行だ。驢馬に乗つて日曜一日を林から林の奥まで乗りまはす連中もあれば、鞭の先に餌をくゝしつけ、驢馬の鼻先へぶらさけて、無性な驢馬を操るなぞ、遺憾なく巴里人の茶氣を發揮してゐる。で僕たちは、特にロバーソンを驢馬村と命名したりした。

## 巴里よおさらば

いよいよ巴里を去り、歐羅巴を後になつかしい故國へ向ふ日が来た。やはり、北島君がマルセーユまで見送つてくれることになつてゐる。北島君は昨日から泊り込んで昨日も岡田九郎君と二人で、色



色買物の案内をしてくれたり、その荷造の手傳ひ迄してくれた。リヨン驛を出立する汽車は晩の七時五十五分なので、旅立つ心に大分餘裕があつた。我田先生の處へ暇乞に行つたり、銀行へ金を出しに行つたりした。鈴木君も来る大寺君も来た。出立間際には藤田君も駆けつけてくれた。ホテルの自動車の屋根に荷物全部を積み込んだ。一同乗らうとするところへ坂崎氏も来てくれる。かくして僕の巴里を去る日は實に華やかなものであつた。停車場へつくと岡田君と北島君が荷物をすつかり小荷物として預けてくれた。乗車切符や寢臺券はホテルで買つて置いたから樂なものだ。そこへ和田先生も態見送りに来てくださる。加藤君も僕と一緒に歸朝の途につくことになつてゐる。永地、堀、間部、中村順の諸氏も来てくれた。随分賑かで巴里にゐる心地はしない。また他の日本人もなか／＼乗り込む。等しく榛名丸へ乗らうとする連中だらう。その中には村山醫博や莊軍醫閣下もゐて、和田先生から紹介されたりした蟲眼鏡の高襟、石崎君及び柴崎君一行も榛名丸組で、加藤君と前後して乗り込んで来る。その時加藤君の荷物はと見ると大變だ。十何個といふ荷物をポーターに曳かせて来る。車室へそれを押し込



まうとしたら車掌が規定以上だといつて承知してくれぬではといふので、皆の處へセバレートしてこの急場を取りつくろつた。それでも車掌はまだ不機嫌でブツ／＼と言つて不機嫌である。寢臺は僕と北島君、石崎氏と柴崎君、加藤君は一人離れて外人と一緒にだつたので、これも不機嫌だ。そこへ藤田君が辨當を五人前と煙草を買つて来てくれた。この汽車は食堂車がないので、この辨當がどんなに役立つたか知れない。かくして實に花々しく巴里を出立したのであつた。しかし鈴木君、大寺君とは最初から殆ど行を共にしてゐたのだから自分だけ先に歸るのは忍びなかつた。二人の顔には淋しい影が浮んでゐた。和田先生とは痛いほど強い握手を交した。藤田君が別れにくかつたと見えて、随分いつまでも帽子を振つてゐた。

車掌の不服

辨當は箱入で炭酸水が一本宛添へてあり、パンとチーズ、肉も二種、鹽まで用意され、ホーク、ナイフ、紙製のコップなど、流石に巴里は洒落てゐて、規定以上の荷物を積み込んだので車掌不機嫌であるが、三人で相談して先づ二十五法のチップをやつたらいよく不機嫌でつツ返してよこした。フ、フ、フ、足りないのだらうと思つて、今度大奮發で六十法やつたら、急に笑顔になつて、それからといふも





れ、重荷を下ろしたやうにはつとし、がつくりとした。甲板を吹く風も何ともいはれず涼しく心地よい。しかしまたしても此處に北島君と別れねばならぬ。北島君は僕を最後まで見送つてくれて。一人遙々巴里へ歸つて行くのである。船は翌朝まで出帆が延び、その十一時に初めて波を割つて動き出した。(をばり)

のはお世辭だらく、あまりに現金すぎる。

マルセーユへ着いたのは翌朝の九時半であつた。宿は電報でレザブしておいたループル・ホテル實は此處に一泊して翌日丁度出帆になる豫定だつたところ、榛名丸。今夕出帆すると聞いて、また急に日程の變更を見たわけである。で、ホテルでは朝食をとつただけ、午後三時にはもう榛名丸へと乗り込んでしまつた。船へ乗つてしまふと、最早このまゝで日本に歸り着くことが出来るのだと思ふと、わづらはしい旅の凡てから解放され、

昭和三年十二月十五日印刷  
昭和三年十二月二十日發行

現代ユウモア全集

近藤浩一集



第九卷

著者 近藤浩一路

發行者 相賀武夫  
東京市神田區淺神保町六番地

印刷者 東勇治  
東京市小石川區久堅町百八番地

東京市神田區表神保町六番地

小學館・集英社内

現代ユウモア全集刊行會

電話神田二六四八番・振替東京七八三三七番

發行所

共同印刷株式會社印刷

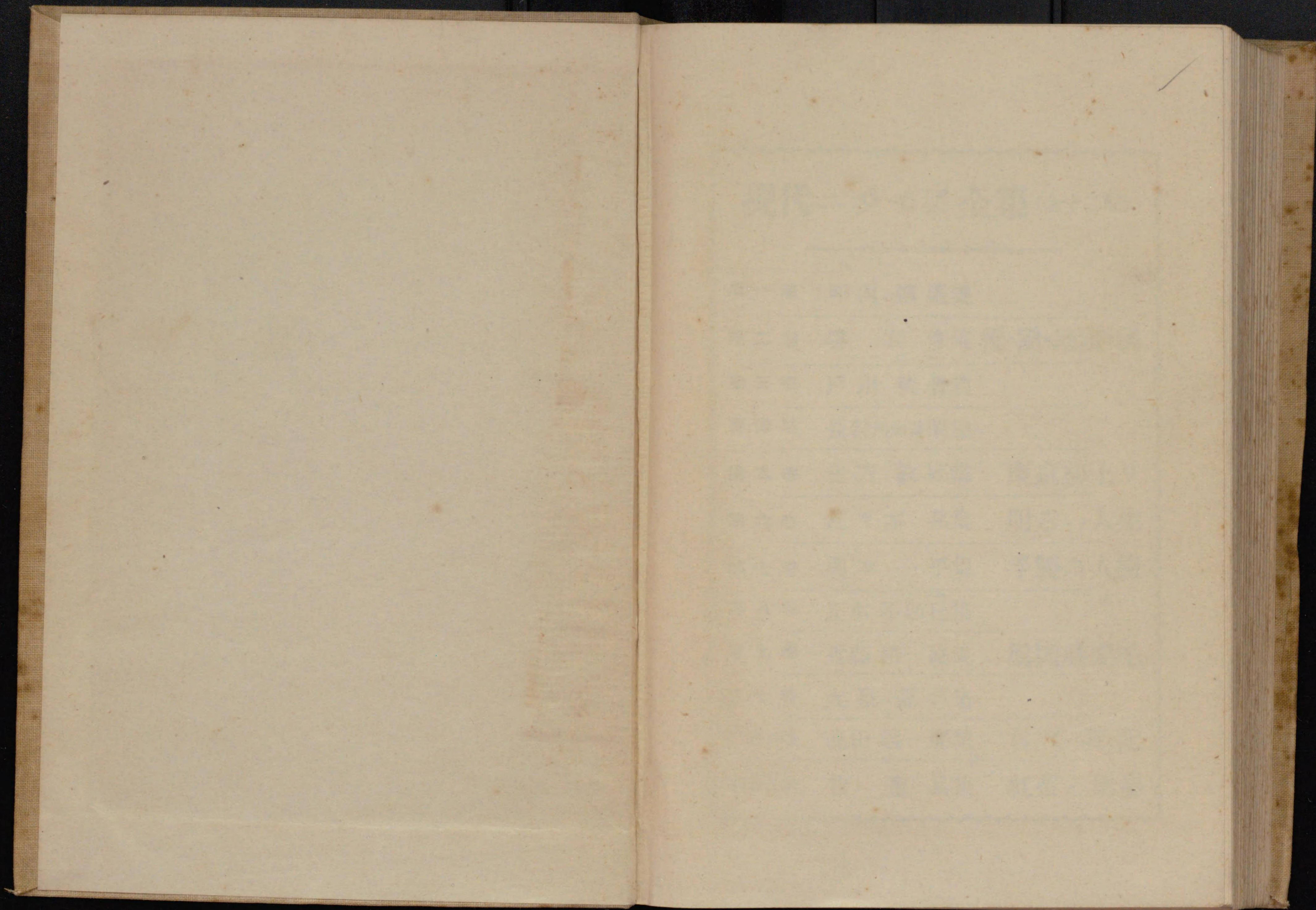
關川製本所納



現代ユウモア全集 (全十二卷)

- 第一卷 坪内 逍遙集
- 第二卷 堺 利彦集 櫻の國・地震の國
- 第三卷 戸川 秋骨集
- 第四卷 長谷川如是閑集
- 第五卷 生方 敏郎集 東京初上り
- 第六卷 佐々木 邦集 明るい人生
- 第七卷 岡本 一平集 手製の人間
- 第八卷 正木 不如丘集
- 第九卷 近藤 浩一路集 異國膝栗毛
- 第十卷 大泉 黒石集
- 第十一卷 高田 義一郎集 らく我記
- 第十二卷 牧 逸馬集 紅茶と葉巻







MADRID



ROMA

KÖLN

SINGA  
PORE

COLUMBO

BERLIN

ANTWERP

KOBE

SHANGHAI



VENECIA

SUEZ



VERSEILLE

ESPANA

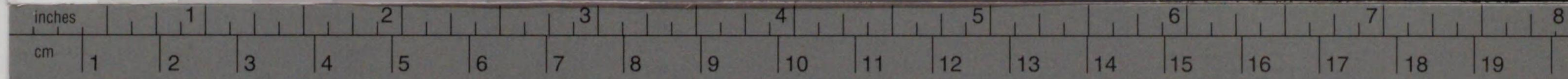


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

